258.2
101

成田山五事業大正十一年報

大正十一年六月發行

始

露光量違いの為重複撮影

258-101

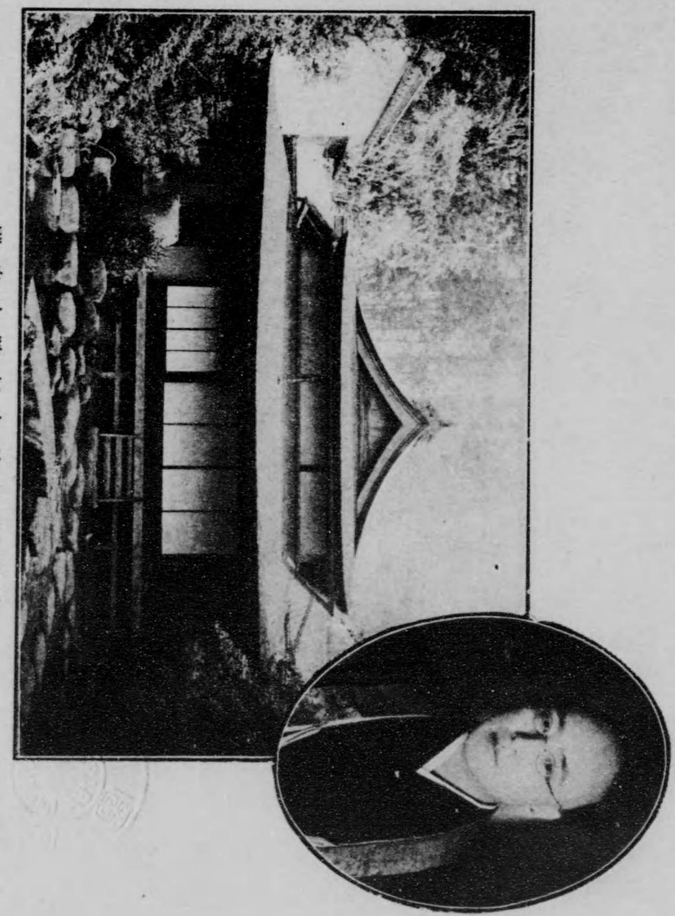
成田山新勝寺大師堂

目次

成田中學校一覽……一
成田高等女學校一覽……三三
成田幼稚園一覽……五一
成田山感化院一覽……六三
成田圖書館一覽……七九
以上

露光量違いの為重複撮影

258-101



殿奥寺勝新と首貫山田成

目次

成田中學校一覽……一
成田高等女學校一覽……三三
成田幼稚園一覽……五一
成田山感化院一覽……六三
成田圖書館一覽……七九
以上

威田山正面

殿客寺勝新

成田中學校一覽

沿革大略……一
學曆……二
成田中學校校則……四
職員表……一〇
生徒表……一一
英護義塾卒業生人名……一五
卒業生人名及現況表……一七
卒業生及生徒郡別表……三二
經費……三二

大正
11. 6. 23
内交

校歌

東京女子高等師範學校教授
文學士 柴舟 尾上八郎氏作歌

學習院教官
玉巖 小松耕輔氏作曲

一

戰はをさまりはてゝ
ほがらけき東のみそら
燦爛と日てそはのぼれ
さめよさめよ成邱の健兒

二

靈域は不落のとりで
御すがたは降魔の守
葉牡丹の校旗のもとに
つどへつどへ成邱の健兒

三

勤勉と克己と慈悲と
忠勇と剛毅と素朴
楯となし劍となして
立てよ立てよ成邱の健兒

四

全世界再び捲きて
起るべき平和のいくさ
光ある勝利の冠
とれよととれよ成邱の健兒

（第十八回卒業生寄贈）

（備考 音域高き時は一調にて歌ふも可なり メトヒノオム 一＝88）

校學中田成

生業卒回一十二第及員職教

私立成田中學校一覽

（大正十一年四月卅日現在）

◎沿革大略

私立成田中學校は明治三十一年十月七日文部大臣の認可を得て舊成田英漢義塾を改稱したるものにして、岡書館女學校幼稚園感化院と共に成田山新勝寺の施設せる公共事業の一部に係る。

英漢義塾は明治二十一年八月新勝寺先代の住職正七位大僧正三池照鳳師が有志石川甚兵衛（先代）、諸岡勝太郎（先代）、其他の諸氏と謀り地方の公共教育機關として設立したる中等學校にして、全く三池師の篤志に出生したるなり。修業年限三箇年の規定にて高等小學校卒業以上及び其と同等の學力あるものを收容せり。宮村三多氏最初の塾長に任命せられ二十三年一月に至りて濱田義雄氏其跡を襲ふ此年第一回の卒業生を出す己にして濱田氏辭任。福山龜太郎氏來任せしが二十四年二月に至り和田玉一氏代り立てり。二十九年六月塾主三池師入寂せられ現貫首大僧正石川照勤繼で塾主となる。三十一年七月新勝寺院代少僧正服部照和師當時在歐中の塾主の囑託を受けて中學校認可を文部大臣に稟請す、次で千葉縣知事安部浩氏臨校せらる。十月七日成田中學校と改稱の件認可下る。三十一年十一月文學士喜田貞吉氏校長に任ぜらる。三十二年三月文部次官奥田義人、商工局長木内重四郎兩氏臨校せらる。八月喜田氏辭任。竹内楠三氏來り代る。

此時まで學校は成田町字東谷なる。現圖書館の地所に位置せしが中學校認可と共に現在校舍の土工を起し三十三年六月落成す。淺井造、宮田半左衛門、諸岡市郎左衛門（先代）、飯倉郁太郎の諸氏及評議員三橋金太郎氏建築委員として盡力せり。三月校主歸朝す。六月二十七日落成式を擧行す。文部大臣樺山資紀氏以下朝野の名士多數の參列あり。先是三十三年三月文部省告示第五號により徴兵猶豫の特典を附與せらる。又四月十日校旗授與式を行へり。三十四年七月竹内氏辭し校主石川照勤校長を兼ねて今に及ぶ。三十五年四月中學校となりての第一回卒業生を出す。知事代理來臨、七月栗根鐵藏氏校長事務代理を命ぜらる。三十六年三月第二回卒業生を出す。板垣退助伯來臨せらる。三十七年三

月第三回卒業式を行ひ千葉縣知事石原健三氏臨校、三十八年三月第四回卒業生を出す千葉縣知事代理臨席。三十九年三月第五回卒業生出づ、千葉縣知事代理臨席。四十年三月第六回卒業生を出す。四十一年三月第七回卒業生を出す。九月文學博士白鳥庫吉氏に本校顧問を囑託す。同月校長事務代理栗根氏辭任。文學士葛原運次郎氏來任。次で校長事務代理に校務主監の名稱を附す。四十二年三月第八回卒業生を。四十三年三月第九回卒業生を。四十四年三月第十回卒業生を。四十五年三月第十一回卒業生を　大正二年三月第十二回卒業生を送る。大正二年七月葛原主監辭任し文學士佐竹元二氏主監に任命せらる、大正三年三月第十三回卒業生を送る。大正四年三月文部省普通學務局長田所美治氏臨校せらる。大正四年三月第十四回卒業生を送る。大正四年六月生徒控場改築落成す。大正五年三月第十五回卒業生を送る。大正五年三月佐竹主監辭任。文學士佐藤禮云主監に任ぜらる。大正五年四月文部省參政官大津淳一郎氏の臨校あり。大正六年三月第十六回卒業式を行ひ文部大臣代理、千葉縣知事代理、陸軍大將福島安正閣下及上田文科大學長等臨校せらる。大正七年三月第十七回卒業式を行ひ千葉縣知事折原巳一郎氏臨席せらる。大正八年三月第十八回卒業式を行ふ、千葉縣知事代理臨校あり。大正八年四月佐藤主監辭任。大正八年七月濱田丑之助氏主監に任ぜらる。大正九年三月第十九回卒業式を行ふ千葉縣知事代理臨席あり。大正九年九月濱田主監辭任。同年同月文學士名川彦作氏主監に任ぜらる。大正十年三月第二十回卒業式を行ふ。大正十一年三月第二十一回卒業式を行ふ千葉縣知事折原巳一郎氏臨席せらる。

◎學　暦

四　月

一　日　第一學期開始、始業式、入學式、午前八時始業、

中　旬　一日遠足

下　旬　身體檢査

五　月

中　旬　一泊旅行

六　月

一　日　夏服着用、服裝檢査

初　旬　野球小會、庭球小會、文藝部小會

七　月

中　旬　第一學期試驗

第一學期終業式

廿一日　夏季休業始

八　月

卅一日　第一學期終

九　月

一　日　第二學期開始、始業式

十　月

一　日　冬服着用、服裝檢査

七　日　創立紀念日

中　旬　武道小會、野球庭球大會、文藝會、修學旅行

卅一日　天長節祝日

十一月

一　日　午前九時始業

上　旬　遠足又は長距離競走

中　旬　發火演習

十二月

中　旬　第二學期試驗

下　旬　第二學期終業式

廿六日　冬季休業始

卅一日　第二學期終

一　月

一　日　第三學期開始、新年拜賀式

七　日　冬季休業終

八　日　第三學期始業式

中　旬　五年級生徒志望調査

武道寒稽古

下　旬　次學年教科書選定

二　月

十一日　紀元節

中　旬　武道大會、文藝會

下　旬　校友會誌發行

三　月

上　旬　第五年級卒業試驗

第五年級終業式

中　旬　第四年級以下學年試驗

第四年級以下終業式

中　旬　卒業式

下　旬　入學試驗

入學試驗合格者發表

卅一日　第三學期終

◎成田中學校校則

第一章　總則

第一條　本校は男子に須要なる高等普通教育をなすを以て目的とし特に國民道德の養成に力む

第二條　本校の修業年限を五箇年とし一年を以て一學年とす

但學年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第三條　一學年を分ちて三學期とす左の如し

第一學期　四月一日より八月三十一日に至る

第二學期　九月一日より十二月三十一日に至る

第三學期　一月一日より三月三十一日に至る

第四條　休業日左の如し

各日曜日、開校紀念日（毎年十月七日）大祭日、祝日、夏季休業（七月二十一日より八月卅一日に至る）冬季休業（十二月二十五日より一月七日に至る）

第二章　學科課程及授業時間

第一條　各學科の配當幷に毎週時間數は別紙に依る

第三章　試驗

第一條　試驗を分ちて學期試驗學年試驗の二種とす

第二條　學期試驗は其學期間に授業せし科目に付之れを行ふ

第三條　學年試驗は學年の終に於て該學年間に授業せし全學科に付之れを行ふものとす

第四條　試驗の評點は各一學年毎に百點を以て最高點とす

第五條　各教員は其受持學科に就き日課點を附す

第六條　各學科の學期試驗評點は其學期中に於ける日課點の平均點と學期試驗點とを加へ其和を二除したるものとす

第七條　各學科の學年試驗評點は第一第二學期試驗評點と學年試驗評點とを加へ其和を三除したるものとす

但第三學期の平常點は學年試驗の成績に參酌するものとす

第八條　各學年の學年評點五十點以上總約點六十點以上を得るにあらざれば進級するを得ず但一學科四十點以上のもの三學科以内なるときは進級せしむることあるべし

學科課程毎週教授時數表

科目＼學年	第一學年 時數	第二學年 時數	第三學年 時數	第四學年 時數	第五學年 時數
修身	一 生徒心得、教育ニ關スル勅語、作法	一 道德ノ要領 作法	一 同	一 戊申詔書、道德ノ要領 我國道德ノ特質、作法	一 同
國語及漢文	八 國語講讀、漢文講讀、作文習字	八 同	六 國語講讀、漢文講讀、作文、文法、習字	六 國語講讀、漢文講讀、作文、文法	六 國語講讀、漢文講讀、作文
外國語	六 發音綴字、讀方及譯解、話方及作文書取、習字	七 讀方及譯解、話方及作文書取、習字	七 讀方及譯解、話方及作文書取、文法	七 同	七 讀方又譯解、話方及作文、書取
歷史	三 日本歷史	三 日本歷史	三 外國歷史	三 同	三 日本歷史、外國歷史、自然地理概說、人文地理概說
地理	三 日本地理	三 滿洲地理 世界地理	三 世界地理	三 同	
數學	五 算術	五 代數	五 代數、幾何	五 同	四 代數、幾何 三角法
博物	二 植物、動物	二 同	二 動物生理及衛生	二 鑛物、博物通論	
物理及化學			二 物理、化學	四 同	四 同
法制及經濟					二 法制、經濟
圖畫	一 自在畫 用器畫	一 同	一 同	一 同	一 用器畫
唱歌					
體操	三 體操教練及遊戲（擊劍及柔術）	三 同	三 同	三 同	三 同
計	三九	三〇	三〇	三一	三一

第九條　學年試驗に正當の事故の爲め豫め屆出の上缺席したるものは追試驗を行ふことあるべし但此の場合に於ては其得點の十分の二を減じ之れを試驗點と定む

第四章　入學及退學

第一條　生徒の入學は毎學年の始とす但缺員あるときは學期の始めに於て募集することあるべし

第二條　本校第一年級に入學を許すべきものは尋常小學校第六學年卒業のものは其卒業證により其他の志願者は入學試驗に合格せるものを取る但尋常小學校第六學年卒業の者と雖も志願者の數募集人員に超過するときは入學試驗を執行すべし

第三條　第一年級の入學試驗は尋常小學校第六學年を修了したるものに對しては讀書、作文、習字、算術の四科目に就き其他の志願者に對しては尚ほ日本地理、日本歷史を加へ尋常小學校第六學年卒業以上の程度に依り試驗を行ふべし

第四條　第二年級以上に入學を許可すべきものは相當年齡に達し其學級に相當する學力試驗に合格したるものに限る

第五條　他の中學校より轉學せんと欲する者ある時は缺員ある場合に限り入學を許可することあるべし但前學校と學科の配當に差異あるときは其學科に限り試驗を行ひ前學校と同年級或は一級下に編入す

第六條　凡て本校に入學せんと欲するものは體格檢査を施し合格せざるものは入學を許可せず

第七條　入學志願者は左の書式に依り入學願書に履歷書を差出すべし但尋常小學校六學年以上の課程を了へたる入學志願者は更に修業證書又は卒業證書を添へ該書なき者は校長又は首席訓導の證明書を添ふべし

入學願書（用紙半紙二つ折）

私儀御校何年級に入學志願に付御許可相成度此段奉願候也

年　月　日

住所族籍
戶主誰子弟
姓　名　印
生年月日

成田中學校長　何誰殿

履歷書（用紙半紙二ッ折）

本籍何府縣何市何郡町村何番地
現在、、、、、、
族籍、戶主に非れば誰子弟
姓　名
生年月日

一何年何月より何年何月まで何學校に何學修業
一何年何月何學校を卒業
一、、、、、、
一何年何月何の廉に付何賞或は何罰を受く
右之通相違無之候也

年　月　日　右
姓　名　印

第八條　入學の許可を得たるものは一週間以内に左式の在學證書幷に戶籍謄本を差出すべし

在學證書（用紙半紙二ッ折）

保證人の印

印
參錢收入印紙

私儀今般入學御許可相成候に付ては在學中御規則命令等堅く遵奉可仕候也

住所
誰子弟
族籍
姓　名　印
生年月日

前記之通相違無之候に付拙者保證人に相立ち御規則命令等堅く相守らせ本人に關する事件一切引受可申候也

住所
族籍職業
保證人　姓　名　印

年　月　日

成田中學校長　何某殿

右保證人は丁年以上の男子にして本町(村)内に於て一家計を立つる者に相違無之候也

年　月　日　何府何縣何國何郡市何町村長　何　印

第九條　保證人は父兄親戚又は後見人中丁年以上の男子にして一家計を立つる者に限る

第十條　保證人は豫め本校長の承諾を得たるものたるべし

第十一條　保證人の資格上不適當と認むるときは之れを變更せしむることあるべし

第十二條　左の場合に於ては退學を命ず

(一)性行不良にして改善の見込なしと認めたる者

(二)學力劣等にして成業の見込なしと認めたる者

(三)引續き一箇年以上缺席したる者

(四)正當の事由なくして引續き一ヶ月以上缺席したる者

(五)授業料怠納二ヶ月以上に亘るもの

(六)疾病事故に因り學業を履修する能はざるものと認むるもの

(七)出席常ならざるもの

第十三條　中途退學せんと欲するものは保證人連署を以て其理由を具し願出づべし

第五章　授業料

第一條　授業料は一ヶ月金貳圓五拾錢とす

第二條　生徒在學中は出席の有無に拘はらず毎月五日迄に納むべし但毎年八月は納むるを要せず

第三條　授業料納付期日を過ぎ五日以内に尚ほ納めざるものは納入濟まで停學を命じ保證人をして之を納めしむ

第四條　入學の許可を得たるものは入學金壹圓を納むべし

第五條　左の各項に該當するものは授業料を減免す

一學力優等品行方正にして他生の模範たるべきもの

一戰時若しくは事變に際し召集せられたる者の子弟

一貧困にして資力なく學力品行中等以上なるもの但此第三の場合に於ては父兄又は後見人より特に願書を差出さしめ又本人に對しては相當の義務を負はしむ

第六章　賞　罰

第一條　品行方正學術優等の者には一學年間の授業料を免除し又は賞品賞狀を授與することあるべし

第二條　規則命令に違背し又は風紀を害するものは戒飭、留置、停學、放校の罰に處す

第三條　學校の建物器具器械標本等を毀損又は亡失したるときは相當の賠償をなさしむることあるべし

第七章　寄宿舍

第一條　寄宿舍は本校生徒にして父兄及保證人の住宅より通學し能はざるものにして寄宿せしむる所とす但場合により下宿を命ずることあるべし

第二條　寄宿生は食費及舍費を毎月五日以内に納むべし若し故なくして期間内に納めざる者は退舍を命じ未納の費額は保證人より追徴す

但食費の外電燈料の實費を徴集す

第三條　入舍の許可を得たるものは左の保證書を差出すべし

保證書　（用紙半紙二ッ折）

參錢印入
收紙

御校何年生某儀今般寄宿舍へ入舍致し候上は本人入舍中金員物品の辨償は勿論本人身上に關する一切の事件負擔可仕候仍て保證書如件

年　月　日　住所番地族籍
保證人　姓　名　印

成田中學校長　何誰殿

第四條　保證人に異動あるときは直ちに屆出相當の手續をなすべし

第五條　退舍せんと欲するものは事由を記し保證人連署の上願書を差出し許可を受くべし

第八章　服　制

第一條　生徒登校の時は必ず制服制帽を用ふべし

第二條　制帽の地質は黑羅紗にして本校の徽章を附すべし

第三條　制服はジャケット製ホック止めにして地質は紺色又は黑色のヘル若くは小倉織を用ふべし

但し夏服は小倉の霜降とす

第四條　制服を未だ調製せざるもの若くは汚損したるものは許可を得て代用服を着用すべし

第五條　代用服は筒袖にして袴を着用すべし

第六條　制服又は代用服を着用するにあらざれば教場に入るを許さず但新入學生に限り指定の期間中制服調製の間は代用服を許す

◎職員

受持學科	職名	姓名	本貫	就職年月日
	校主兼校長	石川照勤	千葉縣	大正六年十月
	顧問（從六位文學博士）	白鳥庫吉	千葉縣	
修身 法制 經濟 英語	主監兼教諭（從六位文學士）	名川彦作	新潟縣	大正九年十月
數學	教諭（正八位）	相田喜之助	埼玉縣	大正七年四月
英語	教諭	秋山篤英	千葉縣	明治三十九年十一月
地理 歷史 國語 漢文	教諭	大石雅次郎	福岡縣	大正九年十一月
歷史 國語	教諭	丸山錦吾	長野縣	明治四十四年十月
國語 漢文	教諭	澤田總清	千葉縣	大正十一年四月
博物	教諭	大久原安次	千葉縣	大正九年四月
物理化學	教諭	瀧澤榮亮	千葉縣	大正十一年二月
數學	教諭心得	岡田長藏	埼玉縣	大正八年五月
體操	教諭心得（正六位勳四等功五級）	原直三郎	東京府	大正七年一月
國語習字	教諭心得	名和伯治	千葉縣	大正十年四月
圖畫 英語	囑託教師	石井義一	千葉縣	大正十一年四月
英語	教諭（兼任）（從六位文學士）	日野健四郎	德島縣	大正九年十月
柔道	教師兼書記	榎田正巳	千葉縣	大正七年一月
體操 劍道	教師兼書記（勳八等）	南井榮助	千葉縣	明治三十四年四月
	校醫	高川直三郎	千葉縣	明治三十三年十月

◎生徒表（大正十一年四月現在）（◎印特待生　△印正副級長）（級長以外身長順）

第五學年（三十九名）

主任教諭　相田喜之助

◎熊切修二	夷隅	古澤三橋監物	印旛	成田
長澤博	印旛	布鎌片岡勇	印旛	遠山
松崎正重	印旛	八生檜垣謙三	印旛	久住
新村新助	山武	二川石橋三郎	印旛	安食
石井佩男	山武	千代田石渡四郎	山武	南郷
大塚謹三	印旛	成田鈴木平	印旛	公津
山口忠	印旛	八生篠崎操	印旛	遠山
青柳信男	印旛	公津三郎	印旛	公津
竹尾隆	印旛	酒々井石上武七	印旛	成田
桑名善雄	茨城	那珂郡香取利雄	印旛	久住
戸村照學	匝瑳	八日市場三門健一	印旛	木下
石川明	印旛	遠山小泉國衛	印旛	成田
渡邊泰亮	印旛	成田平山孝一	香取	多古

多田清	印旛	公津	加藤岡武	印旛	成田
小川忠裕	山武	千代田	吉岡忠雄	印旛	豐住
小川重雄	印旛	中郷	神崎謙三	印旛	遠山
平山正夫	香取	多古	海保芳郎	印旛	久住
島黑康	東京	本所	谷上勝太郎	印旛	成田
齋藤操	印旛	公津			
大須賀誠	印旛	安喰			
石山堯	山武	二川			
原幸次郎	印旛	成田			
篠祝	香取	吉田			
平山利雄	印旛	富里			
原公健一	印旛	木下			
加藤文一	印旛	成田			
△大澤麟太郎	印旛	八生			

第四學年（四拾六名）

主任教諭　秋山篤英

△加藤岡武	印旛	成田	木內基治	香取	滑河
吉岡忠雄	印旛	豐住	諏訪原四郎	印旛	八生
神崎謙三	印旛	遠山	日暮秀明	印旛	本埜
海保芳郎	印旛	久住	吉川克巳	印旛	中郷
谷上勝太郎	印旛	成田	井一	香取	高岡

石井雅衛	印旛	富里		
加藤登	印旛	成田		
岩內貢	印旛	遠山		
黑川富夫	印旛	成田		
行方喜一	山武	大總		

小川貞助　印旛豐住
岩澤巖　印旛中郷
當間榮三郎　印旛中郷
中村賢爾　印旛白井
鳴田滿　印旛富里
山田正雄　印旛豐住
日暮五衛　印旛豐住
林貞一　山武日向
湯淺義雄　印旛公津
高橋忠司　印旛公津
遠藤與惣次　印旛公津
寺内一郎　印旛成田
櫻井本愛　印旛安喰
山泰　印旛安喰
佐久間明　山武睦岡
石田亨　香取高岡
關川安世　印旛成田
平野勝三　稲敷大宮
秋山寛照　印旛遠山
貝瀬宥　海上西銚子
山田克巳　印旛八生
△小谷野宣　行方大生原

第三學年（六拾四名）

牧野佐二郎　印旛成田
大三川雄啓　香取多古
佐藤寛　香取大須賀
青柳晴美　香取滑河
武田末壽雄　印旛八生
土屋清　山武二川
藤崎正義　印旛遠山
小川源一　印旛公津
篠田光治　稲敷金江津
谷島義雄　印旛永治
手島寛　山武千代田
神戸盛三　印旛成田
宮博　印旛八生
木村慶司　山武千代田
田中純一郎　稲敷龍崎
小田垣誠　印旛成田
神戸剛　印旛成田
安達次郎　印旛遠山
渡邊市左工門　印旛成田
林清風　印旛遠山
大木丈夫　恒瑳須賀
渡邊政雄　印旛成田

主任教諭　澁澤榮亮

藤崎浦治　印旛遠山
渡邊進一　印旛成田
山内康夫　印旛富里
川島丙　印旛富里
伊藤清　印旛富里
江口岳世　稲敷金江津
三橋新　印旛成田
加藤韓三　印旛八生
△水野岩雄　印旛成田
山田彌　印旛安喰
宮内喜夫　印旛八生
檜垣忠　印旛久住
諸岡滿洲男　印旛成田
湯淺栽樹　印旛安喰
市島甚太郎　稲敷金江津
岡野秋夫　印旛安喰
吉岡清　印旛成田
野平吉衛　印旛豐住
小田孝　印旛八生
田中勇　印旛成田

生駒靜雄　山武二川
石橋現吉　山武南郷
圓城寺次郎　印旛公津
山田馨　印旛八生
小川茂　印旛遠山
新橋重三　印旛豐住
勝又勝伊　香取多古
金子忠治　印旛中郷
高川俊夫　安房北三原
相田重義　埼玉南埼玉
内海門磨　印旛八生

第貳學年甲組（參拾貳名）

△◎石橋浩　印旛安喰
大須賀信乃　印旛六合
後藤正　印旛安喰
内田榮　山武千代田
部貢　印旛久住
磯崎博　香取高岡
山崎傳　印旛遠山
藤崎正　山形北村山
森谷義　印旛豐住
小川進　印旛豐住
飯岡隆　印旛豐住
大竹清　香取本大須賀

木川忠常　印旛成田
伊藤馨　印旛久住
木内浩　印旛成田
海瀨健爾　安房稲郡
野本秀眞　東京日本橋
林田武雄　印旛富里
清水文治　山梨比巨摩
淺井隆　印旛成田
石川仁一郎　印旛成田
武士田讓　宮城仙臺
大友廣高

主任教諭　大石雅次郎

諸岡董　印旛成田
鈴木照澄　印旛志津
内野國男　鹿島根二田
小海川重雄　印旛久住
川崎千秋　香取本大須賀
田村義教　安房主基
石井昌治　山武千代田
根本菊次　印旛豐住
織田弘　印旛成田
吉岡一二　印旛中郷
鶴岡大中　石川縣鳳至

海保香苗　稲敷金江津
伊藤汎　山武松尾
石川豐　印旛遠山
神崎迪太郎　稲敷金江津
高安愛之助　印旛成田
秋山貌虎一　印旛富里
神崎武夫　印旛遠山
寺内秀雄　印旛中郷
△淺井鋭次　印旛成田

最上務　東京本郷
萩原章　山武千代田
吉岡俊男　印旛中郷
塚本克巳　香取滑河
中村一　長生土睦
大木普市郎　東京神田
密島和一　印旛安喰
大久保貞次　印旛遠山
神崎隆　印旛八生
△大木得三

第貳學年乙組（參拾四名）

主任教諭　丸山錦吾

◎黑田正信　香取　多古
山室勝身　山武千代田
島武夫　東京　本所
三橋健之助　印旛　中郷
栗山芳重　印旛　和田
丸三郎　印旛　公津
齋藤政雄　北相馬東文間
吉祥照芳　東京　四谷
松本重雄　君津久留里
加藤正則　印旛　中郷
金澤俊亮　稻敷金江津
關谷政雄　印旛　公津
渡邊清　印旛　成田
小川德英　山武千代田
久保田潔　印旛　成田
佐藤智雄　香取大須賀
阿地隆興　福島縣石城
齋藤仲次　印旛　八生
福田廣　印旛　安喰
海保三千三　印旛　久住
山崎勝男　印旛　公津
芦田菊次郎　印旛　成田
堀川正次　香取　滑河
村山信次　印旛　公津
小川忠雄　印旛　八生
石橋與七　印旛　成田
山田一雄　印旛　八生
平山岩雄　香取　多古
片岡七郎　印旛　成田
池田芳洋　印旛　富里
藤崎廣夫　印旛　遠山
佐久間誠一　印旛　豐住
小出寛治　新潟縣中頸城
△諏訪原貞夫　印旛　成田

第壹學年甲組（參拾六名）

主任教諭心得　岡田長藏

△郡司辰二　香取　日吉
上野賴榮　福嶋縣雙葉
石井章　印旛　富里
橫田四郎　印旛　久住
青野七彥　香取　高岡
瓜生一雄　香取　多古
秋山正　印旛　中郷
郡司一夫　印旛　遠山
丸丙午　印旛　公津
渡邊操　印旛　成田
葛生幸常　印旛　安食
鈴木詳　印旛　公津
武田利良　印旛　成田
荻原治房　香取　多古
大野正　印旛　豐住
泉水灣　印旛　公津
南井重　印旛　成田
高橋重雄　印旛　成田
後藤愛　印旛　八生
石橋瑞穗　印旛　成田
後藤重司　印旛　安食
今關忠三　香取　多古
清水定雄　埼玉縣三俣
福田茂重郎　群馬縣日野

第壹學年乙組（參拾六名）

主任教諭心得　名和伯治

鈴木善照　印旛　中郷
關政司　茨城縣小櫻
根本甚三　印旛　豐住
宮內正胤　長生　一松
後藤松治郎　印旛　八生
秋山禎康　印旛　中郷
清宮清介　印旛　八生
森一雄　印旛　佐倉
桑田勝治　印旛　富里
富澤知男　香取　滑河
△大見川盈之助　茨城縣龍崎
田中正　印旛　中郷
△山田愼三　印旛　成田
高橋健吉　印旛　成田
平野藏　香取　神崎
高橋新忠　印旛　成田
牧野高司　印旛　成田
鶴田照正　印旛　成田
日暮忠充　印旛　成田
石井竹松　印旛　遠山
伊井興助　印旛　富里
小倉敏夫　印旛　中郷
大木賢三　印旛　成田
渡邊昇司　香取　滑河
川賢雄　印旛　成田
瀧澤利一　印旛　成田
武藤文哉　印旛　永治
木川忠　山武　二川
沼尻芳郎　印旛　成田
幡谷有吉　印旛　成田
松村日出男　印旛　宗像
伊藤倉三　印旛　遠山
關川邦雄　印旛　成田
村田明阜　安房　豐房
小川政己　印旛　中郷
大竹久直　香取本大須賀
小窪仁　印旛　本埜
岩舘四郎　印旛　中郷
藤崎實　印旛　遠山
山崎巖　香取　飯高
鵜澤廣吉　印旛　公津
武田豐　印旛　八生
磯山茂　印旛　公津
山田勳　印旛　八生
石井三郎　印旛　豐住
萬來親　印旛　八街
香取　香取本大須賀
△三橋誠一　印旛　成田

◎成田英漢義塾卒業生人名（×死亡）

第一回卒業生（明治二十二年三月）

法學士　北田彥三郎　三橋金太郎　高安元三郎

第二回卒業生（明治二十五年三月）

×山田　兵治
吉川松太郎

第三回卒業生（明治二十六年三月）

法學士　石井佐次馬
穴倉高次郎
山田市太郎
石川英之助
岡本　幸造
山田要之助

第四回卒業生（明治二十七年三月）

砲兵大佐　林　政次郎
大野市太郎
湯淺眞二郎
藤崎仁三郎

第五回卒業生（明治二十八年三月）

伊藤幸次郎
林田恒藏
篠崎幸吉
惠口忠治

第六回卒業生（明治二十九年三月）

山崎傳七
根本太一
高梨盛太郎
×石川昌三
太田家續
山本喜助
多田寧
×藤崎欽哉
森　寛一
篠原友之助
林田政吉
×郡司喜太都
並木弘
（山本改）河津金四郎
岡本保
山野制
堀井富五郎

第七回卒業生（明治三十年三月）

赤谷由助
木内民雄
米津重次郎
湯淺暉
石渡恒
林田恒三郎

第八回卒業生（明治三十一年三月）

石井喜一
長谷川慶
小野寺弘
×木内啓司
玉造泰助
細田孝司

第九回卒業生（明治三十二年三月）

選科履修生（明治三十一年三月）

原久藏
山口要太郎
戸村喜助
香取友吉

選科履修生（明治三十二年三月）

唯謹吾

◉卒業生人名及現況表　（×死亡）

第一回卒業生（六名）（明治三十五年三月）

千葉縣立大多喜中學校長　文學士　小野寺精一郎　印旛成田
大阪遞信局技師　工學士　飯倉文甫　印旛成田
實業（東京美術學校卒業）　三橋信吉　印旛成田
成田中學校教諭（早大文科卒業）　×竹尾丑之助　印旛八生
日本石油會社東京本社（早大商科卒業）　秋山篤英　印旛富里
黑田政吉　印旛成田

第二回卒業生（八名）（明治三十六年三月）

日本興業會社社員（早大卒業）　×京須幸　印旛成田
日本大學教務編輯主任　神崎義俱　印旛遠山
山口縣技手（水産講習所卒業）　（藤崎改）加納金助　印旛遠山
東京時事新報社員（歩兵中尉）　高橋照文　山武南郷
實業　小川克己　印旛八生
吉岡猛　印旛　酒々井
渡米實業　加藤芳之助　香取　大須賀
臺灣總督府鐵道部計理課在勤（早大商科卒業）　黑川信　印旛成田

第三回卒業生（十八名）（明治三十七年三月）

×渡邊政助　印旛成田
實業
小川源一郎　印旛公津
×額賀清右衛門　鹿島白鳥
飯倉貞造　印旛成田
寺内一夫　印旛成田
後藤七郎　印旛八生
瀧澤德治郎　印旛成田
遠藤與惣平　印旛公津
實業
木内茂助　印旛成田
實業（早大商科卒業）
小川利太郎　印旛公津
實業
×藤倉精助　印旛成田
大阪商船紅丸機關師　佐々木收治　千葉　東葛飾
慶大卒業　田中重衛　埼玉　北足立
東海銀行本郷支店員　加藤右二　印旛中郷
村井銀行在職　神崎庄助　印旛成田

淺米實業
醫師（慈恵醫學士）　那須文治　香取飯田
實業　（田中改）山本順　印旛成田
　　多田亨　印旛公津

第四回卒業生（廿二名）（明治三十八年三月）

芝浦製作所技師（東京高工卒業）（加藤改）伊藤昇　君津　八重原
大日本農會在勤　農學士　萩原義重　山武　千代田
尼ヶ崎紡績會社橋場工場技師　工學士　宮野源一郎　山武　千代田
醫師（千葉醫專卒業）（椎名改）野村竹男　茨城　北相馬
東京帝國大學醫科大學助教授　醫學士　泉仙助　香取滑川
歩兵大尉（在宇都宮）　秋山三省　印旛中郷
實業　（伊藤改）吉岡保　印旛富里
八王子高等女學校教諭（早大卒業）　大木榮次郎　印旛中郷
　　×坪井節爾　千葉千葉
實業　秋葉有一郎　山武　千代田
醫師（千葉醫專卒業）　小幡久　石川金澤
小學校教師　（鈴木改）安達胤治　山武　千代田
中央新聞社在職　鈴木亮　印旛公津
　　×辻英吉　東京荏原
兵庫縣兵庫製繩株式會社在職　高仲喜代松　印旛公津
小學校教師　湯淺儀三郎　印旛八生
實業　丸良輔　印旛公津
南滿鐵道本社在勤　石原清泉　印旛成田
實業（歩兵少尉）　作田紋平　山武鳴瀬
東京瓦斯會社砂村工場（慶大卒業）　淺井信之　印旛成田
第三銀行本店員　×石橋堯之助　印旛成田
實業　（加藤改）松本賴三　東京京橋
實業　古矢誠助　印旛成田
實業　宮田七右衛門　印旛八生
實業　清宮俊平　印旛八生

第六回卒業生（廿二名）（明治四十年三月）

廣島縣西條農學校教諭　農學士　大塚靜　印旛成田
内務省特殊財産管理局事務官　法學士　石川芳太郎　印旛安喰
　　×石川金太郎　印旛安喰
小學校教師　（伊藤改）櫻井重助　香取遠山
官吏　泉顯藏　茨城行方
小學校教師　黒川孝　印旛成田
實業　石橋昇　印旛豐富
小學校教師　石井孝司　印旛豐住
實業（歩兵少尉）　（石井改）篠田憲次郎　印旛八生
實業　（小倉改）葛生孝作　印旛八生
實業　×川島芳夫　市原瀧津
南滿鐵道本社在勤　藤崎源一郎　印旛遠山
實業（歩兵少尉）　加藤光太郎　印旛成田
東京瓦斯會社砂村工場（慶大卒業）　吉田新　印旛成田
第三銀行本店員　廣瀬海治　印旛木下
實業　小川義德　山武　千代田
實業　（成毛改）鈴木啓次郎　印旛安喰
實業　丸善助　印旛公津
小學校教師　（山口改）鈴木忠治　印旛遠山
千葉縣農業技手　橋爪石民　茨城稻敷
實業　長谷川利吉　印旛成田
官吏　藤崎勇三郎　印旛遠山

第七回卒業生（廿二名）（明治四十一年三月）

實業　（長谷川改）五木田康吉　印旛成田
　　×石井延太郎　印旛遠山
實業　三橋治平　印旛富里
小學校教師　竹村克之　印旛富里
　　×飯島貞雄　東京芝
實業（早大卒業）　土井彌一　印旛公津
實業（工兵中尉）　藤崎翠　印旛遠山
千葉縣立佐倉中學校教諭（早大卒業）　藤崎倭一　印旛富里
　　×藤崎宗平　印旛遠山
實業　小川明　印旛中郷
千葉縣鐵道課千代田驛々長　黒川傳　印旛成田
實業　石原泰次郎　印旛成田
實業（在朝鮮）　松本保　大分宇佐

第五回卒業生（廿二名）（明治三十九年三月）

　　×小倉榮二郎　印旛成田
實業　長谷川治吉　印旛成田
實業　（藤川改）土肥多助　印旛富里
三井物産會社員（東京高商卒業）　三橋英治　印旛成田
　　×土屋圓　山武瑞穂
醫師（慈恵醫學士）　佐藤繁藏　安房由基
日本生命保險會社醫（京都醫專卒業）　山野衿三　印旛成田
　　×澤田信三　印旛久住
樺太廳中學校教諭（京都高等工藝卒業）　小野寺英二郎　印旛成田
北海道藤田組加比宇牧場技師（東京農大卒業）　仁科一　靜岡靜岡
野田電燈會社支配人（日本大學卒業）　（小川改）鈴木七郎　印旛八生
　　×山野隆治　印旛成田
實業　萩原長三　山武　千代田

×稲生恭平　印旛木下
三浦照芳　印旛佐倉
丸武夫　印旛公津
藤田正己　印旛八生
×三橋達也　印旛富里
龍崎源　印旛酒々井　山武千代田
三好照嘉　山武二川
×香取實　印旛富里
×石橋清　印旛成田
飯倉汎三　東京品川
鈴木三郎　印旛成田
×稲垣保治　印旛成田
三好照正　印旛酒々井
×大島愼三　印旛成田
織原三郎　印旛八生
×林正四郎　印旛八生
篠原昇　印旛富里
高野照實　印旛成田
木内喜右衛門　印旛成田
×松本修一　高知安藝

東京鐵道郵便局員
實業（歩兵少尉）
水産講習所技手
實業
僧侶（國學院大學卒業）
東洋拓殖會社員（東京農業大卒業）
下總御料牧場在勤
僧侶（神原改）
現代公論社（騎兵少尉）（大島改）
實業
僧侶（智山勤學院卒業）
實業

實業　山田逸作　印旛八生
實業　石原岩治　印旛成田

第八回卒業生（廿二名）（明治四十二年三月）

陸軍二等主計（在四街道）　蛭田玄美　印旛豐住
×金澤光雄　香取多古
加藤保　印旛八生
邊田金次郎　印旛滑川
×櫻井千太郎　印旛佐倉
小倉久太郎　印旛中郷
士肥忠衛　印旛公津
平山勘一　印旛遠山
川崎金吾　印旛公津
秋葉義之（新行寺改）　山武二川
荒木照定　山武緣海
野平謙吉　印旛八生
鈴木五兵衛　印旛成田
志田照猛　東京京橋
秋葉昇　印旛富里
村島隆治郎（遠藤改）　印旛公津
藤崎大助　印旛富里

小學校教師
小學校教師
實業
實業
千葉縣農事試驗場在職
實業
遠山村役場書記
實業
實業
僧侶（東洋大學文學士）
實業
實業
僧侶（東洋大學卒業）
小學校教師
小學校教師
小學校教師

實業　石橋茂夫　印旛久住
實業　藤崎靜（本多改）　印旛遠山
×小川潔　印旛八生
明治大學卒業　野平興　印旛豐住
實業　橋本修造　印旛公津

第九回卒業生（廿二名）（明治四十三年三月）

實業　竹村健（加藤改）　印旛中郷
實業　諏訪原克己（土肥改）　印旛公津
實業（大阪高工卒業）　大塚篤三　印旛成田
日本製粉會社馬關支店（東京高商卒業）　竹下清吉（加藤改）　印旛成田
陸軍輜重兵中尉（日黑）　石井榮治　山武千代田
日本郵船會社在職（東京商船卒業）　坂宮浩　印旛八生
印西農學校教諭　加勢胖　愛知碧海字和島
陸地測量部修技所卒業　高橋毅一　印旛公津
實業　椎名憲三　印旛久住
齒科醫（東京齒科醫專卒業）　鈴木重五郎（三橋改）　印旛中郷
實業（松戸園藝專門學校卒業）　小川保（中村改）　印旛彌富
小學校教師　卯之木照文（和田改）　印旛公津
小學校教師　平野清司　市原高瀧
日光清瀧製鋼所社員　廣瀨保　印旛豐住
朝鮮鐵道在勤　小倉甚四郎　印旛成田
八生農學校教諭（松戸園藝專門學校卒業）　小倉英次　印旛八生
實業　吉岡米吉　印旛酒々井
實業　宮崎昇　印旛成田
關東窯業株式會社常務取締役　下村保（渡邊改）　印旛八生
實業　櫻井昇　印旛成田
實業　黑川幹　印旛成田
×澤邊保　印旛八生

第十回卒業生（廿三名）（明治四十四年三月）

千葉井上病院醫員（千葉醫專卒業）　椎名泰三　印旛久住
法學士　石原貞三　印旛成田
日本銅管株式會社在勤（千葉醫專卒業）　山口清　印旛八生
醫師（千葉醫專卒業）　藤崎平三郎　印旛遠山
海軍機關中尉（吳軍港潛水隊附）　藤田精一　印旛八生
京都府中郡五箇村醫局院長（千葉醫專卒業）　織田貞（丸改）　市原菊間
實業　內田省吾　印旛公津
商船學校機關科卒業　小倉壯五郎　印旛中郷
大阪商船會社在職（商船學校機關科卒業）　×林松之助　印旛八生
鈴木雄一　山武山邊
×川島勝信　印旛富里

小學校教師　×三橋　衛　印旛成田
南滿鐵道在勤　額賀誠司　茨城白鳥
（東洋協會專門學校朝鮮語科卒業）　小川　清　山武二川
實　業　河野毅一　長生東郷
在久留米三菱試驗事務所　岡部秀澄　印旛遠山
實　業　（石井改）小出清　印旛富里
×野平四郎次　印旛豐住
古河合名會社永松出張所土木主任　秋葉右馬之助　印旛富里
（攻玉社工學校高等研究科卒業）　額賀忠孝　茨城白鳥
小學校教師　蛭田眞民　印旛豐住
小學校教師　（衛改）吉岡七郎兵衛　印旛中郷
實　業　小川新　印旛成田
橫須賀鎭守府經理部

第十一回卒業生（卅二名）（明治四十五年三月）

栃木縣理事官　法學士三橋孝一郎　印旛成田
齒科醫（日本齒科醫專卒業）　（秋山改）鈴木靜　印旛中郷
成田山感化院職員　（本宮改）大友惟誠　宮城志田
（東洋大學文學士）　梶谷循一　印旛安喰
實　業　瀧川俊雄　印旛成田
京都帝大工科卒業　渡邊和一　印旛成田
（大阪鐵工所在勤）工學士（小野寺改）　渡邊由松　印旛成田
實　業（步兵少尉）
慶應義塾醫科助手（新潟醫專卒業）
實　業　河合清　印旛成田
×蕨　曙　印旛公津
上海高田商會在職　篠田保　茨城稻敷
（外國語學校支那語科卒業）
僧　侶　小山正義（川）　茨城東茨城
亞細亞丸見習機關師　織田順　印旛成田
大阪高工卒業　小池嘉之　千葉東葛飾
×池田榮助　山武千代田
×染谷恒次郎　印旛成田
實　業　石橋稔　香取滑川
實　業　稻垣恒藏　印旛成田
實　業　長谷川桂　印旛成田
貯金管理局在勤　新橋旭　印旛豐住
×江副節藏　東京京橋
僧　侶　（須田改）佐藤興仁　安房田原
東京瓦斯會社員　河野和起　長生東郷
×日暮太一郎　印旛中郷
實　業　岩館昌美　香取滑川
三里塚御料牧場員　山崎秋平　印旛飯高
×綿貫新作　印旛浦々井
實　業　大塚七郎　印旛成田

醫師（新潟醫專卒業）　青柳公　印旛公津
實　業　山田章吾　印旛安喰
東京赤坂區役所在勤　（中村改）萩原廣　印旛宗像
僧　侶　栗原照宣　東京八王子
實　業　鈴木廣雄　東京品川

第十二回卒業生（廿八名）（大正二年三月）

實　業　齋藤義秀　印旛遠山
商船學校教官（商船學校航海科卒業）　加藤英一郎　印旛成田
東京帝國大學法科大學卒業　法學士石井鼎　印旛遠山
實　業　鈴木佐太郎　印旛富里
實　業　小川浩平　山武千代田
小學校教師　內田毅　茨城行方
成田中學校教諭（大阪高工卒業）　瀧澤榮亮　印旛成田
實　業　×東美義照　東京淺草
鈴木明　印旛富里
×辻愛吉　印旛遠山
實　業　內海喜男　印旛八生
小學校教師　（塚本改）葛生清三郎　香取滑川
實　業　三橋有方　印旛富里
×小椰秀吉　印旛成田
日本棉花株式會社外國課在勤
（東京外國語學校英語科卒業）
實　業　岩澤忠二　山武二川
塚本憲一郎　香取滑川
僧　侶（智山大學卒業）　青木榮俊　京都下京
實　業　新橋榮　印旛豐住
實　業　（並木改）櫻井和　印旛富里
實　業　池田一介　東京日本橋
小學校教師　大木喜三郎　東瑳野口
小學校教師　竹村和　印旛富里
實　業　飯塚英夫　香取多古
東京慈惠醫專卒業　淺岡惠太郎　印旛成田
實　業　鈴木高治　印旛公津
實　業　菅澤忠爲　印旛遠山
實　業　三橋仙次　印旛富里
實　業　戶村正夫　印旛川上

第十三回卒業生（廿七名）（大正三年三月）

鹽水港製糖株式會社在職（東京高商卒業）　早川重雄　印旛成田
實　業（東京帝大農科卒業）　藤崎源之助　印旛富里
印旛郡書記　蛭田白民　印旛豐住
實　業　山田要　印旛八生
東京地方裁判所檢事補　法學士丸才司　印旛公津

南滿洲撫順炭礦技師（東京帝國大學工科卒業）　清水長陽　高知縣
浦潮朝鮮銀行在職（東京外國語學校露語科卒業）　竹尾弐　印旛八生
實業　山田進　印旛公津
僧侶（智山大學卒業）　三枝照光（石崎改）　君津中郷
僧侶（智山大學卒業）　福島照瑞　神奈川横須賀
千葉縣農事試驗場在職（東京帝大農科卒業）　日暮與一　印旛中郷
小學校教師　大木顯一郎　印旛中郷
（上田蠶糸專門學校卒業）　藤崎鑽　印旛遠山
齒科醫（東京齒科醫專卒業）　稻川義雄　愛媛松山
鐵道省東部管理局員（早大商科卒業）　長竹彦次郎　印旛成田
實業　大木健　印旛成田
實業　椿利一　香取滑川
鐵道省東部管理局員　出山博　印旛成田
實業　貝原塚豐　印旛八生
實業　瀧澤誠　印旛成田
小學校教師　瓜生勘之丞　香取多古
宮城縣柴田農學校教諭（上田蠶絲專門學校卒業）　佐瀨旭　印旛八生
小學校教師　田島俊一（箕輪平三改）　埼玉北足立
東京成城中學教諭　平澤道雄　茨城鹿島
小學校教師　椎名勝美　印旛富里
實業　多田喜平　印旛公津
實業　宮內忠雄　印旛八生
實業　石井順　印旛成田

第十四回卒業生（卅二名）（大正四年三月）

海軍主計少尉　岡部義麿　印旛遠山
東北帝國大學理學部在學　三橋藤太郎　印旛成田
千葉病院婦人科在職（千葉醫專卒業）　木川浩逸　香取東條
大阪商船株式會社在勤（拓殖大學卒業）　藤崎總三郎　印旛遠山
實業　小倉要　印旛成田
實業　石井操　印旛遠山
東京齒科醫專在學　戸村晋　山武千代田
實業　大木嘉平　印旛中郷
實業　齋藤篤三郎　印旛遠山
僧侶（智山大學卒業）　黑羽順教　栃木那須
實業　丸善一　印旛公津
小學校教師　大須賀清光（吉岡改）　印旛四ヶ井
實業　萩原正雄　香取多古
東北帝大農科大學豫科　吉岡博　印旛中郷
東北帝大農科大學豫科　加藤浩　印旛八生
實業　藤崎源一郎　印旛遠山

小學校教師　所晃一　香取多古
小學校教師　石井與四郎　印旛成田
實業　長谷川英二　印旛成田
實業　加藤暢（石橋改）　印旛公津
大阪市帝國證券株式會社在職（早大商科卒業）　齋藤健雄　印旛公津
內務省土木監督署河川工事事務所　京須芳雄　印旛成田
八生農學校教諭　高柳榮三郎　印旛豐住
實業　鈴木金候　山武二川
實業　岩井儀太郎　印旛富里
南滿洲鐵道株式會社京城管理局工務課　片野純三　岐阜大垣
實業　鈴木秀之輔　印旛成田
小學校教師　柳澤吉藏　印旛成田
成田中學校教師兼書記　榎田正己　印旛成田
佐倉中學校教師　高安盈仁　印旛成田
東京蠶惠醫專在學　大沼潔　印旛成田
小學校教師（麻布獸醫學校卒業）　若月義宏　安房西條

第十五回卒業生（卅五名）（大正五年三月）

千葉醫專在學　伊藤茂　香取飯高
東北帝國大學醫學部在學（大木改）　藤澤武雄　印旛成田
栗林商船株式會社在勤（小樽高商卒業）　板倉誠　長生茂原
小學校教師　石井亮都　印旛遠山
東洋大學卒業　大三川國次（印旛安喰）　印旛八生
實業　湯淺健一　印旛八生
日本醫專在學　戸村達郎　山武二川
小學校教師　藤崎穣　印旛遠山
千葉醫專在學　本多傳　印旛遠山
實業　內田信一　山武二川
商船學校機關科在學　渡邊富吉　印旛成田
目白中學校教諭（國學院大學卒業）　石川富士雄　印旛成田
小學校教師　安達國一　埼玉大宮
實業　小川彌　山武千代田
實業　手島徹　山武千代田
小學校教師　大竹茂　香取滑川
外國語學校支那語科在學（早稻田大學卒業）　瀧澤榮一　印旛成田
都留中學校教諭　河野八郎　印旛八生
實業　秋葉一吉　山武蓮沼
京都醫學專門在學　熊切儀一　夷隅古澤
實業　片野春吉　岐阜大垣
實業　齋藤七司　印旛公津
×阿部良策　印旛豐住

小學校教師
實業　木內功　印旛富里
實業　山內誠　印旛成田
實業　伊藤保次　印旛成田
實業　紺谷旭（篠崎改）　印旛遠山
實業　小川吉之助　印旛成田
實業　鈴木治郎　印旛公津
實業　池田喜一　印旛富里
實業　萩原賢治（鈴木改）　印旛富里
實業　宇賀近治　印旛白井
實業　岩井平男　印旛大杜
實業　平山久一郎　印旛成田
實業　飯高多一郎　香取大須賀

第十六回卒業生（卅六名）（大正六年三月）

千葉醫專在學　秋山寅郎　香取多古
秋田縣鐵山學校在學　堀田彌太郎　印旛久住
實業　諸岡照保　印旛成田
東京蠶絲專門學校卒業　秋葉仲　印旛富里
日本鋼管株式會社員　齋藤陽一　印旛成田
新潟醫專在學　深山浩一　印旛旭
鐵道省東部管理局員　長竹達三　印旛成田
實業　能勢邦藏　千葉犢橋
早稻田大學在學　神山雅一　印旛成田
早稻田大學在學　竹尾剛　印旛八生
東京物理學校在學　內藤達夫　茨城稻敷
小學校教師　渡邊陸三　印旛成田
實業　池田義夫　印旛富里
總武銀行成田支店在職　大島文吉　印旛八生
拓殖大學在學　堀越誠　山武二川
拓殖大學在學　池田伊重郎　山武千代田
齒科醫（東京齒科醫專卒業）　永田令藏（姉崎改）　山形新庄
小學校教師　石橋保　印旛富里
×小川斌　印旛公津
小學校教師　加藤久治郎　秀東本大須賀
×大木康　印旛成田
早稻田大學在學　湯淺彥治（日暮改）　印旛成田
實業　檜垣達也　印旛久住
實業　本多義　印旛遠山
實業　土井平重　印旛公津
實業　青柳忍　印旛公津
僧侶　長谷川祐元　安房西條
實業　多田元二　印旛公津
小學校教師　根本東海男　印旛公津
小學校教師　篠田欣吾　印旛豐住
實業　石橋健二　印旛豐里
實業　土肥卓　印旛公津
早大政治科在學　方波見仲男　茨城鹿島
實業　秋葉三省　市原市東
實業　鈴木斌敏　印旛公津
實業　櫻井一郎　香取小御門
實業　宇井龍雄　印旛成田

第十七回卒業生（卅五名）（大正七年三月）

第四高校二部卒業　宍倉貫一　印旛久住
第四高校二部卒業　野平忠　印旛豐住
應應義塾大學在學　西谷謙堂　印旛豐住
×吉田善四郎　東京神田
櫻組製靴會社在職　飯塚忠　香取多古
應應義塾大學在學　中野圭曦　東京豐多摩
小學校教師　山內卯之助　印旛成田
逓信省逓信官吏練習所在學　鈴木豐　印旛成田
千葉醫專在學　清水東四郎　印旛成田
實業　鈴木德治　印旛成田
小學校教師　日色四郎　香取滑川
慶應義塾大學在學　神戶隆太郎　印旛成田
實業　大野清次（後藤改）　印旛安食
早大商科在學　豐田謹悟　印旛成田
鐵道省在職　山田好助　印旛富里
早大商科在學　石井勝男　印旛成田
小學校教師　越川明　印旛遠山
實業　伊藤七右衛門　印旛久住
日本大學卒業　寺內保　印旛成田
×高橋巖　印旛成田
早大商科在學　田中藤治　香取小御門
實業　小川總良　山武千代田
實業　古川廣　山武片貝
土井規矩藏　印旛公津
耕地整理技手　長谷川藤市　印旛成田
實業　武士田胖　印旛成田
實業　實川和男　山武千代田
實業　藤崎英亮　印旛遠山
南滿鐵道在勤　安藤俊行　印旛久住

東京農業大學在學　林　一郎　印旛八生
實業　×日暮輝雄　印旛豐住
實業　伊藤文亮　印旛遠山
實業　宮原三郎　印旛久住
實業　藤崎忍　印旛遠山
實業　鈴木茂喜　印旛久住

第拾八回卒業生（卅七名）（大正八年三月）

應應義塾大學在學　湯淺三吾　印旛八生
×湯淺武之助　印旛八生
駒場農科大學實科獸醫科卒業　千葉晟　千葉更科
×篠原岩次郎　印旛成田
上海東亞同文書院在學　石川順　印旛成田
實業　糸川平　印旛久住
實業　石橋正也　印旛成田
實業　葛生幸吉　印旛安食
慶應義塾大學在學　藤崎信助　印旛富里
實業　根本新一　茨城稻敷
明治學院在學　林正雄　印旛成田
早稻田大學在學　澤田武　印旛中郷
小學校教師　小川了介　山武　千代田
千葉師範二部在學　廣瀨光亮　印旛豐住
小學校教師　香取舜治　山武二川
實業　石橋孝三郎　印旛成田
桐生高等工業學校在學　丸善衛　印旛公津
官吏　福田直四郎　東京本郷
實業　藤崎隆二郎　印旛遠山
東京美術學校在學　日暮貞　印旛中郷
實業　池田春之助　印旛富里
國學院大學在學　伊藤公平　印旛八生
小學校教師　椎名操　香取　木須沉
仙臺高工在學　小川太郎　印旛八生
早稻田大學卒業　大三川弘之　香取多古
一年志願兵　瀧澤德治　印旛成田
實業　小倉仁　印旛成田
小學校教師　猪瀨堯澄　印旛布鎌
實業　武藤行敬　印旛永治
實業　山崎信男　香取高岡
一年志願兵　檜垣省吾　印旛久住
實業　四宮操　印旛富里
實業　吉川巖　印旛中郷
實業　神崎俊之助　印旛遠山
實業　相原理三郎　印旛公津
實業　石橋進　印旛富里
一年志願兵　伊藤源右　印旛中郷

第十九回卒業生（卅四名）（大正九年三月）

東京高工在學　福田郁次郎　茨城鹿島江津
新潟醫專在學　深山陽　印旛旭
第八高等學校在學　若命富郎　横須賀市吉田町
東京日本橋郵便局在勤　岩立源一郎　香取滑川
實業　小川勇（高橋改）　印旛公津
海軍機關學校在學　加藤武夫　同成田
新潟醫專在學　山崎一雄　同永治
千葉醫專在學　鈴木藤吉　同安食
成田電氣會社在職　木內芳雄　同成田
法政大學在學　大野龜之助　同酒々井
慶應義塾大學在學　宮崎廣則　同成田
實業　藤崎章　同遠山
實業　伊藤豐　同久住
實業　小川俊一　同公津
東京商科醫專在學　竹村秀壽　同成田
實業　下村好一　印旛八生
實業　石井權之尉　印旛遠山
實業　石井庄平　同酒々井
東京商科醫專在學　萩原英一　同成田
實業　甲田與市　同遠山
早稻田大學在學　千葉實乘　茨城鹿島五郷
早稻田大學在學　林稜二　印旛八生
實業　平山榮昌　香取多古
實業　石井美雄　印旛富里
實業　山崎守　同木下
小學校教師　阿部規矩治　同豐住
安田銀行芝支店在勤　竹村利雄　同富里
神奈川縣藤澤時宗宗學林在學　篠崎忠男　同遠山
實業　大貫平吉　神奈川縣老海名
實業　磯山儀一　印旛公津
實業　寺內五市　同中郷
株式會社葛原商會在勤　吉岡彰　同中郷
實業　藤崎慶司　同成田
實業　飯田榮亮　香取大須賀

第二十回卒業生（卅六名）（大正十年三月）

萩原良作　印旛豐住
原　義雄　同　富里
高田定吉　同　成田
安達一郎　印旛遠山
齋藤光治　同　成田
松岡勝重　同　遠山
鈴木除人　印旛大森
高野照典　同　成田
大宮竹雄　同　遠山
菅澤英　香取高岡
松田照應　印旛成田
內藤榮　茨城縣水江津
和田英　印旛　酒々井
大貫貞吉　同　安食
泉瑞敏正　夷隅古澤
小倉良太郎　印旛八生
椎名永良　同　安食
小海川昌則　同　久住
手島英　山武　千代田
成田圖書館員
千葉師範二部在學
早稻田高等學院在學
小學校教師
京都智山大學在學
千葉師範二部在學
實業
千葉師範二部在學
實業
小學校教師
千葉師範二部在學
實業
千葉師範二部在學
實業
小學校教師
實業
一年志願兵
實業
慶應義塾大學在學
實業
實業
東洋大學在學
隅田川運送株式會社在職
小學校教師
僧侶

第二十一回卒業生（卅八名）（大正十一年三月）

水戸高等學校在學
大島仁　印旛成田
根本五郎　同　富里
秋山榮吉　印旛八生
齋藤貞雄　同　公津
荻原道三　海上銚子
後藤愼平　印旛安食
山崎信夫　印旛遠山
磯山宣　印旛公津
福田登　同酒々井
藤崎巖　同　遠山
寺內彌茂　同　中郷
宇井聖　同　成田
石川秀雄　同　成田
丸善兵　同　公津
山倉文雄　同　久住
關川雅司　同　成田
小倉桂　同　成田
小川勳　同　富里
永山敬榮　福島縣　豐田

慈惠院醫學專門學校在學
竹村猛壽　印旛成田
石橋廣吉　香取滑河
榎田章　印旛成田
平山諦　同　成田
關谷重雄　同　公津
淺井義一　同　成田
島村治助　同　成田
太田家倚　印旛公津
飯高治夫　山武二川
岩澤丈夫　印旛遠山
藤崎昇　同　和田
埜平統一　同　中郷
岩澤多門　同　遠山
小林博　同　成田
高橋清　同　成田
相川己一郎　同　富里
關川安正　同　成田
木內正夫　同　成田
渡邊三郎　同　成田
桑原啓次郎　同　安食
千葉師範第二部在學
實業
千葉師範第二部在學
實業
千葉師範第二部在學
伊藤巖　印旛富里
根本克巳　同　八生
本多巳代治　同　遠山
諸岡一次　同　成田
加藤曉治　同　成田
藤崎勘司　同　遠山
石木晃　茨城縣　竹仁
丸山正臣　長野縣　明盛
萩原喜知太郎　印旛豐住
湯淺八郎　同　八生
山田忍　同　公津
加藤北二郎　同　八生
伊能春夫　山武二川
吉岡順　印旛中郷
吉田義法　安房田原
竹田正吉　印旛成田

成田高等女學校一覽

學曆……三三
沿革略……三四
大正十年度重要記事……三五
學則……三九
職員表……四〇
生徒表……四二
成田山女學校卒業生人名及現況……四二
卒業生人名及現況……四二
經費統計概表……五〇

卒業生及生徒郡別表

（大正十一年四月現在）

郡別	區別	五學年	四學年	三學年	二學年甲組	二學年乙組	一學年甲組	一學年乙組	計	卒業生
印旛	香取	二七	三五	四四	一八	二一	二四	二九	一九八	四三
	山武	三	五	二	四	四	六	五	二九	三五
	千葉	五	四	五	三	二	〇	一	二〇	三六
	市原	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三
	東葛飾	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	四
	匝瑳	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二
	海上	一	〇	一	〇	〇	〇	〇	二	一
	長生	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	一	一
	夷隅	〇	〇	〇	一	〇	一	〇	二	三
	君津	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	二
	安房	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	二
	他府縣	〇	一	一	〇	一	〇	一	三	五
	計	三九	四六	六四	五三	五六	六四	五六	二八七	三六六

經費

年度	俸給	雜給	需用費	雜費	賞與	營繕費	手當金	豫備金	合計
大正十年度決算	一八二五、八三〇	一四二、一八〇	四三一、六二四	七〇五、六四〇	三三六、六〇〇	九七八、〇一七	—	—	三四一八、六〇〇
大正十一年度豫算	一八四一六、〇〇〇	一四六〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	七六〇、〇〇〇	一九二、〇〇〇	七四〇、〇〇〇	—	二六〇、〇〇〇	三四一八、六〇〇

大正十一年度 學曆

第一學期　自四月一日至八月三十一日
第二學期　自九月一日至十二月廿一日
第三學期　自一月一日至三月三十一日
毎月　第一月曜日講堂訓話
毎月　第三月曜日學級會

四月

二日　入學式
四日　始業式
五日　午前八時半始業
上旬　同窓會
中旬　教授豫定記入
下旬　身體檢査

五月

上旬　遠足
十日　午前八時始業
中旬　校友會運動部會
廿七日　海軍記念日

六月

廿五日　地久節

七月

廿日　第二學期授業終
廿三日　成績發表、終業式
廿五日　夏季休業始
三十日　明治天皇祭

八月

三十一日　天長節

九月

一日　始業式
二日　午前八時始業
上旬　教授豫定記入
下旬　保證人會

十月

上旬　修學旅行
中旬　校友會學藝部會
三十一日　天長節祝賀式

十一月

一日　午前九時始業
上旬　校友會運動部大會

十二月

二十一日　第二學期授業終
廿四日　成績發表、終業式
廿五日　冬季休業始

一月

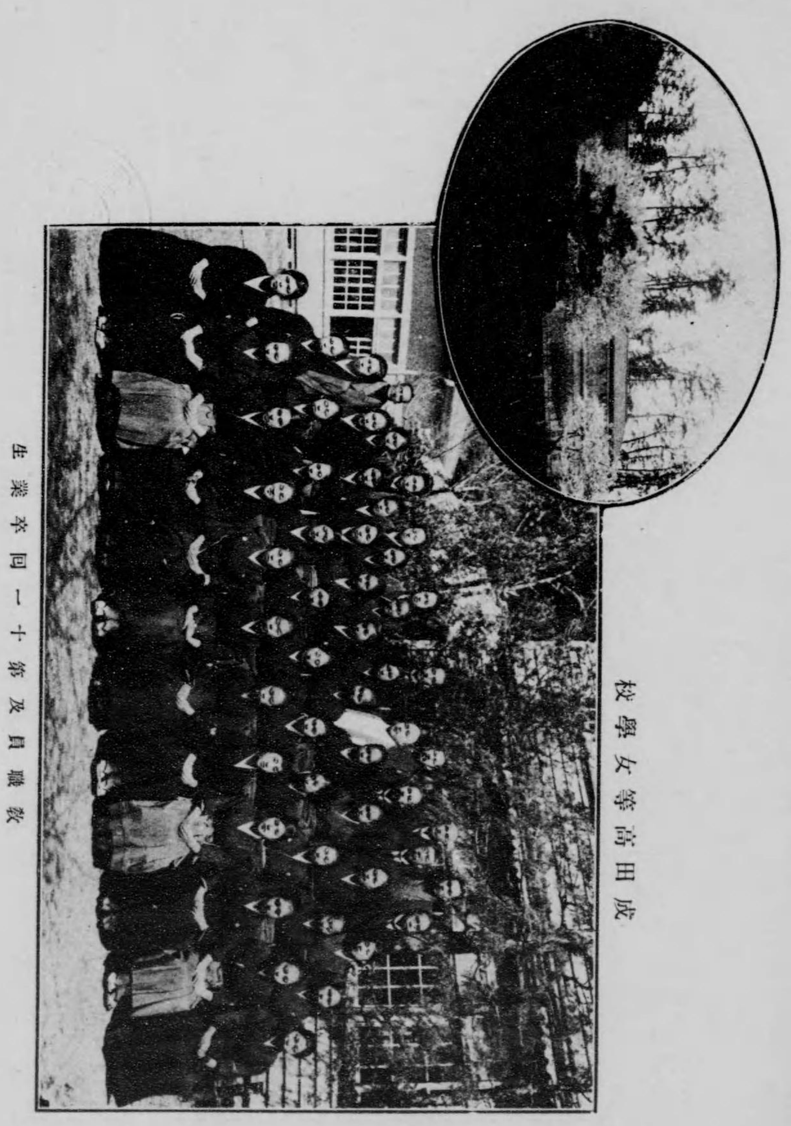
一日　新年祝賀式
七日　冬季休業終
八日　始業式
中旬　教授豫定記入
下旬　來學年度教科書選定

二月

十一日　紀元節祝賀式
十三日　創立記念祝賀式
同　日　校友會學藝部大會
本月中　卒業者ノ志望調査

三月

十日　陸軍記念日
十五日　第三學期終
十九日　成績發表、終業式
廿二日　證書授與式
未定　入學試驗
廿六日　春季休業始



校學女等高田成

生業卒回一十第及員職教

舍校

私立成田高等女學校一覽

◎沿革略

本校は元私立成田山女學校と稱し明治四十一年四月の創立に係り明治四十四年二月文部大臣の認可を得て成田高等女學校と改稱す所謂成田山五事業の一にして校主兼校長たる現成田山貫首石川僧正の慈心の下に生々發達しつゝあるものなり

本校に理事ありて校主兼校長を補査す石川甚兵衛、三橋金太郎、三橋重郎兵衛、小野寺清三郎の四氏は即ち其人にして石川理事現に專務たり

明治四十四年二月十三日文部大臣より本校設立の認可を受けてより爾後の沿革は大略左の如し

一明治四十四年三月廿一日本校々則を制定す

一同　四月一日成田中學校教諭中島喜一（高等師範學校出身）校務主監教諭に任ぜらる

一同　四月一日、二日の兩日を以て二、三、四學年の編入試驗を行ふ

一同　四月五日生徒八十四名に入學を許可し之を本科第四學年以下の各學年に分編す、同日始業式を行ふ

一明治四十五年三月第一回卒業生を出し、千葉縣知事臨席す

一四十四年十二月增築に着手せし雨中體操場、理科教室及普通教室等工を竣へ大正元年十一月より使用したり

一大正二年三月第二回卒業生出づ

一大正二年九月校務主監兼教諭中島喜一休職を命ぜらる

一同　十月理學士菅野皆可校務主監兼教諭に任ぜらる

一大正三年三月第三回卒業生を出す

一大正四年三月第四回卒業生を出せり

一大正五年三月第五回卒業生を出す

一大正六年三月第六回卒業生を出せり

一同　十一月校務主監兼教諭菅野皆可休職を命ぜらる

一同　十一月文學士中村安之助校務主監兼教諭に任ぜらる

一大正七年第七回卒業生を出せり

一大正八年三月第八回卒業生を出せり
一大正八年十月中村校務主監死去
一大正八年十二月文學士矢野太郎校務主監に任ぜらる
一大正九年三月第九回卒業生を出し
一大正十年三月第十回卒業生を出せり
一大正十一年三月第十一回卒業生を出す

◎大正十年度重要記事

四月五日　入學式、始業式、
四月九日　本縣廳内に中等學校醫の會議を開催せられ山内校醫出張
四月十二日　成田中學校教諭三橋信吉本校教諭兼任披露
五月二日　石本教諭就任披露
五月十二日　職員引率の下に全校生徒千葉及稻毛に遠足をなす
五月十八日　生徒の身體檢査を行へり
五月廿八日　相馬教諭依願解職
六月廿五日　地久節祝賀式擧行
六月廿五日　本縣中等學校地理科受持教員打合會に川島教諭安房中學校に出張
七月八日　千葉女子師範學校に家事科教員打合會開催せられ石本教諭出張
七月廿三日　第一學期終業式
七月三十日　明治天皇祭擧式
九月九日　縣下高等女學校長會議を千葉高等女學校に開かれ矢野主監出張
十月五日　四學年日光及松島方面に修學旅行三泊四日
十月六日　三學年鎌倉江ノ島及箱根方面に修學旅行二泊三日、二學年鎌倉江ノ島方面に修學旅行一泊二日
十月七日　一學年銚子に遠足
十一月十六日　第七回運動部大會開催
十二月廿四日　第二學期終業式、中里教諭告別式、
一月一日　新年祝賀式
二月一日　瀧澤教師の就任披露
二月十三日　創立記念式を擧げ後第十回學藝部大會を開く
三月廿二日　第十一回證書授與式擧行折原知事臨場
三月廿四日　入學試驗施行

◎學則

第一章　總則

第一條　本校ノ修業年限ハ本科四箇年トス
第二條　生徒定員ハ百六十人トス
第三條　休業日ハ左ノ如シ
一、祝日、大祭日
二、日曜日
三、皇后陛下御誕辰
四、紀念日、二月十三日
五、春季休業三月廿五日ヨリ四月四日ニ至ル
六、夏季休業七月廿五日ヨリ八月卅一日ニ至ル
七、冬季休業十二月廿六日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

第二章　學科課程及教授時數

第四條　本校ノ學科目ニ編物袋物挿花按摩ヲ加ヘ隨意科目トス
第五條　學科課程及ビ教授時數ハ左ノ如シ

學科目＼學年	第一學年 毎週時數	第二學年 毎週時數	第三學年 毎週時數	第四學年 毎週時數
修身	人倫道德ノ要旨、作法 二	二	一	一
國語漢文	講讀、習字、作文、文法 六	六	五	五
英語	讀方、譯解、書取、習字 三	三	三	三
歷史地理	本邦歷史、本邦地理 三	本邦歷史、外國地理 三	外國歷史、地理通論 三	地理通論 二
數學	整數、小數、諸等數、珠算 三	約數倍數、分數、比例、代數初步 三	比例、歩合、代數初步、珠算 三	開平、幾何初步、珠算 三
理科	植物、動物 二	動物、生理、衛生 二	化學、物理 三	物理 三
圖畫	自在畫 一	一	上幾何畫 一	上
家事			衣食住 三	家政、看病、育兒等 三
裁縫	五 縫方、裁方	五 上、繕方	四 上	四 上
音樂	二 單音唱歌	二 上	一 複音唱歌 上	一 上
體操	三 普通體操、遊戲	三 上	三 上	三 上
教育				二 理論ノ大要
計	三	三	三	三
編物袋物	一 編物	一 上	一 袋物	一 上
挿花	一 挿花	一 上	一 上	一 上
按摩			一 按摩	一 上

備考　編物袋物挿花按摩ハ課外ニ於テ志望者ニ課ス

第三章　入學及退學

第六條　生徒募集ハ學校長期日學年及人員ヲ定メ之ヲ公告スベシ但時宜ニ依リ臨時入學ヲ許ルスコトアルベシ

第七條　入學志願者ハ第一號書式ノ入學願書ニ第二號書式ノ履歴書及戸籍謄本ヲ添ヘテ差出スベシ

第八條　第一學年入學志願者ニ就キテハ試驗ニヨリテ其學力ヲ檢定ス

第九條　前條ノ試驗ハ國語算術日本地理日本歴史理科ニ就キ尋常小學校卒業程度ニ依リ之ヲ行フ

第十條　第二學年以上ニ入學ヲ許スベキ者ハ相當年齡ニ達シ學力試驗ニ合格シタルモノタルベシ

第十一條　入學ヲ許可セラレタル者ハ第三號書式ノ證書ヲ差出スベシ

第十二條　保證人ハ親權者若クハ後見人又ハ親族ニシテ一家計ヲ立テ本人ニ關シ一切ノ責ヲ負フニ足ルベキモノタルベシ

第十三條　保證人ノ住所學校所在地ヨリ一里以内ニ在ラザルトキハ一里以内ニ住所ヲ有シ一家計ヲ立ツルモノヲ以テ代理保證人ト定メ保證人連署ノ上之ヲ學校長ニ屆出ヅベシ

第十四條　學校長ハ必要ト認ムルトキハ保證人又ハ代理保證人ヲ換ヘシムルコトアルベシ

第十五條　保證人若シクハ代理保證人住所氏名ヲ變更シ又ハ改印シタル時ハ直ニ學校長ニ屆出ヅベシ

第十六條　生徒退學セントスルトキハ其理由ヲ記シ保證人連署ノ上學校長ニ願出ヅベシ

第十七條　生徒病氣其ノ他止ムヲ得ザル事由ニ由リ三ケ月以上出席シ難キトキハ期間ヲ定メ休學ヲ願出ヅルコトヲ得但シ期間ハ一ケ年ヲ超ユルコトヲ得ズ

第四章　修了及卒業

第十八條　各學科ノ課程ノ修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ成績ヲ考査シテ之ヲ定メ又ハ平素ノ學業及試驗ノ成績ヲ考査シテ之ヲ定ムベシ

第十九條　卒業證書及修業證書ハ第四號及第五號書式ニ依ル

第五章　授業料及入學料

第二十條　授業料ハ月額金二圓トシ毎月十日迄ニ之ヲ納メ特ニ其期日ヲ指定シタルトキハ其當日之ヲ納ムベシ但毎年八月ハ之ヲ徴收セズ

第廿一條　入學料ハ金一圓トシ入學許可ノ際之ヲ徴收ス

第六章　賞　罰

第廿二條　品行方正學術優秀ナル者ハ特待生トシテ授業料ノ全部又ハ一部ヲ免除シ若クハ賞品褒狀ヲ與フ

第廿三條　學校長ハ左ノ各項ニ該當スル者ニハ退學ヲ命ズ

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二　成業ノ見込ナシト認メタル者

三　出席常ナラザル者

第廿四條　規則命令ニ違背シ學校ノ風紀ヲ害スル者ハ其ノ輕重ニ依リ戒飭停學又ハ退學ニ處ス

第七章　寄宿舍及生徒取締

第廿五條　生徒ハ自宅ヨリ通學スル者及ビ學校長ノ許可ヲ受ケタル者ノ外總テ學校ノ指定スル場所ニ寄宿セシム

第廿六條　寄宿ハ自治自炊制トシ舍生ヲシテ輪番ニ之ヲ處理セシム

第廿七條　生徒取締ニ關スル規程ハ學校長之ヲ定ム

第八章　附　則

第廿八條　本校則施行ニ關スル細則及ビ其ノ他必要ナル内規ハ學校長之ヲ定ム

第一號書式

入學願書　（用紙半紙）

私儀御校第何學年ヘ入學志願ニ付御許可被成下度履歴書相添ヘ親權者（後見人）連署ヲ以テ此段相願候也

本　籍　何府縣何郡市何町村大字何何番地
現住所　何府縣何郡市何町村大字何何番地
年　月　日　華士族平民某何女
本人　氏　名印
生年月日

本　籍　記載方前ニ同ジ
現住所　何府縣何郡市何町村大字何何番地
華士族平民職業
右親權者（後見人）
氏　名印

千葉縣私立成田高等女學校長氏名殿

第二號書式

履歷書　（用紙半紙）

氏　名印
生年月日

一、本　籍　何府縣何郡市何町村大字何何番地
一、現住所　何府縣何郡市何町村大字何何番地
一、出生地　何府縣何郡市何町村大字何何番地
一、從前ノ教育
大正何年何月ヨリ同何年何月マテ何地ニ於テ何科第何學年修行又ハ卒業或ハ大正何年何月ヨリ同何年何月マテ何地ニ於テ何某ニ就キ又ハ家庭ニ於テ何何修業等
一、賞　罰
大正何年何月何地何所ニ於テ何々ニ付褒賞又ハ懲罰ヲ受ク等
一、健康ノ狀態
生來著シキ疾患ニ罹リシコトノ有無及ビ病名並ニ目下ノ狀態等
右之通ニ候也

年　月　日　　右　氏　名印

第三號書式

印
三錢ノ收入印紙貼用

在學證書　（用紙美濃紙）

私儀御校ヘ入學御許可相成候ニ付テハ在學中御規則命令堅ク遵奉可致候也

本人　氏　名印
生年月日

前書ノ通リ相違無之ニ付拙者保證人ニ相立チ御規則命令堅ク相守ラセ本人ニ關スル事件ヲ一切引受可申候也

本　籍　何府縣何郡市何町村大字何何番地
現住所　何府縣何郡市何町村大字何何番地
華族、士族、平民職業
右親權者（後見人又ハ親族）

年　月　日　　保證人　氏　名印

千葉縣私立成田高等女學校長氏名殿

◎職員

受持學科	職名	姓名	貫籍	就職年月
修身、歷史	校主兼校長	石川　照勤	千葉縣	
英語、	主監兼教諭	矢野　太郎	愛媛縣	大正八年十二月
作法、家事、裁縫、	教諭	日野健四郎	德島縣	大正九年十月
國語、習字、	教諭	石本　愛	島根縣	大正十年五月
珠算、地理、漢文、教育	教諭 教務係	青木三井子	京都府	大正七年一月
裁縫、	教諭心得	川島能三郎	千葉縣	明治四十四年四月
數學、	教諭兼任	山內　春枝	東京府	大正九年十一月
博物、地理、	教諭兼任	相田喜之助	埼玉縣	大正九年十月
數學、物理、化學、	囑託教師	大久原安次	千葉縣	大正九年十月
圖畫、	囑託教師	瀧澤　榮亮	千葉縣	大正十一年二月
挿花、	囑託教師	石井　義一	千葉縣	大正十一年四月
按摩、	囑託教師	吉岡　一蝶	千葉縣	明治四十四年四月
挿花、	囑託教師	酒井　泰作	福島縣	大正四年四月
	助手	加藤　あい	千葉縣	大正八年七月
	書記	伊藤　總平	千葉縣	明治四十五年四月
	學校醫	山內平治郎	千葉縣	明治四十四年四月

◎生徒表

（大正十一年四月二十五日現在）　（いろは順）

第四學年（三十九名）

學年主任　教諭　石本愛

岩井きく　印旛大森
井浦多美子　香取　小見川
伊藤きわ　印旛中郷
飯沼つね　印旛　酒々井
石橋なか　印旛成田
石原とみ　印旛富里
林八千代　印旛八生
原　え津　印旛根郷
細川喜與　埼玉川越
土井ゑい　印旛公津
土井きい　印旛公津
土井よし　印旛公津
岡田はな　東葛飾　布佐
大澤しげの　印旛本埜
大木美代　印旛八街
太田鹿子　印旛公津
小倉茂子　印旛成田
小野寺シゲ　印旛成田
勝田　俊　印旛八生
海保けい　茨城　金江津
小池よし　香取飯高
吉橋きん　印旛　旭
椿　たき　香取滑河
並木菊子　印旛遠山
鵜澤喜代　山武蓮沼
櫻井けい　香取　小御門
京増はる　印旛　酒々井
島田輝代　印旛　酒々井
藤崎まつ　印旛安食
後藤瑞子　印旛八生
小泉繁子　印旛成田
後藤歌　印旛安食
秋山みつ　印旛八生
島田清　印旛　酒々井
宮川幾子　印旛　酒々井
平山まさ　印旛成田
平山はつ　印旛成田
平野江榮　印旛八生
三橋孝子　印旛成田
宮内はる　印旛八生
宮川幾子　印旛　酒々井
島田清　印旛　酒々井
平山とし　香取多古
關川昭　印旛成田
鈴木トシ　印旛公津
鈴木つる　茨城布川
菅谷とし　茨城鹿島

第三學年（四十九名）

學年主任　教諭　心得　山内春枝

石川たけ　印旛成田
岩田とみ　印旛布鎌
石原　節　印旛安食
豐田登代　印旛成田
土井てい　印旛公津
及川ナカ　匝瑳　榮
岡田けい　印旛本埜
大木まつ　印旛中郷
大久保ちか　印旛本埜
小川貞女　印旛八生
小川ふじ　印旛八生
綿貫綾子　印旛　酒々井
飯坂はる　印旛根郷
片岡とめ　印旛成田
吉岡　誠　印旛中郷
玉村ハナ　茨城布川
高槻洋子　福島木幡
高橋しのふ　香取滑河
竹尾きよ　印旛和田
藤原せつ　香取　小御門
湯淺ゆう　印旛八生
湯淺つね　印旛八生
中島さき　印旛安食
仲山勢い　印旛公津
野口とき　印旛豐住
山田かつ　印旛成田
山口總江　印旛成田
山口ひで　印旛八生
松田ふく　印旛成田
增田とき　香取新島
藤原せつ　香取　小御門
船橋ツネ　印旛成田
紺谷滿枝　印旛成田
小泉繁子　印旛成田
後藤歌　印旛安食
秋山みつ　印旛八生
青野むつ　香取高岡
相京タケ　印旛公津
齋藤あい　印旛遠山
齋藤きよ　印旛　酒々井
鈴木つる　茨城布川
菅谷とし　茨城鹿島

第二學年（四十六名）

學年主任　教諭　青木三井子

岩館はる　印旛成田
飯田ちよ　茨城　金江津
伊藤ミツ　印旛八生
石井かつ　印旛富里
石橋あき　印旛中郷
林　〃子　印旛成田
長谷川のぶ　印旛成田
戸田幸子　福岡水田
富田武子　印旛成田
大澤　敦　印旛八生
小倉治子　印旛成田
小倉まさ　印旛七榮
岡田ゆき　印旛本埜
大木ヤキ　印旛中郷
小川春子　印旛八生
大木ゆき　印旛八生
大竹かね　印旛富里
河野八千代　印旛　酒々井
中野美津子　香取高岡
永田順子　印旛成田
野島　律　印旛豐住
牧野とし　印旛成田
丸　よし　印旛公津
京須八重　印旛成田
藤崎けい　印旛遠山
藤倉しげ　印旛成田
古川　壽　印旛成田
小林ハル　茨城　金江津
越川富美子　印旛木下
後藤てる　印旛八生
遠藤ゆき　印旛公津
手島せつ　山武東金
秋山ふさ　印旛八生
相川よく　印旛公津
青柳のぶ　印旛公津
齋藤いと　印旛木下
齋藤きよ　印旛公津
坂田　信　印旛富里
木内つね　印旛　酒々井
湯淺てい　印旛八生
庄司つる　茨城水戸
檜垣　韻　印旛久住
諸岡ます　印旛成田
諸岡ます　印旛成田
關口しげ　印旛久住
鈴木こと　印旛富里

第一學年（五十三名）

學年主任　教諭　石本愛

磯山　貞　印旛公津
石橋たみ　印旛成田
石橋つたゝ　香取滑河
石橋とよ　印旛中郷
石原せつ　印旛富里
石井春代　安房健田
石川せつ　印旛富里
伊藤千代　印旛白井
池田頼子　山武横宮
今井春子　郡馬富岡
稲垣　惠　印旛成田
堀江智惠　東京本所
戸村千代　印旛和田
小川つぎ　印旛八生
小鯵川みち　印旛公津
小倉　梅　印旛成田
小野寺アイ　印旛成田
小高さわ　山武東金
小倉とり　印旛成田
渡邊　愛　印旛成田
加藤きん　印旛成田
勝田　倭　印旛安食
吉岡喜久枝　印旛中郷
吉岡たか　印旛公津
多田喜代　印旛公津
高橋さゆり　香取滑河
高橋さだ　茨城　金江津
塚田悅子　印旛成田
中路とみ　印旛成田
夏海いま　印旛成田
野々宮みつ　印旛成田
葛生ちよ　印旛久住
柳本喜惠子　印旛成田
藤田光江　印旛　酒々井
淺井　壽　印旛成田
秋谷ふん　印旛木下
麻生菊枝　山武　千代田
青木さう　印旛本埜
青山まつ　茨城　金江津
佐久間かつ　印旛成田
佐伯智惠子　長生土睦
木村よし　香取多古
木下けい　印旛成田
湯淺公己　印旛八生
湯淺みつ　印旛八生
椎名　靜　印旛大森
柴崎ゆき　印旛大森
日暮とく　印旛豐住
平山いち　印旛成田
森下ナミ子　印旛遠山
菅谷幾世　印旛成田
鈴木とみ　印旛成田
鈴木喜惠　印旛船穂

◎成田山女學校卒業生人名（明治四十四年三月）（いろは順）

（○は結婚の印）

○藤崎好（舊岩瀬）
伊藤きよ
○石原みや
○幡谷もと
○長谷川りう
○長谷川きみ
戸塚ひさ

○小川とし
○小田恒近
○泉とみ（舊吉岡）
吉田とよ
○田中あい
○杉山かね（舊上原）
大塚とく

○大木りう
○山野かよ
○若林きよ（舊丸）
○香取てい（舊丸）
○深栖喜久
○秋葉ふさ
櫻井ハナ

木内けい
木内欣
三橋タイ
○菅澤いち
鈴木ぜき

◎卒業生人名現況表（いろは順）

（○は結婚の印×は死亡の印）

第一回卒業生（明治四十五年三月）（一〇）

○藤崎好（岩瀬改）印旛成田
○平井もと（幡谷改）印旛成田
×田中あい印旛成田
○杉山かね（上原改）印旛成田
○大木りう印旛中郷
○香取てい（丸改）印旛公津
○山野かよ印旛成田
○生田欣代（木内改）印旛成田
×木内けい印旛成田

小學校教員

第二回卒業生（大正二年三月）（一二）

○勝田ゆき（池田改）印旛中郷
○池田みち印旛成田
○石原静印旛成田
○川村くに（林改）印旛八生
○渡邊清喜安房湊
竹村きん（加藤改）印旛中郷
○横山かよ（田中改）印旛成田
竹村きく印旛富里

小學校教員

三橋タイ印旛中郷

第三回卒業生（大正三年三月）（二一）

○澤田ひさ（伊藤改）印旛八生
飯泉しげ印旛成田
○石原ひろ印旛成田
○谷田部ゆき（林改）印旛成田
○師岡幸（幡谷改）印旛成田
土井わき印旛埜原
○加藤あい印旛成田
○鈴木てい（吉岡改）印旛公津
○鈴木とし（吉岡改）印旛公津
○平山かね（谷平改）印旛久住
○荒木キク子（露崎改）長生五郷
○綿貫きよ（成田改）印旛佐倉
○渡邊さだ（武藤改）印旛永治
○石橋のぶ（大島改）印旛八生
○大須賀ゆう印旛安食

小學校教員

○齋藤朝（中島改）君津青堀
○石井光子（大友改）宮城仙臺
○武津キン（小林改）東京牛込
○秋葉ふて山武城東

第四回卒業生（大正四年三月）（二八）

大木美津印旛安食
○土井わか（並木改）印旛公津
○蕨くに印旛公津
○青柳うめ（綿貫改）茨城取手
○安田もと（加藤改）印旛成田
神戸もと印旛成田
×川島フサ印旛富里
竹村しげ印旛富里
根本菊千葉椎名
○打木すづ（並木改）印旛遠山
武藤きみ茨城文
○松戸その（猪野改）山武源
○伊藤ふい戸板裁縫女學校卒業（平山改）印旛成田
○加藤くに東京和洋裁縫學校卒業（桑原改）印旛安食
○藤崎たか（山下改）印旛成田
○茂木包（藤崎改）印旛富里
○佐竹和歌子（宮崎改）東京下谷
○土屋けい（宮崎改）印旛成田
○北村菊代（鹽田改）×印旛布鎌

小學校教員
○大竹たい　香取小御門　印旛六合
小學校教員
大木あやめ　印旛中郷　小川敬　印旛志津
小學校教員
（柔原改）○岩井なみ　印旛安食　黑川りき　印旛成田　○高橋きく　香取滑河
山野いく　印旛成田　×上原こう　印旛成田
（山田改）○土井滿喜　印旛安食　小學校教員　野平吉野　印旛豐住
（山田改）○柴宮よし　印旛八生　（野平改）○横堀ゆき　印旛豐住
（山田改）○齋藤わか　印旛豐住　東京裁縫女學校卒業（大三川改）○尾形本子　香取多古
小學校教員　（大木改）○廣澤てい　印旛成田
增岡りき　埼玉藤田　（奥澤改）○染谷春野　印旛白井
○秋山うめ　印旛八生　（山内改）○土肥德子　印旛成田
東京高等師範學校保育科卒業　天野眞知　千葉大多喜　山本くに　印旛安食
×淺倉みつ　印旛安食　京增たか　印旛成田
湯村とよ　宮城仙臺　（藤崎改）○相京くに　印旛遠山
（宮內改）○篠原みや　印旛八生　和洋裁縫女學校卒業　小坂ひめ　印旛酒々井
○谷とく　印旛公津　日本女子大學在學　圓城寺てい　印旛公津
第五回卒業生　○齋藤こう　印旛成田
（大正五年三月）（二六）　○湯淺うら　印旛八生
（磯部改）○大野イク　印旛久住　○三橋みち　印旛富里
石原ゆう　印旛成田　○三橋たか　印旛成田
飯倉きく　印旛成田　平野香根　市原高濱
○馬場ちよ　印旛宗像

（關川改）○藤崎鳳　印旛成田
東京共立女子職業學校卒業　鈴木けい　東葛飾明
第六回卒業生　戸板裁縫女學校卒業
（大正六年三月）（二九）　成田幼稚園保姆
×岩舘かね　印旛遠山　○山本米　印旛成田
小學校教員　石原やす　印旛成田　山崎たけ　印旛阿蘇
（小川改）○吉原晃　印旛八生　淺井ふし　印旛成田
戸板裁縫女學校卒業　萩原美子　印旛千代田　○相京ひな　印旛公津
渡貫はる　印旛根津　齋藤ヨシ　印旛遠山
川口コウ　印旛佐倉　佐倉大石裁縫女學校卒業　京須菊江　印旛成田
（川崎改）○齋藤よし　印旛公津　水野しゆ　印旛成田
○吉岡豐子　印旛木下　小學校教員　（篠田改）○宮川きよ　新潟源
○高川綾子　印旛成田　○石井喜久重　茨城金沢津
（露崎改）○上原君子　長生五郷　女子醫學專門學校卒業　廣瀨てい　印旛成田
（夏海改）○岩井千代　印旛遠山　○諸岡米　印旛成田
○大友らく　宮城仙臺　○須藤けよ　印旛六合
○武藤ミヤ　印旛水治　第七回卒業生
×大木道子　印旛成田　（大正七年三月）（二七）
○大野千代　印旛旭　日本女子大學在學　岩井ふぢ　印旛本埜
（岡本改）○佐久間ゼヒ志　印旛富里　○岩井こう　印旛大森
山本せき　印旛豐住　（石井改）○杉野ゑい　印旛豐住
石川てい　印旛成田
土井きく　千葉大和田
（土肥改）○鈴木はな　印旛公津
土肥なつ　印旛公津

神崎りん　印旛遠山
加瀬千代　香取多古
大徳三枝　印旛公津
（谷　改）
○竹田よし　印旛久住
（玉村改）
○三橋千代　茨城布川
山口ふじ　印旛成田
山田よし　印旛豐住
小學校教員
○藤崎いし　印旛遠山
小林とし　印旛阿蘇
小坂てる　印旛酒々井
後藤とき　印旛安食
○遠藤はる　印旛公津
（深山改）
○押尾とく　印旛六合
（宮内改）
○丸きよ　印旛八生
小學校教員
宮内三千代　長生一松
檜垣千代　印旛久住
關川利子　印旛成田
○諏訪原てる　印旛八生
鈴木きよ　印旛臧田

第八回卒業生（大正八年三月）（三二）

五十嵐ゆき　東葛飾一方
石原つや　印旛四街道
石上圭　海上瀧郷
池田喜代　福岡城内
長谷川よし　埼玉小林
岡部雪子　三重浦田
○小川むつ　印旛八生
×小川喜美　東京淺草
小川きい　印旛八生
小學校教員
×勝田ふみ　印旛安食
吉田馳　印旛公津
瀧澤喜久　印旛成田
東京共立女子職業學校卒業
高川種子　安房北三原
中村はる　印旛成田
中島清子　長野四季尾
女子美術學校在學
上野なを子　東京麻布
大久保しげ　印旛本埜
大川さい　印旛成田
（山田改）
○加藤みつ　印旛豐住

○山田滿壽　印旛安食
山内とわ　印旛成田
○山内泰子　印旛成田
藤崎三代　千葉更科
福田とら　印旛成田
淺井いし　印旛成田
坂本さま　茨城文間
湯淺達　印旛八生
島田惠　印旛酒々井
日暮てい　印旛中郷
○清宮いつ　印旛八生
本橋こう　印旛本埜
關川郁　印旛成田
成田幼稚園保姆
小學校教員
東京共立女子職業學校卒業
東京女子高等師範學校在學
奈良女子高等師範學校在學

第九回卒業生（大正九年三月）（三一）

岩舘やす　印旛成田
石井やす　印旛酒々井
石井タケ　印旛遠山
○伊藤喜代　印旛富里
伊藤てる　印旛成田
飯田敏子　茨城八原
女子醫學專門學校在學
池田きよ　印旛富里
土井とし　印旛公津
○土井とま　印旛公津
大木とま　印旛成田
小川きよ　印旛公津
小川かく　印旛公津
小川靜　印旛八生
香取操　印旛船穂
和洋裁縫女學校卒業
宇都宮高等女學校教師
川上きく　印旛臼井
千葉縣女子師範學校第二部卒業
谷川たま　印旛酒々井
竹村きみ　印旛富里
小學校教員
根本テル　印旛豐住
仲山千代　印旛公津
宇井幾久子　印旛成田
山田喜代　印旛八生
小學校教員
山本あう　山武日向
山内貞子　印旛成田
山本ふげ　印旛成田
福田光子　印旛酒々井
（小林改）
○伊藤せい　印旛白井

寺内三枝　印旛成田
坂田コウ　印旛富里
宮島頼子　印旛大森
三須知衣　印旛川上
杉田はな　印旛安食

東京津田英學塾在學

第十回卒業生（大正十年三月）（二六）

○高松婦久　印旛成田（石川改）
伊東とも　山武上堺
林君代　印旛八生
尾崎サト　山武松尾
○小川てい　印旛公津
小野寺千代子　印旛成田
海瀬よしに　安房稲都
○神崎あい　印旛遠山
吉岡琪子　印旛木下
○檜垣うめ　印旛公津（谷改）
中山たつ　印旛成田
中越加津子　印旛成田
葛生ゐつ　印旛安食
山田布知　印旛八生

小學校教員
東京共立女子職業學校在學
東京裁縫女學校在學
東京女子高師保育科在學
帝國女子專門學校在學

○山田勢い　印旛八生
中野哲子　香取高岡
○松田さだ　印旛成田
×丸みち　印旛公津
古田千代　印旛八生（甲賀郡　布佐）
兒島愛　茨城　金江津
後藤たま　印旛安食
篠田みつ　印旛遠山
遠藤ゆう　印旛公津
須藤静子　印旛六合
鈴木好枝　茨城布川
○鈴木いく　印旛六合

女子醫學專門學校在學

第十一回卒業生（大正十一年三月）（三八）

石橋喜代　印旛成田
飯倉ひさ　印旛成田
秦野とく　印旛公津
堀千代　南下　大久保
堀内三鶴　高知津呂
大木みつ　印旛八生
加藤くに　印旛八生

大阪古屋英學塾在學

神崎やす　印旛遠山
川村長子　印旛成田
川島まつ　印旛　酒々井
田中はな　茨城龍崎
高橋こと　印旛大森
高川興子　北三原
谷すい　印旛公津
竹村嘉代　印旛富里
増淵才　印旛安食
小倉松　印旛成田
黒田くに　印旛成田
山本たか　印旛安食
山田てい　印旛八生
矢野敬　愛媛久米
藤崎シン　印旛遠山
藤崎鈴　印旛遠山
藤崎たい　印旛　酒々井
藤崎ふみ　印旛遠山
小坂とめ　印旛　酒々井
寺本きみ　印旛八生

千葉女子師範二部在學
東京女子高等師範學校專攻科在學
千葉女子師範二部在學

齋藤ゑけ　市原八幡
齋藤てい　印旛遠山
佐瀬より　印旛八生
湯浅はな　印旛八生
宮崎秀子　長生八積
篠崎芳枝　印旛木下
日暮トミ　印旛中郷
泉對ヒロ　千葉豊富
菅壽美　匝瑳椿海
鈴木とし　印旛成田
鈴木錦　秋田本荘

◎經費統計概表

年度	俸給	傭給	手當	賞與	旅費	需用費	營繕費	雜費	準備費	合計
四十四年度決算	二八三、八四〇	一〇八、〇〇〇	七二、〇〇〇	二二三、六九	四五、六〇〇	六二三、八二〇	二八三、六二一	二七七、一二〇		四四四、七九二
四十五年度決算	三八三、三七〇	一〇八、〇〇〇	六三、〇〇〇	二二九、六〇〇	一〇〇、八〇〇	八六二、〇二一	八〇、八二二	二八五、八八〇		四八九、三七〇
大正二年度決算	四二〇、一九〇	一〇八、〇〇〇	五六、〇〇〇	五八二、二九	六八、五〇〇	九四四、七七五	九八、四三五	四三二、五二〇		七二九、五二〇
大正三年度決算	四三三、二〇〇	一二四、二〇〇	五六、〇〇〇	二二五、四〇〇	九三、〇〇〇	九五七、七二五	五〇一、八六五	四五〇、五二〇		六四〇、二八〇
大正四年度決算	四五二、〇〇〇	一二二、〇〇〇	五六、〇〇〇	三四〇、〇六〇	一一〇、一五〇	一二〇八、八二五	四七二、八一五	七七九、二〇四		七四六、二八一
大正五年度決算	四五七、八〇〇	一二二、〇〇〇	五六、〇〇〇	二七七、四九〇	一四七、一一〇	八三五、八五一	二四二、五〇〇	七〇九、五〇〇		六六三、三三〇
大正六年度決算	四八五四、六〇〇	一四六、〇五〇	五六、〇〇〇	九七三、九二〇	二三〇、八九〇	七二四、〇二〇	一六一、四二〇	三五七、七〇六		七四八四、〇〇六
大正七年度決算	五一六、七五〇	一九六、〇〇〇	五六、〇〇〇	五六八、六九〇	九七、四五〇	六八一、一一五	三一四、一七〇	五二五、九四八		七五七八、四一
大正八年度決算	八五三、六七〇	二〇三、〇〇〇	五六、〇〇〇	四〇〇、二〇〇	二一〇、四九〇	一七六九、四六〇	五七五、二〇五	一〇八九、五四〇		二二九五、五六六
大正九年度決算	一〇一四、一六七〇	四〇八、〇〇〇	五六、〇〇〇	一一七五、六二一	二九八、五五〇	一〇七六、〇四〇	五二五、七五五	一四三六、九六四		一五一三八、六一六
大正十年度決算	九六五五、四四〇	四三〇、〇〇〇	五六、〇〇〇	一三九四、四五〇	三四一、三六〇	一六九二、四五九	五九四、一六〇	一四五四、五一〇		一五五四八、五六〇

成田幼稚園一覽

園歌……
沿革略附職員、經費……五一
入退園及年度末現員調……五三
保育修了幼兒數……五四

成田幼稚園

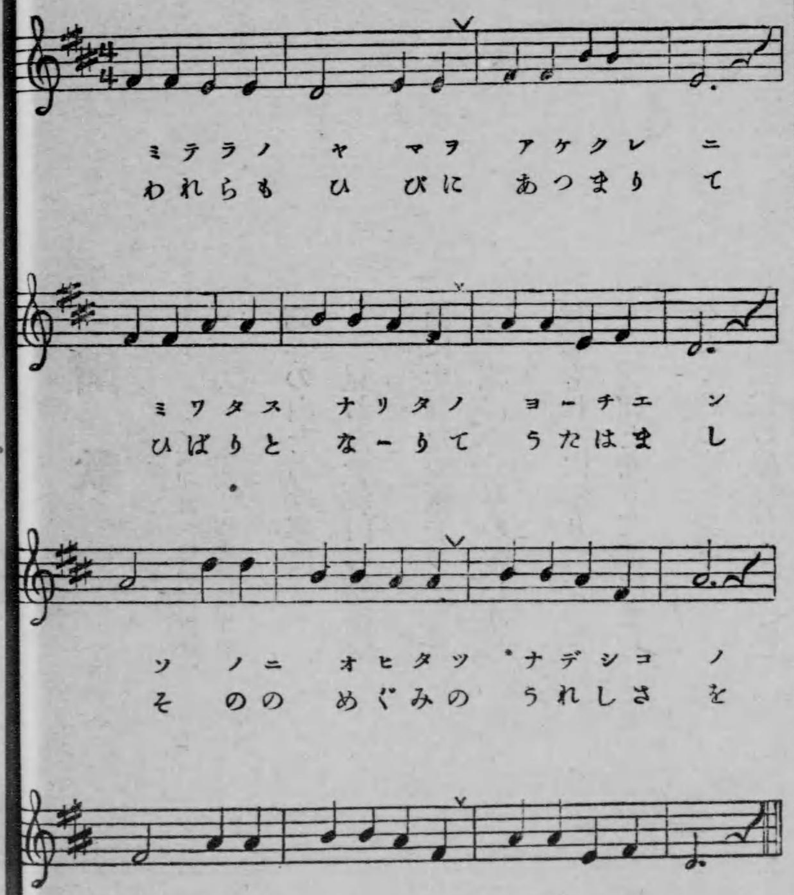
全景

職員及十七回保育修了者

園歌

大和田　建樹氏作歌
小山　作之助氏作曲

御寺の山をあけ暮に
　見わたす成田の幼稚園
園に生ひたつ撫子の
　花にめくみの露しけし
我等も日々に集りて
　雲雀となりて謠はまし
そのゝ惠の嬉しさを
　御代の惠のたのしさを



私立成田幼稚園一覽

◎沿革略

本園は明治三十八年五月の創立にして保育を開始せしは其月の二十四日也而して開園式は六月一日町立成田尋常小學校内假園舍に於て擧行せり

假園舍の狹隘なるにも拘はらず幼兒入園の申込は月毎に增加し行くの趨勢なるが故に園舍新築の必要を生じ同年の十月地を成田山の東南、向臺と稱する一區域をトし此所に工事に着手することゝ爲り而して翌三十九年六月三日園舍新築落成の式典を擧ぐるとを得たり

新築に關する工事費並に諸般の設備費は概算約一萬餘圓内二千圓は成田區よりの寄附にかゝり餘は悉く新勝寺に於て負擔支辨せり

園舍の位置は成田町成田小字向臺と稱する所にして町の東南方に位し四方の眺望極めて佳く四季の風光亦大に推稱するに足る高燥なる地域也

園の總敷地は三千七十五坪内遊園に屬するもの約二千六百坪花壇、砂場、築山、藤棚等を設け自餘は所々に樹木を植えて大に趣を添へたり而して園舍の總建坪は二百四十餘坪其内譯左の如し

一昇降口	一　十二坪
一保育室	四　四十九坪五合
一園長室	一　三坪
一恩物室兼保姆室	一　八坪
一遊戯室	一　四十八坪
一應接室	一　四坪
一靜養室	一　四坪
一廊下、便所	六十四坪五合
一保姆住宅	二　三十四坪
一小使室等附屬建物	十七坪二合五勺

大略右の如くにして其構造上特色とも見るべきものなきも只主として幼兒の出入の便を計るが爲めに廣き昇降口を園舍の正面に置きて有觸たる玄關構を設けず南面にして空氣の流通光線の射入等に意を注ぎ專ら保

育上の便宜を旨とし又華美に渉るを避けて質實を旨としたり、而して全般に亘る工事の設計は斯道に名ある服部文部省技手之に當られたり。

かくて園舍の新築落成と同時に幼兒保育の效果を完うせんが爲に家庭との連絡を計り屢次保育懇話會を開きて園兒の保護者を招集し或は不定期刊行の雜誌「撫子」を發刊して其連絡の機關とし聊か得る所ありき

保育の事は保姆專ら其の任に當り保育主任之を指導監督す其他全般の庶務等に至りては園長之を總攬し理事之が諮問の任に當る而して園長は園主之を兼ね理事は園主之を囑託す外に幹事、會計主任、園醫あり共に園主の任命する所たり。

園主兼園長は成田山貫首石川僧正にして理事は石川甚兵衛、三橋重郎兵衛、關川博道の三人也內三橋理事は幹事を關川理事は園醫を兼ね別に淺井儀助會計主任たり。右の外現在職員は保育主任以下保姆四名なり左の如し。

職名	族籍	姓名	就職年月
保育主任	德島縣士族	山口　政子	大正三年十月
保姆	神奈川縣平民	若命　きみ	大正十年三月
保姆	千葉縣平民	淺井　よし	大正七年十一月
保姆	千葉縣平民	山內　とわ	大正九年三月
保姆	千葉縣平民	海瀨よしゑ	大正十年五月
保姆見習	千葉縣平民	秋葉トミ子	大正十一年四月

本園の新築費及經費は左の如くにして保育料以外は凡て新勝寺の負擔支出する所のもの也。而して保育料として保護者より徵收する料金は一人一ヶ月五十錢とし二人以上を通園せしむるものは一人每に半減とす

一金壹萬四百七十一圓八十五錢一厘

敷地買入及新築費、落成式費

一金參千五百八圓八十五錢一厘（自三十八年六月至四十年三月）經費

一金壹千八百八圓十六錢五厘（四十年度經費）

一金壹千九百四十圓三十九錢六厘（四十一年度經費）

一金壹千五百二十七圓三錢三厘（四十二年度經費）

一金壹千七百二十五圓四十二錢五厘（四十三年度經費）

一金壹千九百三十五圓七十錢四厘（四十四年度經費）

一金壹千九百二圓九十五錢四厘（大正元年度經費）

一金貳千一百四十圓十五錢四厘（大正二年度經費）

一金貳千三百四十一圓十四錢七厘（大正三年度經費）

一金參千壹百四拾六圓五拾錢五厘（大正四年度經費）

一金壹千九百九拾一圓三拾四錢八厘（大正五年度經費）

一金壹千九百五拾四圓七拾八錢五厘（大正六年度經費）

一金貳千四百五拾九圓七拾參錢（大正七年度經費）

一金參千四百九拾五圓九拾七錢（大正八年度經費）

一金參千六百九拾五圓二拾六錢（大正九年度經費）

一金四千九百四十九圓九拾錢（大正拾年度經費）

合計五萬八百九拾六圓拾八錢

最近三箇年經費平均額

金四千四拾七圓四錢

◎入退園及年度末現員調

年度		入園	卒業	半途退園	死亡	年度末現員
明治三十八年度	男	四二	一三	四	〇	二五
	女	三九	九	六	一	二三
明治三十九年度	男	二三	一五	九	〇	二四
	女	三〇	二三	七	一	二二
明治四十年度	男	二六	二二	一〇	〇	一八
	女	二六	二〇	四	〇	二四
明治四十一年度	男	二六	一二	六	〇	二六
	女	二四	一五	七	〇	二六
明治四十二年度	男	三一	二〇	一一	一	二五
	女	三一	一九	五	〇	三三
明治四十三年度	男	二九	一七	七	〇	三〇
	女	二二	二〇	九	〇	二六
明治四十四年度	男	四九	二三	一七	〇	三九
	女	四一	一七	一〇	〇	四〇
大正元年度	男	二五	一九	二	〇	四三
	女	二五	一九	四	〇	四二
大正二年度	男	二〇	二九	九	〇	二五
	女	三〇	二六	六	二	三八
大正三年度	男	二〇	一三	六	三	二三
	女	二六	一六	九	〇	三六
大正四年度	男	二六	九	九	〇	三一
	女	三二	一八	一三	〇	三八
大正五年度	男	二五	一五	一二	〇	三〇
	女	二四	二〇	九	〇	三二
大正六年度	男	三〇	二二	一	一	三五
	女	二八	一八	六	〇	三六

年度		入園	卒業	中途退園	死亡	年度末現員
大正七年度	男	二五	二一	〇	四	三六
	女	二八	二〇	四	一	三九
大正八年度	男	二六	二一	四	〇	三七
	女	二一	二四	六	一	二九
大正九年度	男	二二	二一	二	一	三四
	女	一九	一六	七	〇	二七
大正十年度	男	三一	二三	七	一	三四
	女	二六	一九	七	〇	二七

右の外大正十一年四月末日調査現在園兒數男五十七人女四十四人合計百一人

◎保育修了幼兒數

明治三十八年度二十二人　男一三　女九

保育期間	修了幼兒姓名	保育期間	修了幼兒姓名	保育期間	修了幼兒姓名
十ヶ月	菅谷清治	十ヶ月	松田幸郷	十ヶ月	豐田謹悟
同	神山雅一	同	諸岡照保	同	鈴木德治
同	柳本富治	同	伊藤美榮	同	長竹達三
同	小島富岡	同	若葉誠一	同	井阪あさえ
同	齋藤アイ	同	增村重治	同	竹内源太郎

明治三十九年度三十八人　男二三　女一五

十ヶ月	小泉鄉	十ヶ月	三橋たか	十ヶ月	野々宮らん
同	飯倉菊	同	關川鳳		
同	黑川しめ	同	山内德		

一年十ヶ月	藤倉武男	一年十ヶ月	關瀨てい	十一ヶ月	瀧澤直
同	吉岡源太郎	同	大木道子	同	露崎君子
同	山田清吉	同	古矢さだ	同	人見良
同	加藤たか	同	鈴木琴	同	水野ソヨ
同	小倉とし	一年七ヶ月	渡邊英太郎	同	下村貞太郎
同	高川綾子	一年三ヶ月	岩瀨くみ	同	山下りう
同	寺内安子	一ヶ年	水野しま	十ヶ月	鳥居良之助
同	山内卯之助	同	堀木治	同	河野百合
同	堺勇	同	石井勝男	同	椎名熊司
同	淺井よし	同	酒井しず	同	野々部嘉代
同	神戸隆太郎	同	椿ヒデ	同	石橋治平
同	關川利子	同	茂手木よし	七ヶ月	石井敏子
同	三橋衛吉	同	秋山さつき		

明治四十年度四十二人　男二二　女二〇

二年十ヶ月	石橋孝三郎	二年十ヶ月	大塚光雄	二年十ヶ月	高安俊也
同	石川順	同	渡邊好雄	同	川村さだ
同	小野寺武夫	同	川村正也	一ヶ年	忽那勇

二年十ヶ月	後藤英子	二年十ヶ月	河野さみ	一ヶ年	藤倉きく
同	佐久間はる	同	大木たみ	同	渡邊やす
同	三橋榮子	同	田口稔	同	宇井富美
同	齋藤昭	同	古川とし	同	柳金治
同	紺谷益雄	同	齋藤德太郎	同	高野和伊知
同	齋藤貞雄	同	菅谷愛	同	小川なほ
同	鈴木きよ	一年十ヶ月	石橋規矩	同	高橋重二
同	上原勝太郎	同	諸岡俊一	同	藤崎敬司
同	鶴田美治	同	卜村愛	同	栗崎實
同	豐田れん	一年七ヶ月	增村富壽	四ヶ月	青木敬夫
同	鶴岡とく	一ヶ年	猪狩ミヤ	三ヶ月	今村まつ

明治四十一年度二十七人　男一二　女一五

三年十ヶ月	宇井翠	二ヶ年	小島ふく	一ヶ年	鈴木達衛
同	鶴田きん	同	青野ちか	同	篠原愛
同	瀧澤千代	同	鳥居俊一	同	大堀郁太郎
同	瀧澤喜久	同	小倉米	同	三橋つね
三ヶ年	淺井いし	同	八木やす	同	沼崎とく
同	山内泰子	同	鈴木好司	同	若生源次郎
同	高川種子	同	若葉巳代次	同	椄田嘉明
同	關川郁	同	古矢喜一郎	同	秋山しま
二年十一ヶ月	加藤武夫	二年十一ヶ月	森谷幹雄	五ヶ月	木内芳雄

明治四十二年度三十九人　男二〇　女一九

三年十ヶ月	石橋うの	二ヶ年	渡邊秀雄	一年三ヶ月	堺健治
三年七ヶ月	石川秀雄	同	高野照典	一年一ヶ月	松倉てる
三年四ヶ月	關川雅司	同	石原とら	一ヶ年	露崎勉
三ヶ年	山内貞子	同	黑川かね	同	島村治助
同	小石川重雄	同	諸岡ひて	同	櫻井泰治
同	諸岡一次	同	寺内敬一郎	同	香取とみ
同	柳ミツ	同	小倉こう	同	紺屋きぬ
二年十一ヶ月	大木安太郎	同	鳥居三郎	同	宇井幾久子
二年十ヶ月	古矢芳子	同	諸岡薫	同	宇井博
二年九ヶ月	山田愛子	一年七ヶ月	大木俊雄	同	茂手木たま
二年二ヶ月	大野光治	一年六ヶ月	沼崎あさ	同	加藤孝太郎
二ヶ年	竹田正吉	同	松下ミツ	同	久保田やゑ
同	藤倉能男	一年三ヶ月	山田エイ	七ヶ月	椿ゆき

明治四十三年度三十七人　男一七　女二〇

四ヶ年	淺井儀一	三ヶ年	林加代	三ヶ年	紺谷勝雄
三年十ヶ月	石川ふく	同	河合ヨシ	同	松田さだ
同	中趣加津子	同	平山諦	同	三橋雅子
同	關川安正	同	木村五郎	二年十ヶ月	若葉さよ
同	大矢光子	同	大島仁	二ヶ年	京須善太郎
同	小野寺千枝子	同	中山方	同	小林博

二ケ年	増淵　才	一年十ヶ月	柏川せい　一ケ年
同	竹村猛壽	一年七ヶ月	柳本美惠　同
同	鈴木はな	同	野々部甲　同
同	葛生きち	一年三ヶ月	志村かつら　同
同	赤尾とし	一ケ年	山崎平治郎　同
一年十一ヶ月	鶴岡なか	同	木内正夫
一年十ヶ月	榎田章	同	藤崎貢太郎

明治四十四年度四十人　男二三　女一七

四ケ年	加藤文一	二年七ヶ月	早川くに　一年七ヶ月　大竹宵
同	竹井まさ	同	大友强哉　一ケ年　大川益雄
三ケ年	豐田眞一郎	同	關川慶造　同　石橋喜代
同	鈴木とし	二年三ヶ月	飯倉ひさ　同　鳥居たか
同	長谷川浩一	二ケ年	出口きい　同　加藤義明
同	小泉國衛	同	荒木みさを　同　横田昭
同	大塚謹三	同	青木美雄　同　島村いし
同	三橋鑒物	同	三橋孝子　同　岩館三郎
同	黑川廣	同	豐田保　同　森谷しづ
同	清水ふさ	同	瀧澤七郎　同　石井午太郎
二年十ヶ月	大木茂	同	櫻井みつ　同　石橋泰三
同	高川興子	同	廣川きみ　十一ヶ月　大野勝司
二年九ヶ月	古矢芳江	同	豐田文雄
同	貞松壽子	一年十一ヶ月	平山保

大正元年度三十八人　男一九　女一九

四ケ年	山内康夫	三年十一ヶ月	伊佐治喜美子　二ケ年　小島たか
同	林七郎	二年九ヶ月	小島友藏　同　渡邊政雄
同	神田若治	二年七ヶ月	增田溫子　同　宇井敏子
同	文屋一	同	平山まさ　同　寺内多喜子
同	三橋新	二年六ヶ月	大木君子　同　小倉とよ
同	吉岡清	二年二ヶ月	京須忠雄　同　古川泉
同	松田ふく	二ケ年	宇井壽男　同　紺谷滿枝
同	石橋なか	同	小野寺シケ　同　諸岡その
同	平山はつ	同	小野寺俊郎　一年三ヶ月
同	石原とり	同	京須すみ　一ケ年　水野岩雄
同	石原市尾	同	呼戸盛三　十一ヶ月　露崎雪子
同	柳本應	同	貞松具德　同　根本花
同	高石寅吉	同	豐田てる

大正二年度五十五人　男二九　女二六

三年二ヶ月	小泉繁子	三ケ年	吉田美津乃　三ケ年　渡邊道治
三ケ年	石川たけ	同	佐久間みつ　同　長谷川清
同	石川仁一郎	同	武士田讓　同　山田文太郎
同	關川昭	同	宮田たい　同　高川俊夫
同	夏海新	同	淺井隆　同　諸岡貞子
同	關川安世	同	淺井銳次　同　藤倉しげ

三ケ年	諸岡ます	二年三ヶ月	大野豐吉　二ケ年　椿せい
同	高安愛之助	同	石橋重雄　同　神戸剛
同	瀧澤喜代	同	山内總江　同　諏訪原貞夫
同	鈴木喜美子	二年三ヶ月	田中勇　同　豐田喜美
同	諸岡薫	同	關川正司　同　福田茂重郎
同	高須賀富美	二ケ年	石井さと　一年七ヶ月　松本はな
同	山崎勳	同	高橋恒三　同　高安美哉子
同	小倉美枝	同	木内淡　一ケ年　山田よし
同	山田照子	同	豐田登代　同　寺内一郎
二年十ヶ月	藤崎茨	同	增淵衛　同　酒井ツネ
同	高石藤作	同	久保田潔　同　棟原テイ
二年七ヶ月	大友廣高	同	鶴田明
同	京須やす	二ケ年	長竹定子

大正三年度二十九人　男一三　女一六

四ケ年	京須八重	三ケ年	吉田茂　三ケ年　松野正之助
同	林メ子	同	廣瀨鐵夫　三年十一ヶ月　西内ゑー
三年七ヶ月	文屋壽	同	信田繁　二年七ヶ月　小野寺秀雄
三ケ年	鈴木とみ	同	小倉梅　同　長谷川のぶ
同	諸岡ます	同	大木常男　同　椿榮助
同	高橋秀子	同	伊佐治眞二　二ケ年　河合ふじ
同	三橋誠一	同	香取ゆね　同　越川素行
同	堺榮三郎	同	小倉治子　同　加藤仲次

大正四年度二十五人　男九　女一六

二ケ年	岩舘はる	二ケ年	大竹治　一年七ヶ月　佐野結實
同	京須てる	同	土原千代
三ケ年	加藤きん	三ケ年	稻垣惠　二年三ヶ月　木下ケイ
同	寺内賢治	三年十一ヶ月	澁尻芳郎　二ケ年　寺内てる子
同	淺井とし	同	小野寺アイ　同　菅澤治夫
同	瀧澤利一	同	鶴田孝　同　石橋たみ
同	夏海いま	二年七ヶ月	文屋喜美　同　山田はる
同	棟原毓雄	同	關川邦雄　同　廣川くす
同	諸岡琴子	二年七ヶ月	森口久　一年十一ヶ月　佐竹田鶴子
同	藤倉さだ	同	堀内鶴夫
同	若葉孝四郎	二年六ヶ月	小田垣君子

大正五年度三十五人　男一五　女二〇

三ケ年	堺けい	三ケ年	鈴木恒夫　三年十一ヶ月　瀧澤山子
同	小倉格	同	武士田萬壽子　二年十ヶ月　古矢春子
同	吉田壽	三年十ヶ月	鈴木慶三　二年六ヶ月　京須清三郎
同	大德愛子	同	大橋廣雄　二年四ヶ月　加藤實
同	大野政治	同	渡邊つる　二年三ヶ月　小倉信亮
同	根本玉壽	同	大橋あい　二年二ヶ月　高橋よね
同	諸岡新一	同	高石きよ　同　豐田喜美
同	早川類	同	宮田節　二ケ年　山田恒

二ケ年	藤倉のぶ	二ケ年	加藤まつ
同	水野愛子 同	二年十ヶ月	田島中
同	伊佐治照子 同	一ケ年	鬼澤いち
同	長竹勅子 同	一ケ年	大木安治
二ケ年	井口壽		
二年十ヶ月	石塚賢太郎		
一ケ年	松井瑩		

大正六年度四十人　男二二　女一八

三ケ年	鈴木志津	三ケ年	瀧澤昇
同	大木憲一 同	二ケ年	古矢勝正
同	成田ふみ 二年十ヶ月		竹内まつ 同
同	神戸光子 同		石川文枝
同	大島卓 二年八ヶ月		京須瑞雄 同
同	山本雅子 二年七ヶ月		田中節
同	椿文雄 同		石川まく 同
同	鬼澤幸治 二年四ヶ月		松田清源 同
同	大木俊子 同		大友俊 一年十ヶ月
同	根本誠 二ケ年		佐久間ふみ 同
同	諸岡幸 同		木内喜久雄
同	藤崎健吾 同		宇井春雄
同	關川順道 同		高橋正雄 同
同	諸岡胖 同		吉田松年
			平野俊子 一年六ヶ月
			山田保 一年一ヶ月
			諸岡武
			諸岡英夫
			武士田美都子
			諸岡綾
			一ケ年
			伊藤英夫
			西村庸夫
			坂本なる

大正七年度四十一人　男二一　女二〇

三年七ヶ月	三橋壽子	三年七ヶ月	石橋正俊
三ケ年	小倉勇二	二年	鈴木武
同	京須しげ 同	二年十ヶ月	稲垣シゲ 同
同	黒川善子 同	同	小川あい 同
二年四ヶ月	成田敬二 同	二ケ年	内田柾子 同
二ケ年	神崎純一	二ケ年	瀧澤ひさ
同	大徳正雄 同	同	小林武
同	諸岡貞子 同	同	小野つる
同	山田まさ 同	同	藤倉章
同	小林さだ 同	同	豐田壽美
同	沼尾和江 一年十ヶ月	同	原昂
同	菅澤富美子	一年八ヶ月	芦田ハル

大正九年度三十七人　男二一　女一六

三ケ年	潮田修一	三ケ年	早川榮男
同	秋山正夫 三年十一ヶ月	二年	關川春江
同	吉田まさ 同		福島義
同	諸岡新 二年十ヶ月		橋本靜子
同	三池豐 二年九ヶ月		武士田昇
同	久保田節二 同		諏訪原正治
同	平野正雄 二年八ヶ月		大橋とみ
同	青木勝 二年七ヶ月		小倉八郎
同	木内文江 同		河合完治
同	大川登志 二年五ヶ月		木川まさ
同	渡井きし 二年四ヶ月		佐久間正子
同	伊佐治勝 二年		高津かな
同	京須靜江 同		

二ケ年	坂本くら	二年七ヶ月	諸岡みつ 同
同	高木眞一 同		渡邊三男 同
同	渡邊正 同		田中靖悟 同
同	渡邊利子	二年五ヶ月	木曾智惠
同	石橋はつ 二ケ年		篠原茂 同
同	新橋千代 同		小野幸 同
同	木下てる 同		三橋貞子 同
同	平野大子 同		山田豐
同	黒川家壽 同		今井正治 一年七ヶ月
同	京須壽雄 同		藤崎菊枝
三年十二ヶ月	加藤俊子 同		伊佐治忠雄
二年十ヶ月	瀧口清 同		高野正二 一年一ヶ月
同	石原廣 二ケ年		高川春野
			一ケ年
			小倉あや
			加藤春雄
			稲垣昌則
			佐藤寅吉
			古川正子
			木村豐太郎
			木村秀雄
			鈴木政信

大正八年度四十五人　男二一　女二四

三ケ年	山田はる	三ケ年	小泉豐
同	淺井文哉 同	三ケ年	佐久間やす
同	岩瀨トシ 同		石原繁三
同	藤倉靜男 同		長谷川明慶
同	瀧澤清 同		木内みね
同	小倉富太郎 同		石橋武四郎
同	南村秀雄 同		小野寺キン
同	石川とみ 同		天木誠治
同	早川滿治 同		山田文太郎
同	伊藤久子 同		萩原貢 同
同	日暮靜 同		木内よね 同

四年	原敬子 二年		磯崎安治
同	渡邊佐喜子 同		神崎讓二
同	長谷川みつ 同		瀧澤新介
三年	川口源次郎 同		田中節子
同	柏原義雄 同		田所武於
同	齋木歌子 一年七ヶ月		島田家起
同	富井恒雄 同		信田のふ
同	石川壽 同		渡邊三千歳
同	田代雅章 同		三橋博
同	諸岡のぶ 同		新橋康子
同	佐久間榮一 同		川村松枝
同	渡邊清 同		岩瀨利一
同	加藤弘 同		山野その
同	石渡松江 同		渡邊ヒサ

大正十年度四十二人　男二三　女一九

		三年	谷ケ崎滿
		一年七ヶ月	藤崎ゑい 同
			木内ひさ 同
			秋葉勝子 同
			大川コト 同
			木内武之助 同
			諸岡榮 同
			佐久間榮一 同
			鈴木一 同
			伊藤市郎 同
			木下茂一 年
			關谷俊雄 同
			藤倉ひさ 同
			坂本とし 同
			白石猛夫 同
			諸岡勝夫 同

◎私立成田幼稚園規則

第一條　本園ハ滿三歲ヨリ學齡マデノ幼兒ヲ敢容保育スルヲ以テ目的トス

第二條　本園保育課目ヲ分ツコト左ノ如シ

一遊戲　幼兒各自ニ運動セシメ又ハ歌曲ニ合ヘル諸種ノ運動等ヲサシメ心情ヲ快活ニシテ身體ヲ健全ナラシムルコトヲ期ス

一唱歌　平易ナル歌曲ヲ唱ハシメ聽器發音器及呼吸器ヲ練習シテ其發音ヲ助ケ心情ヲ快活純美ナラシメ兼テ德性ノ涵養ニ資センコトヲ期ス

一談話　有益ニシテ興味アル事實及寓言通常ノ天然物及加工品等ニ就キテ之ヲ爲シ德性ヲ涵養シ觀察注意ノ力ヲ養ヒ兼テ發音ヲ正シクシ言語ヲ練習セシムルコトヲ期ス

一手枝　恩物ヲ用ヒテ手及眼ヲ練習シ心意ノ發育ニ資スルコトヲ期ス

第三條　保育時間ハ一日五時間以內トス

第四條　本園敢容幼兒ノ定員ハ百廿人トシ之ヲ三組ニ編成ス

第五條　休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ

一祝日　大祭日及日曜日

一春期休業　自三月二十六日至三月三十一日

一紀念日　六月一日

一皇后陛下御誕辰日

一夏季休業　自八月二十一日至九月五日

一冬季休業　自十二月二十五日至一月七日

第六條　入園ハ四月九月ノ兩度トス

第七條　入園ヲ請フ者ハ本園規定ノ書式ニ依リ其旨申出デ許可ヲ受クベシ（書式ハ本園ヨリ交付スベシ）

第八條　退園ハ其理由ヲ具シ保護者ヨリ申出ヅベシ

第九條　一年以上在園ノ幼兒退園ニ際シテハ特ニ保育證書ヲ授與ス

但一ケ年以內ト雖モ保護者ノ希望ニヨリテ詮議ノ上授與スルコトアルベシ

第十條　幼兒若シクハ其保護者ニ於テ轉居シタル時ハ直ニ屆出ヅベシ

第十一條　幼兒ノ缺席ハ其都度必ズ屆出ヅベシ

第十二條　保育料ハ本園ノ休業全月ニ亘リタルトキノ外幼兒一人ニ付一ケ月金五十錢トシ幼兒出席ノ有無ニ拘ハラズ毎月五日迄ニ保護者ヨリ納付スベシ

但一家族ニテ在園幼兒二名以上ナルトキハ一名ヲ本文ノ通リトシ其他ハ總テ半減スルモノトス

入園證書

何　ノ　誰

右ハ今般貴園ニ入園御許可相成候ニ付テハ本人ニ關スル一切ノ事件拙者引受可申候也

右幼兒保護者

千葉縣印旛郡成田町大字何番地

何　ノ　誰

大正　年　月　日

私立成田幼稚園長　石川照勤殿

經歷書

幼兒　何　ノ　誰

一生　年　月　日　大正何年何月何日生

一原籍及族籍　何縣何郡何町村大字何番地華士族平民

一出生地　何縣何郡何町村大字何番地

一現住地　千葉縣印旛郡成田町大字何番地

一家長職業及氏名　何々業又ハ何々商何誰

一家長ト幼兒トノ關係　幼兒ノ何々（例ヘバ祖父、父）

一生父母ノ年齡及其健否　父何歲健母何歲健

一兄弟姉妹及其健否　兄何人弟何人姉何人妹何人皆健

一養育セラレシ場所及營養品　自宅ニテ生母ノ乳ノ如キ又ハ里子、牛乳、乳母ノ乳

一痘　種痘又ハ天然痘

一生來重キ疾病ニ罹リシコトノ有無

一性質習慣ノ著シキモノ

一其他特別ノ事故

右ノ通リニ候也

大正　年　月　日　　右幼兒保護者　何　ノ　誰

私立成田幼稚園御中

◎私立成田幼稚園幼兒保護者心得

一家庭と幼稚園との連絡に關する事

幼兒の保育に關しては幼稚園と家庭と相待ちて協力するにあらざれば效果を得ること能はざるは云ふまでもなき事なるべしされば家庭と幼稚園とは常に氣脈を通じ內外相應じて保育の效を全くせざるべからず今彼此の連絡に關して當園の冀望する所を擧げんに概ね左の如し

一家庭より當園の事に付疑義あるか或は幼兒の事に關して擔任保姆に問合せ又は協議せられたき事あらば何事にても遠慮なく口頭又は書面にて申出でられたし

二父母兄姉亟に直接に幼兒の保育に關係ある人は時々來園して當園の實況を視察し之を家庭の保育に參考せられんと當園の最も冀望する所也又毎年春秋二回特に保育懇話會を開き保護者諸君の來會を請ふを例とせり是一は實地保育の模樣を諸君に示し又一は諸君より家庭の狀況を聞き幼兒の保育に關し相互に懇話せんが爲なり日時は其都度通知すべければ成るべく來會ありたし

一幼兒付添人に關する事

當園に於ては幼兒付添人を要せず

但往復途中の送迎は隨意たるべし

一幼兒の遊戲に關する事

遊戲は實に幼兒の仕事にして心身の發達一に之によるものなれば最も自由快活に之を爲さしむること必要なれども野鄙亂暴に涉るものは之を制せざるべからざるは勿論玩具等に付きても亦能く其良否を甄別せられたし又幼兒の記憶に任せ讀書等を授けらるゝ向もまゝあるよしなれども是等は幼兒の發育に害あるも益なかるべければ注意せられたし

一幼兒服裝に關する事

幼兒の服裝は成るべく質素にして遊戯運動等に便利なる者を用ひ從つて地質は綿布麻布の類とし仕立方を筒袖とせられたし

一幼兒の携帶品に關する事

幼兒在園中用ふべき器具等は總て當園にて貸與すべきが故に手拭鼻紙等必要なる物品の外は幼兒に携帶せしめざる樣致したし

帽子辨當傘等の携帶品には一々氏名を記し置かれたし

一幼兒の往復に關する事

幼兒の往復は充分に保護せらるべきは勿論なれども風雨其他疾病遠路特別の事情ある時の外は成るべく徒步せしめられたし

一幼兒の缺席並に家庭の疾病等に關する事

幼兒の缺席一週を超ゆるときは口頭或は書面にて詳に其事由を屆出でらるべし凡て多人數の集る所は充分注意を爲すにあらざれば或は惡疫傳染の媒をなす恐あるを以て幼兒の家族に傳染病者ある時は直に其病名を記して屆出でらるべし

但玆に傳染病と稱するは痘瘡及假痘、猩紅熱、腸窒扶斯、發疹窒扶斯、虎刺列、赤痢、ジフテリア、ペスト等を云ふ

一保護者の異動に關する事

保護者の變更は勿論其轉任改氏名等異動ありたるときは直に屆出でらるべし

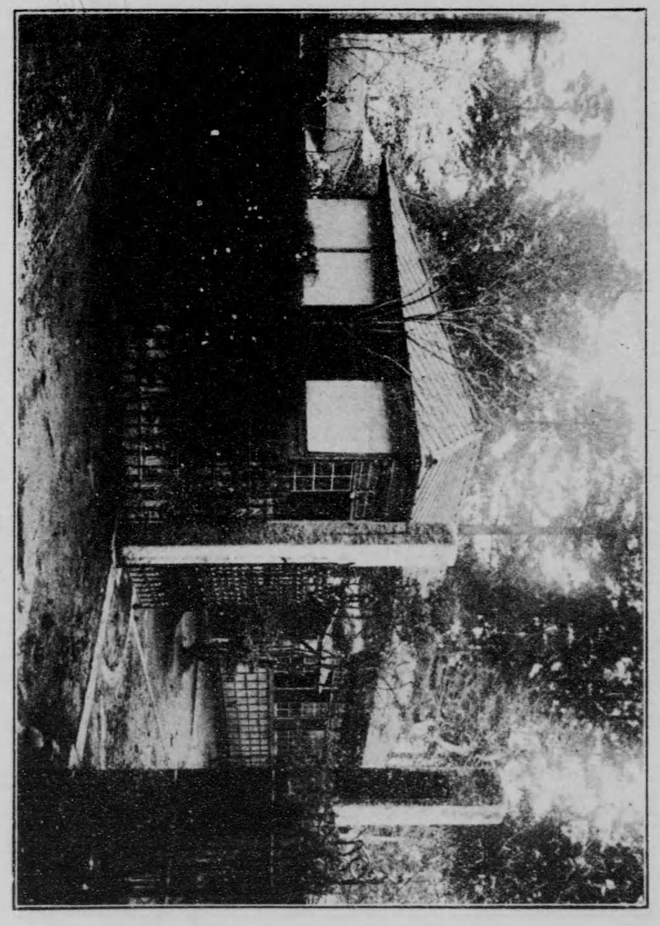
成田山感化院一覽

今日一日の務……
平面圖……六三
沿革要項……六四
位置……六四
建物……六五
職員……六五
關係事項……六六
生活……六六
經費……七一
成績……七一
退院……七三
入院……七四
基本金の蓄積……七六

今日一日の務

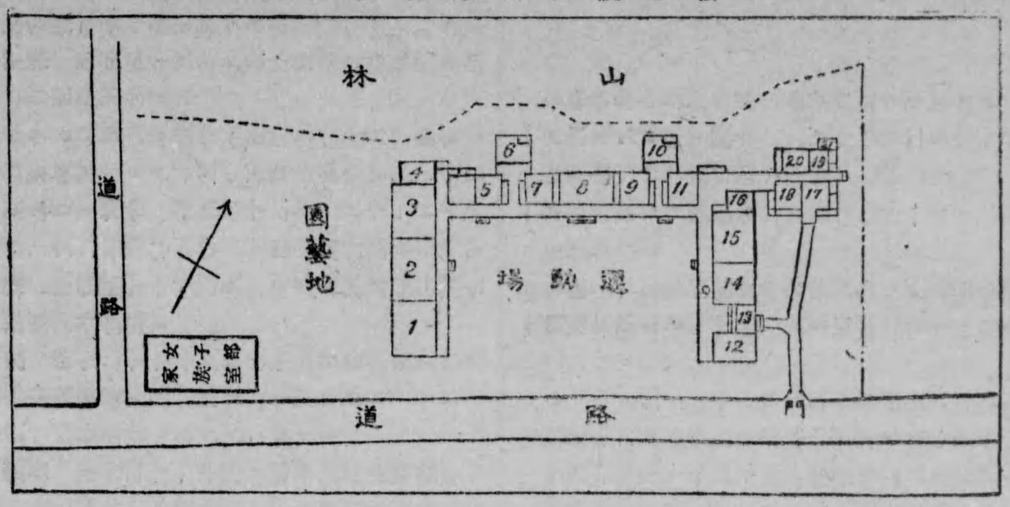
一、今日一日一心に不動尊を信仰する事
二、今日一日父母教師の教を守り能く命に從ふ事
三、今日一日心から親切の人となり又動物を愛する事
四、今日一日能く自制克己し我儘なことや惡いと思ふことをせぬ事
五、今日一日常に正直を旨とし決して虚僞を言はぬ事
六、今日一日能く勉學し能く仕事を働く事
七、今日一日禮儀を守り無作法の言行をせぬ事
八、今日一日人よりうけたる恩を忘れぬ事
九、今日一日腹を立てぬ事
十、今日一日仕事に倦きない事
十一、今日一日總てに對し清潔整頓を心掛くる事
十二、今日一日物を大切に取扱ふ事
十三、今日一日人の惡口を言はぬ事
十四、今日一日不平なく愉快に日を暮す事
十五、今日一日出來る丈多く善行を積む事

右十五ヶ條毎朝稱讀し必ず實行せらるべし



院化感山田成

私立成田山感化院全圖



面積千百二十五坪	1 講堂	2 圖書室	3 教室	4 教師室	5 生徒室	6 教師室	7 生徒室	8 手工場	9 生徒室	10 保姆室	11 生徒室	12 事務室	13 昇降口	14 食堂	15 炊事場	16 洗面場	17 主任室	18 同家族室	19 病室	20 新入生徒室	21 物置	總建坪二百坪

私立成田山感化院一覽　　六四

私立成田山感化院一覽

◎沿革要項

一創立　明治十九年十一月廿八日千葉感化院と稱し千葉縣下各宗寺院共同事業として千葉町に創設せらる

一組織の變更　明治二十一年四月以降成田山新勝寺一手に本院を經營維持することに變更す

一舊千葉感化院建築竣工　明治二十四年五月三十日

一院長更迭　明治二十七年五月二十七日舊院長三池照鳳師辭職現院長就職す

一移轉改稱　明治四十一年三月二十五日現在地に院舍を新築して之に移轉し同時に成田山感化院と改稱す

一內務大臣より下附金　明治四十二年二月十一日本院事業上從來功績ありとし且つ奬勵の趣旨を以て金百圓を下附せられ更に大正十一年二月十一日同趣旨を以て金二百圓下附せらる

一御謄本下附　明治四十三年九月七日教育勅語謄本並に戊申詔書謄本各一通下附せらる

一皇族御來院　明治四十四年十月十七日山階宮芳麿王殿下　久邇宮朝融王殿下　華頂宮博忠王殿下　久邇宮邦久王殿下　山階宮藤麿王殿下本院へ御成り被遊尙同月二十二日更に　山階宮妃殿下には御姫宮安子女王殿下を御伴はらせられ本院へ御成り遊され生徒一同へ御菓子料御下賜の光榮を蒙れり本院よりは生徒製作に係る竹籠の內に三里塚名產の初茸を入れたるものを献上したるに直に御嘉納遊さるゝ旨恩命に浴したり

一內務大臣より下附品　大正四年二月十一日本院事業奬勵として市岡紫雲作靑銅製松上鶴模樣の花瓶一對下附せらる

一本縣知事より奬勵金　大正十一年一月十三日本院事業奬勵として金百圓を下附せらる

一宮內省より御下賜金　大正十一年二月十一日本院事業御奬勵の思召を以て金參百圓を下賜せらる

◎位　置

千葉縣下總國印旛郡成田町成田四百二番地の一にして成田山境內に在り前面成田町橫町より新勝寺へ往復する道路に沿ひ成田停車場よりは約六町成田山不動尊よりは山上奧の院大日如來の伽藍を右に見左方へ約一丁にして來るを得東隣出世稻荷への參詣者は左方に古木鬱蒼幽靜の間に白堊の一家屋を見るべし、本院卽是れなり

◎建　物

明治四十一年三月二十五日の竣工に係り敷地建坪並に建築費用左の如し

一本院敷地面積　一千百二十五坪

一建　坪　二百　坪

一建築費　一萬八十二圓九錢九厘

但し別に女子部家族室を有するも此中に算入せず敷地建物明細圖は別頁に揭ぐ

◎職　員

成田山新勝寺住職

一院主兼勤長　六等　石川照勤

一主任兼教師　東洋大學文學士　大友惟誠

一兼教師正　八位

一會計主任　久保田萬吉

一唱歌教師兼保姆　大友らく

一保姆見習　在原妙子

一篤志院醫　關川博道

右職員の外本院評議員左の如し

一太田茂

職員中院內常住のもの左の如し

一主任兼教師　大友惟誠

一唱歌教師兼保姆　大友らく

一保姆見習　在原妙子

職員一同は院長の指導監督を受くるは勿論能く院長の精神と感化院職員たるの自覺とにより職務に從ふの外現在としては別に職員に對する成文の制令なし唯協同一致して圓滿に且つ規律ある家庭を作るを目的とし而かも此範圍に於て自由に活動を許し妄りに牽制を加へざる組織なり

院醫關川博道氏は本院の當地に移轉以來引續き篤志を以て其職に在り常に院生の保健に留意せられ殊に疾病治療に際しては熱心之に當らるゝが故に院生の健康狀態常に良好稀に疾病あるも後害を遺せし者なきは本院の最も欣幸とする所にして深く同氏の厚情に謝意を表し居る所以なり

◎大正十年度關係事項概要

一院生入退院の狀況　繰越院生　七名　入院生　六名　退院生　四名　現在生　九名

一院生の健康狀態　ワイル氏病　一名（醫療一ヶ月半）　百日咳　一名（同十六日間注射數本）　足負傷　一名（同十二日間）感冒　一名（同二日間）脊骨の痛　一名（同一日間）皮膚病　一名（藥湯へ十日間）凍傷　一名（同一ヶ月間）

一院生の無斷外出　二名（八月二十三日　二月五日）　間もなく歸院

一修學旅行及遠足　千葉市海岸へ（五月九日）佐倉町（展覽會招魂祭軍旗祭見物）（十二月十七日）　其他宗吾印旛沼三里塚及附近山野への遠足は大抵毎月一二回

一職員出張　一大阪市に於て開催せられたる第六回全國社會事業者大會へ院長代理として大友主任出席其序を以て京都大阪兵庫愛知三重の五感化院を視察す（十一月一日より同月十日まで）　一千葉縣廳へ大友主任二回出頭（一月三十日　二月十一日）

一御下賜金及奬勵金の拜受　前掲（沿革要項中）の通り

一雜　一、庭球及捕球器具を備付（六月四日）　一、蓄音器購入（十一月十一日）　一、歸省許可　初ての試として成績良好なる者二名に年始として一泊及二泊の歸省を許したり　一、東京平和博覽會へ出品　本院一覽表附該說明書及本院寫眞を出陳す　一、自治錄を始む　日々の出來事講話の大要等を生徒側に於て記入せしめ時々職員之を檢閲す　以上

◎院內生活

本院の生活は普通一般に於ける溫き家庭生活と毫も異る所なし尤も普通教育と異り或る一定の時間を限り教育するにあらずして普通教育の時間以外家庭教育として兒童一般の躾をなすを以て本院感化方法の最も緊要とする所なると共に先づ生徒自身に信仰の觀念を生ぜしめ其習慣を與ふるを以て實に本院生活の精神と爲すが故に此根本の精神に基き總ての施設及全體の方法を實現し居れり其生徒待遇の方法に至りては慈悲仁愛の情を以て之に對するは勿論一面には亦整然たる規律生活をなさしめ亂雜放肆に流れざる樣最も注意せり然れ共本院家庭內の大小悉く豫て定めたる成文によつて行動せしめ監督すると云ふが如き方法にあらず常に便宜を主とし溫き家風自然の慣例等により之を敎練し力めて愉快なる生活をなさしむるを以て主眼とせり約言すれば本院の生活は信仰ある規律正しき家庭生活といふを得べし

日課及其說明を擧ぐれば左の如し

午前五時　起床二十分間の自疆術を終りて直に掃除
午前七時　朝食
午前八時　朝拜式
一、皇室の萬歲を奉祝す　二、大廟遙拜　三、成田山不動尊禮拜　四、各自先祖敬拜
自午前九時至正午　學科
正午　晝食
自午後一時至四時　實科
午後五時　夕食
自午後六時至同七時三十分　自習
自午後七時三十分至同八時　自疆術
午後八時　就蓐
以上の如く定むると雖も時季により時々變更するは勿論便宜上臨時變改することあり

起床　朝起は新勝寺の曉鐘に警醒せられ蹶起せざるを得ざる習慣を作れり但本院のみならず成田町一般に此良習を存するが如し

自疆術　自疆術なる一種の體操は健康增進上甚良好なるを聞き職員先之が實地研究を試むる事數月然後大正九年十二月一日より從來の徒手體操に更へ一同朝夕二回之を行ふ事として今日に及べり確に效果を認む

清潔　清潔は本院の最も努むる所也毎朝掃除の外日に數回之をなし時々大掃除及各生の清潔整頓を檢査す

冷水摩擦　冷水摩擦は毎朝洗面の時職員生徒一緒に之を行ふ水浴は自由に任せ置けり

食事　常に兒童の營養狀態に留意し滋養に富める物を選み居るを以て敢て中流家庭に劣る事なし而して職員（其家族も）生徒皆一堂に集りて食を共にす單に食事のみならず本院の生活は總てに於て「**共に**」といふ事に最も留意し學ぶも遊ぶも働くも常に職員生徒其行動を共にし美しき圓滿なる家庭を作る事に努力し居れり

衣類　普通の衣類を用ゆ曾ては制服ありしも今は之を定めず但毎朝禮拜の時及授業の際は袴を着用せしむ

朝拜式　毎朝講堂に於て之を行ひ兒童に敬虔の心を養成せんが爲め職員先特に敬虔的の態度を持し最も嚴

肅を旨として之を行ふ

本院修身教育の大本として教育勅語並に戊申詔書の聖旨を奉戴する事勿論にして之が實踐躬行の實を擧ぐるは宜しく信仰の力に依りて之を喚起せざる可らざるを信ず本院の特色として成田山不動尊を信仰せしむる所以卽是なり

訓話　一般に對する訓話は毎朝先祖敬拜の際及就蓐前不動尊禮拜の時之をなせ共平易簡單にし之が爲め多くの時間を費さず何となれば入院し來る兒童の多くは講話訓戒には既に慣れ居るのみならず職員は生徒と起臥を同うし行住坐臥の間之が師たり父兄たるの心を持し實踐躬行所謂行を以て訓ふるを旨とすればなりされど個人に對しては機會を捕ひ之に投じて其兒童に適切に徹底的に訓話をなす

學科　概ね小學令に據る教科目により午前中三時間乃至四時間(但雨天又は冬期は午後に及ぶ事あり)の授業をなす但特に重きを讀方書方綴方算術珠算等の實用學科に置けり尋常科を卒業せし後猶ほ向上の見込ある兒童にして且品行最早差支なしと認めらるゝ時は中學へ通學せしむる事あり然らざる者には院内に於て高等科及補習科教育を授く又特に進步の見込あるものには午前の學科とは別に夜間特殊の學科を授く例へば其兒童の將來に於ける職業を見込み農業入門商業道德を教ゆる等是なり

實科　農業を主とし外に簡易なる手工(竹細工及運針)を課す但冬期は手工のみなり耕地は目下三段步を有し追々擴張の見込なり院内に於る實科に對しては生產的職業的技能を與へ實社會に出でゝ直に夫に依て自活し得るものを選ばざる可らずと論ずる者あり本院固より考量したる事なるも三四の業務を設備したりとて到底全生徒の個性嗜好に悉く適合せしむる事至難にして强て職業を狹き範圍に押込むる嫌あり殊に感化院に適する授業師たる人物を得る事困難にして施設繁多なる割合に好果を收められざる遺憾あり依て本院は教育終局の目的を主眼とし身體の鍛錬精神の訓練特に勤勞性の養成を目的とし單に農業手工の二課を設くるのみ

娛樂　兒童の性情を圓滿に發達せしめ愉快の中に教化の目的を遂げんとし娛樂には相當の意を用ふ

一、庭球及捕球　娛樂に供する外體力の養成にも資せんと之等を設けたるに一同は喜びて之を遊び晴天の日は殆んど其遊び時間を之に費し居れり

一、蓄音機　祝祭日及日曜日の夜間又は談話會其他の會の際に之をなさしむ

一、生徒圖書室　此所に有益なるお伽噺雜誌(目下實業の日本、日本少年及談海)寫眞、繪畫等を置き兒童の閲覽に供す新聞紙は閲讀を禁せり

一、自由園藝　一定の土地花壇を貸與し蔬菜草花の栽培箱庭作り等自由に園藝の樂を味はしむ

一、散步、遠足及旅行　日曜日の午後不動尊に參拜をなさしめ同時に散步せしむ又附近神社佛閣の參拜水泳船遊魚釣蕨狩茸狩栗拾或は單なる山遊び等にて數々山野を跋涉し郊外に遠足し娛樂に兼て體力の養成に資せしむ或は臨時に汽車に乘りて一日の修學旅行をなす

一、三大節及本院紀念日　當日は祝賀式後種々なる餘興(琵琶浪花節福引の外各生自身の餘興)をなして一日を祝はしむるを以て兒童は頗る樂となし居れり

一、活動寫眞　活動寫眞は兒童の最も嗜好する所にして之に依て感化したる兒童も亦少からざれ共之が觀覽を嚴禁する時は却て面白からざる結果を來たすの虞あるのみならず又内容宜しく其觀覽適度なるに於ては教育上好影響を與ふる事多きを以て本院は内容に注意し大抵生徒の此希望を滿足せしむ

一、角力　院内に土俵を設け夏期は殊に盛にとらしむ尙每年九月に於て成田素人大角力あり生徒も出場せしむるを常とす

一、運動會　院内に於ては之をなさざるも當町小學校中學校等の運動會は必ず見物せしむ

一、誕生祝　院長を始め職員生徒の誕生日には其夜職員生徒一堂に團欒し茶話會を行ふ特に生徒の誕生日には該兒童に一日の休暇を與へ早朝先不動尊に參詣其立身出世を祈らしめ本院よりは祝意を表して本人の好める文具品を贈り又特に御馳走を供す

一、五月節句　講堂に幟を飾り柏餅にて茶話會を開く

一、義士祭　盛に之を行ふ

一、談話會　時々之を開く

一、孔雀鸚鵡を飼育す

右の外生徒自が時節により流行によりてなす遊戲例へば輪廻し獨樂歌留多双六陣取鬼事將棋五目(其他種々)等は大抵自由に任かし徒に拘束を加へざるみならず多くの場合職員も之に加はるを常とす

賞罰　總て普通の家庭生活と狀態を同うせしむる希望なるが故に賞罰の如きも固より格別の定なし毎年三月二十五日は本院の紀念日にして當日は多くの賞與を與ふるを例とするも平日は格別なる善行ある場合の外賞與を實行せず但賞與を行ふ場合と雖も式場に於て擧行するが如き事なし

生徒の席順は入院年月の順序又は年齡に依らず毎月一日より月末に至る一ヶ月間各生徒の操行成績を調査し右の結果により（日々の成績表自治錄に依るの外更に職員の意見を附加す）翌月一日席順を改むるの例にして此席順には最も重きを置けり

雜件　一、祭日　生徒中若し父母死したる者ある時は勿論最も近き先祖の命日に於て一日の休暇を與へ祖先に敬拜の意を表せしめ終日謹慎せしむ

一、稱號　生徒在院中は特殊の稱號を用ひ本名は嚴に之を秘して呼ばしめず例へば志道サン爲德サン好學サンと名稱するが如し生徒よりしては院長は御前樣主任は先生主任妻女は奧サン他の職員は誰だれ先生と其姓を頭にして先生と呼べり生徒に稱號を用ゐるは其依賴者に於て自己の住所氏名及其子供の氏名とは公然世上に發表せらるゝを好まざるの希望あるを知ると共に本院としては生徒入院の際に於て改めて新なる道德的の名稱を附するは本人の改善上一種の大いなる暗示の力あるものと認めたるに由れり

一、**間食**　最初日曜日及毎月一日のみ之を與ふるの定めなりしも特志の人々より時々菓子等を生徒に寄贈せらるゝことあり又院長手許より生徒を慰めんとて特に珍菓水菓子等送り來ること數々なるのみならず院教師へ他より贈られたる菓子等を總て生徒に分配するを以て實際に於ては間食の度數甚だ多き方にして是等の方法は總て一般家庭の兒童生活と異ることなし

一、**當番**　生徒中順番に當番並に便所掃除の勞務に就かしめ當番には雜務の外臺所の手傳をなさしむ

一、**催眠術**　感化教育上或者には其必要なるを認め時々之を應用せり無信仰の者遺傳性の者寢小便癖ある者の如き特に效果少からざるを認め居れり但年少の生徒に對しては單に一種の暗示法を行ひ居れり

一、**矯正祈禱**　特に頑强なる不良者に對して突然稀に行ふ矯正方法にして二週間乃至三週間毎朝未明に該生徒に職員同行共に裸足にて成田山本堂に參拜し佛前に額づきて瞑目し本人の爲めに惡を去り善に遷るべき樣一心に祈禱を捧げ本尊の救を願ふものなり

◎經費

本院には嚴密なる豫算なしと云ふ方事實に近し固より大體の豫算を定め置き右を標準として支出をなし嚴に濫費を防ぐは勿論なりと雖も實際は必要に重きを置き必要なる以上は實費を使用するに躊躇せず況んや錢厘に泥泥するが如きをや從て亦豫算内なりとして必要なき費途を無理に消費するが如きことなきは無論なり毎月定日本院經費の金額を新勝寺會計主幹より領收し之を支出するの慣例なるが會計上院長及主幹より未曾て一言の注意質問を受けたることなし全く深き信賴を與へて濫りに細小の監督を加ふるが如きはあらざるなり此結果は自然局に當る者に對し自制心を與へ求めずして總ての節約行はれ其效果は慥に豫算を限定する以上にありて更に頗る便利を極め居れり左に記載するは本院移轉後の決算なり

金千六百十圓九十錢	明治四十一年度
金千九百五十九圓四十八錢	明治四十二年度
金二千百八十五圓三錢九厘	明治四十三年度
金二千三百二十一圓八錢	明治四十四年度
金二千六百七十五圓六十七錢二厘	大正元年度
金二千三百四十五圓六十二錢九厘	大正二年度
金二千三百十二圓七十四錢	大正三年度
金二千八百三十一圓五十七錢	大正四年度
金二千七百八十六圓五十九錢二厘	大正五年度
金參千〇貳拾五圓八拾八錢壹厘	大正六年度
金貳千六百〇八圓參拾參錢八厘	大正七年度
金參千六百四十圓三十六錢五厘	大正八年度
金四千三百九拾圓拾參錢四厘	大正九年度
金參千九百參拾九圓壹錢四厘	大正十年度
合計參萬八千七百參拾貳圓四拾參錢四厘	

◎教育成績

明治十九年本院創業以來大正十一年三月末に至る入院生百三十六人

内

改善退院	九十四人	事故退院	二十四人
逃走	二人	成績未定	三人

不成績　四人　現在生　九人

備考　事故退院とある大部分は明治三十二年本院々長洋行不在中當時坪井前主任病死の爲め一時生徒を假退院せしめたる事あり
此退院生徒を指したるもののなり

自明治三十四年至大正十一年　二十一年間生徒狀況一覽
（大正十一年三月末日調）

一、成績

改善者	六九	不成績	四
成績未定	三	現在生	九
逃走	二	計	八七

二、入院時教育程度と年齢

程度＼年齢	九才	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	計
不就學	一	四	一	五	三	三	一	一	一八
尋一	二	二	一	一					六
尋二	二	二	一	一	二	三	一	一	三
尋三		三	一		三	三	一	一	二
尋四									一三

三、入院時保護者と年齢

保護者＼年齢	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	計
實父母	一	一	一	四	七	六	五	六	三一
實父		一		一	一	一			五
實母			一	一	一	五	一	三	一〇
繼父母				一	一	二		一	六
實父繼母		四	一	二	五	三	三	三	一九
養父母			二		一				三
祖母	二	二							四
其他ノ家族	二				一			二	五
保護者ナキ者		二		一			一		四
計	五	一〇	五	一二	一六	一五	一〇	一五	八七

尋五				一	六	一
尋六					一	二
高一						三
高二以上						一
計	五	一〇	五	一二	一七	一四

四、保護者の職業

農業	二〇	荷馬車業	二	下宿業	一
商業	一一	車夫	一	產婆	一
古物商	二	被傭人	三	教育家	一
諸職人	一一	山芋掘	二	漁夫	一
官公吏	九	墓守	一	無職業	一
會社員	六	妾	一	不詳	一
飲食業	三	相場師	一	計	八七

五、入院者の性癖

盜癖	三三	狡猾	三	詐欺	一一		
浮浪	一一	放火	三	多辯	一一		
怠惰	一〇	虛言	四	色情	一一		
粗暴	七	浪費	二	躁狂	一一		
我儘	三	反抗	二	計	一一		
執拗	三	器物破壞	二				

六　改善退院者現況

農業	一一	靴職	二	活動辯士	一		
家事に從ふ者	一一	電工	二	鐵板職	一		
菓子職	五	軍人	二	建具職	一		
商業	五	學生	一	電球職	一		
會社員	三	海員	一	運送業	一		
大工	三	製銅職	一	死亡	一		
被傭人	三	造船職	一	不詳	一		
印刷職工	二	染物職	一	計	六九		
		按摩	一				

七、改善退院者入院時の年齢と在院期間

年齢＼期間	九才	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	計
一年未滿		三	二	三	四	一	二	二	一〇
二年未滿		二	一		四	五	四	四	三
三年未滿		一	三		四	四	一	一	一一
四年未滿		一			一	一	二	一	七
五年未滿	一			二	一				四
五年以上				三					三
計	一	九	四	八	一四	一二	九	一二	六七

◎退院

生徒の改良を認め退院を許す迄には種々の階段を附せり第一不動尊を信仰する態度第二院外に使に出し時々金錢を携帶せしめ毫も不都合なきとき右半年以上乃至一年間同樣に持續するときを以て改良生と認め退院せしむ若し不良の原因其の家庭にあるときは可成直に家庭に歸さざるを以て適當とし父母の同意を得て本院より直に本人の性行に適する職業見習の家へ紹介し就業せしむることに定め居れり此場合に於ても其家庭及周圍に十分の注意を拂ひ撰澤をなすは勿論なり
本院の最も心勞するは實に此の退院後の成績效果なり

何となれば入院中如何に改善の成績を占め得たりと確信する生徒ありとするも退院後の境遇若しくは動機により動もすれば逆戻りをなし其效果を破壞せらるゝ恐あればなり故に本院に於ては退院後の成績效果に對し周到なる注意をなすと共に油斷なく左記の監督視察をなせり

第一本院職員の視察　第二本院と書面の往復

就中書面の往復は本院の勉めて勵行する所にして事體甚だ平凡なるも最も有力なる效果あり尙事情の許す限り退院者とは親戚樣の關係を持續し行く事に努力し居れり

◎生徒の入院

明治二十一年前本院の未だ成田山の經營に移らざる以前は專ら他の寄附金に因り本院事業を維持するの必要を有し此場合に於ては熱心に搜索勸誘の方法を採り多數の生徒を收容するの實勢を存し生徒の少數は其外觀を損し生徒の多少は維持上頗る大關係を爲したるものなり今日と雖も維持本位を主とするとせば亦如此き必要を生ずるや知る可らず然るに新勝寺の經營に歸したる以來漸次敎育本位に移り本院維持の如きは新勝寺の自營に屬し亦勉强して他の寄附金に依らざるを得ざる必要なきに至れるを以て自然維持上の關係より强て生徒の多數を集むるの要なく遂に今日の如く依賴人の要求のみに滿足し寧ろ少數の生徒に對し及ぶ丈け良好なる成績を擧ぐるの方針を採り靜かに且つ正直に斯道に盡しつゝあり

新に入院生ある時は先づ入院前の非行に對し懇篤訓誡を加へたる後本院生活の要項を知らしめ最早不動明王の惠により全く生れかわたりる人となり能く今日一日の務を守り善良に進むべきを諭し講堂不動尊前にて大體左の誓書をかゝしむ(個人によりて多少異る)

一、一心に不動尊を信仰し決して惡い事を致しません

一、入院前の不良行爲は深く悔悟致しました

一、きつと無斷外出致しません

然る後講堂に於て命名式を行ひ大約一週間新入生室に居らしめ其性行を實地に調査し然る上一定の居室を定むるを以て原則とするも猶其性行の如何を早く知り得たる場合は直に生徒室に入るゝことゝせり又各室配置

按排は新入生の年齡及其性癖に應する等種々工夫の下に居室を定め如此くして本院生活の人とならしむ尙入院の際は左記の書面を差出さしむ

（第一號）　入院依賴書

何府縣何市郡何町村大字何番地
族籍職業何某何男（弟或は…）
何　年　月　日　某

右者父兄親戚等の敎に背き敎育の途を失し候に付今般親戚會議の上（孤兒にして惡化の恐あるものに付）貴院の感化矯正を受度冗紙履歷書並に誓約書相添へ此段御依賴仕候也

何府縣何市郡何町村大字何番地
族籍職業（父母親戚若くは町村長）
年　月　日　依賴人　何　某　印
成田山感化院長石川照勤殿

（第二號）　履歷書

何府縣何市郡何町村大字何番地
族籍職業何某何男（弟或は…）
何　某

一　年　月　日生
二　祖父母存亡若し死亡したる時は其年月日病名
三　父母存亡並に年齡生計の程度「上、中、下」と單記すべし
（實父母或は養父或は養父母の別）若し死亡したる時は其年月日並に其病名
四　實父母は飲酒するや否や其概略の分量
五　如何にして生育せしや假令ば（父母死亡後祖母に養はる或は父母生存するも祖父大は本人を愛し云々或は何年何月本人何歲の時…何職某方徒弟に出し云々
六　學業履歷本人學業を好むや否
七　兄弟姉妹有無（內兄姉何人弟妹何人）
八　性質特質並に不良と認むべき行動詳細
九　不良の原因と認べき事由詳細
十　本人の最も嗜好するもの
十一　如何なる地方に生活せしや
十二　里子に出せし事ありとせば其年月及歸家せし時の年月並に其行先きの職業住所氏名生計の程度
十三　身體の健否若し病氣ありとせば如何なる病症なるや及其發病の原因並に時期
十四　現に健康體なりとも曾て大病に罹りしことありや否や若しあれば其年月及病名
十五　寢小便するの惡習あるや否や
十六　改善退院後に於ける豫定業務
右の通り相違なし
年　月　日　依賴人　何　某　印

（第三號）　印紙　在院誓約書

拙者儀今般入院御許し被下候に付ては在院中は職員一同の教訓に從ふべきは勿論諸規則は堅く遵守可仕候也

年　月　日　何　某　印

前書何某一身に關しては在院中如何樣の儀出來候とも拙者等引受決して御院に迷惑相掛申間敷は勿論尙左の條々堅く相守り申すべく候

一　規定の院費及食費は毎月三日限り前納致すべく候事

二　在院中本人諸規則命令に違背致し候節は相當の罰に處せらるゝも異存申間敷事

三　本人不正の爲め感化方法執行上に必要なる親權は總て委任致し候事

右の三ケ條約定致し候處確實也仍て保證人連署を以て誓約書差入候也

年　月　日　住　所　依頼人　何　某　印

住　所　保證人　何　某　印

成田山感化院長石川照勤殿

備考　入院の手續は前記の書面を本院に差出すを以て其手續を終るものにして此他何等面倒の方法無く又此の書面と雖も依頼人希望によりては本院にて代書するも差支なし從來參觀せられたる諸君の中より本院は單に本山信徒の希望者のみに限り其依頼に應ずるものかは千葉縣下の依頼者のみに限り入院せしむるかとの質問を受けたることあれ共固より如斯き制限すべき理由なし本院は成田山新勝寺の私立經營しつゝある感化事業なれば何れの家庭何れの地より依頼せらるゝも差支なきなり

又

本院基本金の蓄積

明治四十一年三月本院を千葉町より成田町へ移轉せし以來各慈善家より本院へ寄附せられたる金員を蓄積し將來の基本金を作るの方針を採り着々實行中恰も前掲の如く宮内省内務省及本縣より本院へ事業資金として金圓の下賜あり依て政府の斯道に對する意嚮奬勵も玆に存するを知れるも本院より進んで寄附金を受けんとするの方法を採るは往々世の誤解を受くるの嫌ひあるを以て全然勸募方法を採らず一に篤志家の同情義損に任せ其結果として現下は金貳千貳拾九圓九十七錢と勸業債券（十圓券）七十四枚（三月三十一日調）とを有するに至れり殊に感服すべきは成田町々民諸君の美風にして一朝其家人に死者あるときは其追薦供養の爲に大抵本院に金圓を寄附し其意を表せらるゝことになり居れり

尙は此基本金蓄積の外本院は銀行預金七百拾八圓五拾九錢を貯蓄せり

右は本山御開帳の折該御開帳を紀念すべく右施設費として本山主より寄附せられたる金員及特に此内へと寄附せられたる金員となり依つて本院は本金を基礎として將來本院附屬の果樹園を建設するの見込を以て本金を預金しつゝあるものなり

本院は不動尊本堂脇、本院門前、成田停車場内、東京深川不動堂並に梅濱成田山出張所以上五ケ所へ喜捨箱の設置あり大正十年四月一日より大正十一年三月卅一日に至る各慈善家より本院に寄附せられたる金品並に該芳名尙篤志家より投入せられたる喜捨箱の金額左の如し但し本金は全部基本金として貯蓄し毫も本院經費に使用せざるなり

寄附金品の分

但し各團體より寄贈せらるゝ雜誌等は之を略せり

一金　參圓　石川眞助殿（成田）
一金　壹圓　松永政吉殿（東京）
一金　壹圓　佐藤思助殿（成田）
一金　貳圓　日本大學角力部殿（東京）
一金　貳拾圓　竹田しん殿（成田）
一金　貳圓　福島健二殿（成田）
一金七拾五圓　田中花阿嵒殿（東京中野）
一金五拾圓　ライオン齒磨本舗小林商店殿（東京）
一金　五圓　高安元三郎殿（成田）
一金　貳圓（生徒菓子料）　小沼英夫殿（茨城玉川）
一金　壹圓（同上）　外山内友名殿（東京）
一金　壹圓（同上）　和田富造殿（東京）
一金　壹圓（同上）　金子金次郎殿（横濱）
一金　貳圓（同上）　五木田金一郎殿（東京）
一白砂糖一貫目　同明子殿（同）
一金　貳圓（生徒菓子料）　石井りう子殿（成田）
一金　參圓（同上）　金子元藏殿（東京）
一金　參圓（同上）　右同人殿
一金　五圓（同上）　坂井與市殿（東京）
一金　壹圓（同上）　眞鍋貞淺殿（四ツ街道）
一金　貳圓（同上）　佐藤左平殿（栃木佐野）
一菓子澤山數回　淺井壽子殿（成田）
一菓子澤山數回　石井唯助殿（成田）
一乾饅純澤山　右同人殿
一菓子澤山　野口島子殿（東京）
一菓子澤山　雨宮定貴殿（東京）
一果物澤山數回　林よし殿（千葉）
一生魚澤山　岩井仁平殿（東京）
一雜記帳十册　白石金之助殿（成田）
一饅頭生魚澤山　白石梅子殿（成田）
一赤飯しるこ澤山　豐田勇三殿（成田）
一果樹赤飯澤山　藤本三郎殿（成田）
一赤飯澤山　大竹寛殿（成田）
一生徒全體の理髮（毎月一回）　日本赤十字社殿
一博愛（毎號）　岩立幸次郎殿（台北）
一台法月報（毎號）　右同人殿
一窓の光（同上）　ライオン講演會本部殿（東京）
一ライオンコスモス（同上）
以上の中特に生徒菓子料として寄附せられたる分は直に菓子を買ひ與へ若しくは生徒娯樂費に供し居れり

喜捨函の分

一金壹圓九拾七錢　四月
一金貳圓九拾四錢五厘　五月

一金貳圓貳拾四錢　六月
一金壹圓四拾三錢五厘　七月
一金貳圓四拾參錢九厘　八月　九月
一金參圓拾壹錢七厘　十月
一金貳圓七拾貳錢五厘　十一月
一金壹圓七拾錢　十二月
一金參圓拾八錢五厘　一月
一金壹圓八拾壹錢五厘　二月
一金貳圓拾七錢　三月
合計貳拾五圓七拾四錢壹厘

終りに臨み各入院生の金額を擧げんに

○自費生は食費衣類夜具文具書籍雜費一切の費用として毎月三日迄に左の頭書金額を依頼人より本院へ差出せしむ

一金　拾　圓　年齢滿八歳以上十歳まで
一金拾貳圓　同十一歳以上十三歳まで
一金拾參圓　同十四歳以上十六歳まで

○減費生は家計の都合上前記の金額丈出金し能はざる向きに限り本院に於て其幾分を補助するもの

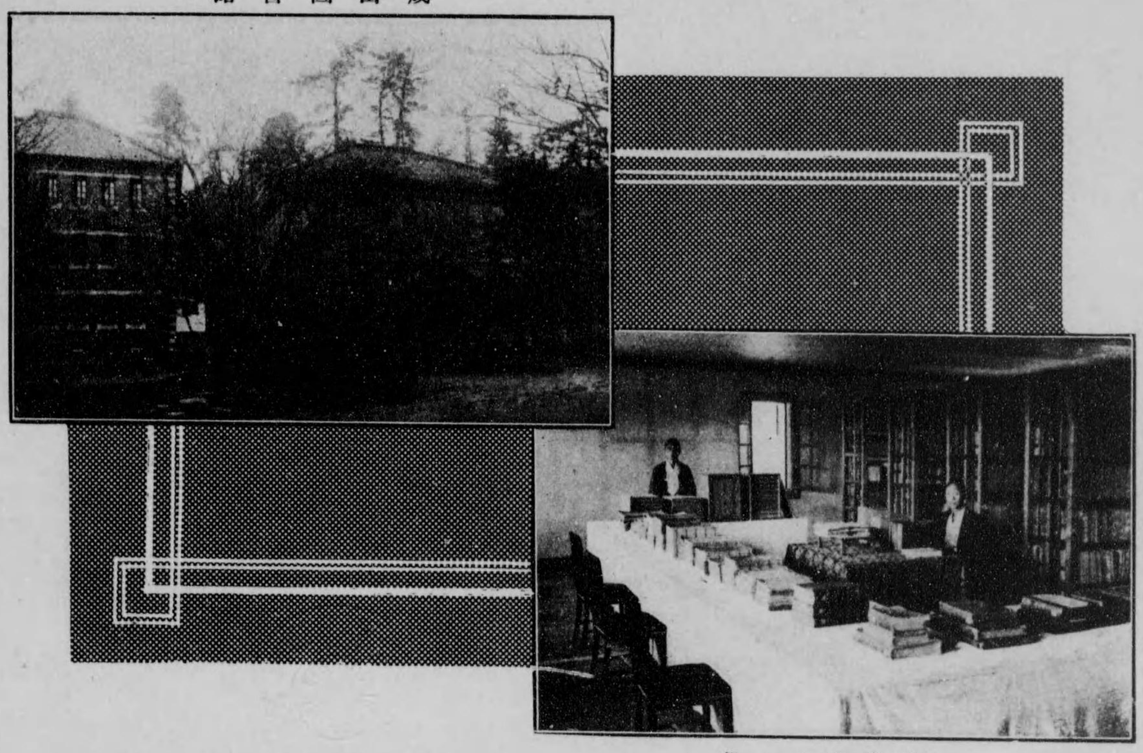
○院費生は全部補助するもの

入院の際は各本人現所持する衣類書籍文具等實用に適するものは持參せしむ　以上

成田圖書館一覽

開館滿二十年……七九
建築……八一
經費……八二
職員……八三
藏書……八四
圖書の增加……八四
閲覽人及貸出圖書……八五
特許帶出一覽……八六
閲覽狀況一覽表……八七
規則……八八
館外帶出規則……八九
圖書寄贈者芳名……九〇
雜誌新聞寄贈者芳名……九一

成田圖書館



書庫内の一部

私立成田圖書館一覽

◎開館滿二十年

大正十年度年報に創立滿二十年と題し、聊か吾人の希望を述べ置きたりしが、人事齟齬多く未だ其豫約を果すに至らざりしは赧顏に耐えざる次第なり。

本館は明治三十五年二月一日を以て開館せられたるものなれば、本年一月三十一日を以て滿二十年に達せり。滿二十年と申せば人間の丁年にして、男子なれば兵役の義務にも服し、一人前の人として世の中に立たねばならぬ年齡なり。我圖書館は果して一人前の圖書館と立派に世の中に通用する丈けに成長せしや否や。其批判は第三者の公論に委すとして、吾人自ら省みて恆悔たるものなきにあらず、元來本館を產める父母は山主石川大僧正にして、本館の素質は成田山五事業の一なり。父母と素質とに於て申分なく、又成育上の營養分に何等缺乏せる所なし。故に誕生以來滿二十年間に於ける成長活動に不健全の點ありしとせば、夫れは申すまでもなく養育の任に當れる、主任以下館員の全責任なりとす。此點に就きては深く自己の責任の輕々ならざるを感ず。

元來我國に於ける圖書館は、遠き足利文庫や金澤文庫等の時代は別として、近く維新以後に至り初めて歐米のそれに倣ふたる設立を見るに至りたるは極めて近來の事に屬し、他の文化的施設中最も遲れたる憾みあり。國稅を以て維持せらるゝ所謂國立圖書館たる『帝國圖書館』が明治五年四月の創立にして、去四月廿四日上野公園內同圖書館に於てその五十年紀念祝賀式を擧行せられたるも、現在の建物の落成と與に稍や國立圖書館らしき形式を具備するに至りしは、明治三十ル年三月なりしなり。隨て『圖書館令』の如きも、明治三十二年十一月十一日初めて勅令を以て發布せられ、爾來三十九年、四十三年、大正十年と三回の改正を經て今日に至れる始末にして、維新後教育問題に關しては朝野とも熱心に經營と發展とに努力せられたるも、文部省も民間有志者も、狹き教育機關たる學校にのみ重きを置きて、眞の國民教育機關たる圖書館は頗る冷眼視せられ閑却せられたる嫌なき能はず。

本館創立當時に在りては、全國官公私立圖書館は其數に於ても寥々晨星のく、其の藏書及設備に於ても實

に不完全なるを免れざりし。其の頃は今の日本圖書館協會も文庫協會と稱し、其會員も極めて少數にして、總會若しくは協議會等を開きても、出席者は十四五名か多くも三十名内外の有志者に過ぎざる有樣なりしが明治三十七八年日露戰役終局の頃より、勃然として圖書館熱發り、今日にては文庫協會が圖書館協會となり機關雜誌を發行し、總裁、正副會長、評議員、幹事、地方支部役員等所謂幹部丈にても數十名の多きを數へ會員數は全國に亘り名譽會員、特別會員、通常會員、終身會員を合せて九百八十餘名に上り。更に圖書館數も官立四十二、公立三百六十九、私立四百十五、合計八百二十六館の多きに達せり。之を歐米のそれに比較しては言ふに足らざるべけれども、滿二十年前の本館開館當時を回顧すれば、隔世の感なき能はず。

今試みに其内容を一瞥すれば、官立に於て東京の十三、地方の二十九。公立に於て東京の二十一、地方の三百四十八。私立に於て東京の二十四、地方の三百九十一と云ふ割合なり。就中山口縣の官立一、公立八十九、私立三十一、合百二十一館を有するを第一位として、長野縣の官立一、公立九、私立五十一を有せるを第二位に推すべし。顧りて我千葉縣を一顧すれば、公立四、私立十二、合十六館あれども、其實際に至りては汗背の感なき能はず。隣縣なる茨城に於て官立一、公立六、私立十合十七館なれば其數に於ては、伯仲の間に在り。埼玉縣の公立十・私立四、合十四館に對して稍や誇るべきのみ。概して帝國の中心たる東京附近に於て甚だ振はず、却て南滿洲及關東州の租借地に於て二十二館を有せるは健羨に耐えざる次第なり。

去四月全國圖書館大會を東京に開き、其際約一千名に近き會員中勤續滿二十年以上に達せるもの、二十二名を表彰し、表彰狀と紀念品とを交附せられたり。本館主任高津親義氏も被表彰者の一人として之れに加はりたるは、一面本館の歷史を事實に物語るものなれども、他面より觀察すれば、本館の事業が古色蒼然生新の活動を缺き、所謂化石せる傾きなき歟、吾人の大に誡心注意を要する點なりとす。故に吾人は將來益々奮勵努力して、館主兼館長の本館設立の盛意を體得し、社會一般の本館に對する期待と希望とを滿足せしめ、斯の如くして自己の天職に殉し、負ふ所の責任を全ふせんことを期す。

◎建築

本館木造　二階建　五十五坪
建築費　金九千貳百〇九圓拾七錢四厘
書庫煉瓦造　三階建　三十坪
建築費　金壹萬參千貳百四拾八圓八拾錢貳厘
附屬建物木造及煉瓦造　百十一坪五合餘
建築費　金七千三十二圓十四錢二厘
計
建坪　百九十六坪五合餘
建築費　金貳萬九千四百九十一圓十一錢八厘
敷地　壹千貳拾八坪

本館は最初水產物品評會會場として造りしものなれば、其位置と云ひ、其間取りと云ひ、圖書館としては稍や不便なれども、事情止むを得ざれば、其儘各所に修繕を加へて之を閲覽所に宛たり。

書庫は、帝國圖書館を始め、各書庫を參觀して、地方相當、位置相應に加減斟酌し、最も書架と光線と通氣との割合に注意し、裝飾外觀等を顧慮せず、唯實用と堅牢と防火との三點を主としたり。而して其容量は平均幅十一尺七段の書架九十基を据附たれども、既に增築の必要に逼れり。

附屬建物は、事務所、應接所、閲覽人休憩所、廊下、事務員住宅、物置、便所等なりとす。事務員住宅は、四戸約八十餘坪にして、主任以下重なる館員に住居せしめ、一面は常在當直に宛て、一面は安心館務に從事せしむる方針を取れり。從來本館設備の完からざるものは、暖房器と夜間點火の用意充分ならざりしの二點なりしが、四十三年十一月に於て、成田電氣事業完成したれば、本館は第一着に、四十燈、百五十二燭光の裝置を爲し、四十四年一月より直に夜間開館を實行したり、夜間開館は、平均五時間の延長にして、之に一ケ年平均開館日數三百三十日を乘ずれば、實に壹千六百五十時間、從來一日の開館時間平均九時間とすれば百八十三日間、卽ち約六割の增加なれば、それ丈閲覽者の便利は增加せられたる割合なり。玆に特記すべきは成田電氣會社が、四十四年一月夜間開館實施以來大正六年一月に至るまで、每月點火料金中へ二萬キロワットの無料寄附を繼續せられたる好意を深謝す。

◎經費

本館經費は一に出版界の狀況に伴ひ一定の豫算なし。最近に於ては一ヶ年約六千圓内外にして、大略總經費の約三分の二は圖書購入費にして、三分の一は俸給賞與館員養成費營繕費雜費等なりとす。創立以來の概算を擧ぐれは、

明治三十四年	九、〇〇九、一七四	（本館建築費を含む）
同　三十五年	一、八一六、三七四	
同　三十六年	一、六一一、五五〇	
同　三十七年	一、九七五、〇〇〇	
同　三十八年	二、六九三、五八三	
同　三十九年	三、三四〇、九七五	
同　四十年	二三、二七八、九九一	（書庫建築費を含む）
同　四十一年	三、九六三、八三五	
同　四十二年	五、四六〇、二二三	
同　四十三年	六、四三四、九五八	（第一印刷目錄刊行）
同　四十四年	五、一七一、六七七	
大正　元年	六、六六三、五三七	
同　二年	五、〇七四、八二七	
大正　三年	五、一六〇、七六〇	（第二印刷目錄刊行）
同　四年	五、二九〇、二三二	
同　五年	六、一六七、五五二	
同　六年	五、七二一、八八五	
同　七年	六、一二九、八一五	
同　八年	六、三七一、七六〇	
同　九年	五、八二八、一七五	
同　十年	六、八四五、二六〇	
合計	金拾貳萬四千百拾圓拾四錢	

內譯

金五萬參千九百貳拾八圓九拾八錢（建築費／營繕費）

但創立の際新勝寺及館長子許より移したる約壹萬五千冊の價格並に寄贈圖書々購入費として寄附せられたる金額等は總て本項に算入せす

金參萬參千九百貳拾八圓九拾八錢（經常費）

金參萬六千貳百六拾圓貳拾九錢（臨時費）

以上費目中圖書購入費の外、他の諸費目は前掲を以て其の全部竭したるものにあらず。建築營繕に於ける材料人夫經常部に於ける薪炭筆紙等其多くは新勝寺大經濟中に含まれて、別に算出せざるもの多ければなり。

◎職員

館主兼館長	石川照勤
主任	高津親義
司書	荒木照定
同	成田善亮
事務員	高田定吉
同	小川益藏
事務見習	渡邊清

館主兼館長は卽成田山貫首大僧正石川照勤師にして、一般外界にては館長とは唯空名なるべしと想像せらるゝ人もあらんが、事實は決して爾らず。啻に館務の大綱を總攬せらるゝのみならず、購入圖書の撰擇及其手續等は勿論、內外多忙の身を以て、館務の大小は殆ど其獨宰せらるゝ所なり。

高津主任荒木成田兩司書以下館員全部は、和衷協力各員事務を分擔し、又互に相輔けて館務遂行の敏捷を圖れり。

五事業の職員も毎年報に多少の交替を見ざるなし。中に就きて圖書館は比較的變化少なかりしが、開館以來の移動を擧ぐれば、前に青葉貞治氏、文屋留太郎氏の死去、加藤萬作氏の退職、齋藤陽一、文屋一の解職あり、代りて山內卯之助、渡邊清の二人入館し、今回山內卯之助成田小學校へ轉任して小川益藏新たに入館せる等なりとす。然も熱心なる館長猊下督勵の下に、開館以來茲に滿二十年、兎に角多少の進步と發展とを續け、社會の文化と公益とに貢獻し來れり。

本館構內には附屬住宅四棟ありて、重なる館員は悉く構內に住居せしむ。是れ本館の特色とする所にして往古以來成田山の從業者使用方針に準じ、非常なる事故あるにあらざる限りは、猥りに其人を替えず、安んして一身を其事務に託せしめんが爲なり。凡そ從業者に安心を與ふるは。事務に忠實ならしむる唯一の方法にして、殊に圖書館の如き、永久的にして地味なる。系統的にして緻密なる、而して勤務時間は他の諸學校等に比較して三倍し。日曜大祭及寒暑等の休暇なき、殆ど常住的業務に服する事業に於て、殊に必要なる良法なりと信ずればなり。

◎藏書

明治三十五年開館當時に於ける本館藏書は、約壹萬五千冊內外に過ぎざりしが、爾來逐年增加して、大正十年三月末日現在數は

和漢書　六萬八千九百五十三冊
洋書　三千四百七十六冊
合計　七萬二千四百二十九冊

を算するに至れり

本館藏書中、他に特色あるものなしと雖も、佛書の八千餘冊、殊に秘密部の豐富なると、學者の研究調査に資せんが爲めに勗めて、新刊の辭書類、叢書類を網羅したると、白鳥博士等の好意に由りて得たる、朝鮮本六十九部三百六十五冊等は、本館の貴重書として些か誇る所なり

其他康平弘安の古寫本、慶長已前の古版本、古德碩學の書入本、手澤本、洋書に於ては一千五百年代の古刊本、其他多少の由緒歷史附のものなきにあらざるも煩はしく之を擧げず。

◎圖書の增加

本館の圖書は三種の方法に由りて增加す、第一は館長の購入及寄贈、第二は新勝寺公費を以て購入するもの、第三は一般有志家の寄贈なりとす、已上の第一と第二とに就て又三種の區別あり。第一種は館長の認めて以て有益なりとしたるもの、第二種は讀者より備付の請求ありて、館長の是認したるもの、第三種は一般讀書界の趨勢傾向に注意して、館事務員より請求するもの是なり。

本館圖書購入費には、別に豫算なるものなし。故に其の財源は一に館長の私囊と新勝寺公費の一部とに依る。要は本館の購入は出版界の隆替如何に在りて、本館は唯有益と認めたる新刊書を網羅せんことを努むるのみ。

開館以來の增加の割合は、一ヶ年約三千五百冊にして、將來の增加率は、必ずしも此標準を以て律する能はずと雖も、今日は各部門共稍や一通り具備したるを以て、今後の增加は、最も愼重に撰擇すべければ、其價値や必ず見るべきものあらん。

◎閱覽人員及貸出圖書

年度	開館日數	閱覽人員	貸出圖書
明治三十五年	三一五	二、四五二	三、九二三
同三十六年	三三三	三、四四八	五、八六三
同三十七年	三三五	三、四三七	六、五九〇
同三十八年	三四一	四、一三九	五、九三八
同三十九年	三二六	四、四三七	九、四九二
同四十年	二七七	六、二二八	一一、二九七
同四十一年	三二六	六、五八九	一二、〇三八
同四十二年	三二八	六、九一七	一二、六五七
同四十三年	三二六	一四、六四八	三二、八五八
同四十四年	三二七	一八、六四三	四二、八一〇
大正元年	三二六	二〇、〇六四	五四、四〇二
同二年	三二四	二〇、〇九八	七五、八二八
同三年	三二三	二四、二二五	九五、九七六
同四年	三一八	三一、五五四	一〇四、一六六
同五年	三二二	二九、六二一	八八、七九六
同六年	三二三	三四、一八六	九〇、一〇四
同七年	三二三	三一、一五一	七三、八一九
同八年	三二〇	三二、四六一	六六、二〇一
同九年	三二九	三三、三一五	六六、五七八
同十年	三二三	三四、八六六	六三、九四四
合計	六、四六五	三六二、四七九	九二三、三七〇
昨年度一日平均人員	一〇七人九分		
昨年度一日平均書冊	一九七冊九分		

明治四十年度より稍增加の傾向を示したるは、館外特許帶出を實施したるに基き、四十三年度以後の激增は主として、(一)目錄の完成(二)新入藏書を重なる閱覽人、學校、團體等へ告知方を實行せると(三)夜間開館の實行等は其主因なるが如し。殊に近來一般に讀書の趣味を解し來ると、就中附近農家の本館を利用するもの著しく增加せる結果なるべしと思考せらる。

貸出圖書の割合は文學語學を首位に、歷史傳記之に次ぎ、近くは工學產業等の實務書類を閱覽するもの增加し來れり。

昨年度に於ける閱覽人員三萬四千八百六十六人を職業別とするときは左の如し

學生(中學生程度以上)	九、八三五
實業家	六、〇九二
婦人(女學校生徒を含む)	三、八九二
僧侶	一、三八二
敎員	一、二八一
官公吏	三〇四
其他	三、三一六
兒童及新聞閱覽人	八、七六四

◎特許帶出一覽

明治三十八年二月、特許帶出實施以來、今日まで特許票を附與せし人員は、五百四十九人なり、其內住所の移轉又は死亡等に由り、特許權の消滅せしものは二百五十三人あれども、千葉教育會附屬圖書館、京都智山勸學院、成田中學校、成田高等女學校等の番外貸出を加ふれば、現實に三百人に相當すべし、殊に千葉縣教育會附屬圖書館への貸出は一回二百冊以上三百冊以內期限九十日の定なり。而して此の多數特許者中、期限を過て注意を受けし如きはあれども、未だ規則に依りて律せざるべからざるが如き甚だしき反則者を見ざるは本館の窃かに慶ぶ所なり。尙三十八年以降帶出者及帶出圖書の累年統計を揭ぐれば左の如し

明治三十八年度	一一〇八回	二九一五冊
明治三十九年度	一二八八回	三〇二〇冊
明治四十年度	一三五三回	三一七一冊
明治四十一年度	一四二一回	三三二九冊
明治四十二年度	一四九二回	三四四〇冊
明治四十三年度	五九八五冊	
明治四十四年度	七〇二〇回	一一九七四冊
大正元年度	八八四六回	二〇〇六四冊
同 二年度	八〇三八回	二二八六〇冊
同 三年度	九一八〇回	二〇五五六冊
同 四年度	一六二一六回	三〇二〇六冊
同 五年度	一四六一〇回	二五〇九八冊
同 六年度	一六七一〇回	二八〇五四冊
同 七年度	一六五八四回	二九四六九冊
同 八年度	一七三四六回	三二四六一冊
同 九年度	一七九七二回	二八一一〇冊
同 十年度	一九五八六回	二九〇六八冊
合計	一六二二一〇回	二二九三六二冊

本館は地方青年團と、小學校教職員諸氏とに對し、特に借覽の便宜を寄與しつゝあり。是れ其齎す所の效果頗る廣く、且つ團長校長等之れが責任者たるが故に本館事務取扱上にも甚だ便宜多ければなり。而して近來附近の青年團にして、此の種の團體借覽申込增加の傾向あるは、喜ばしき現象なり。

◎大正十年度閱覽狀況一覽表

	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	合計	百分比例
開館日數	二九	二八	二七	三〇	二九	二九	二七	二七	二六	二六	二六	二九	三三五	—
宗教	二〇三	二九一	三九一	二七九	三〇二	二六五	二九二	一九四	一五三	一五〇	一二四	二九一	二、八七八	四・五
哲學、教育	三五六	四〇九	三〇九	二七九	二七六	三三四	二九五	四四〇	三二九	一九六	二七一	四四九	四、一一〇	六・四
文學、語學	二、三七五	二、五五三	二、九二一	二、九三五	三、二一六	二、七一二	一、九五九	二、三六〇	二、二四七	二、〇三〇	一、九三五	二、七六〇	二九、七一〇	四・一
歷史、傳記、地誌	六五一	七六三	八五二	六八九	七一七	五九三	五一九	六〇〇	五九九	六〇〇	三六一	七三四	七、六八七	一二・一
法制、經濟、統計、社會學	三八七	四五八	四六九	四六四	四三八	五〇二	四一三	四六〇	四五〇	三九二	三九一	四四三	五、二三二	八・二
數學、醫學、理學	二一〇	三六九	四三七	四〇二	二七〇	二九一	一九三	三六八	二七九	一九七	二六三	三六七	三、六六五	五・七
工學、兵事	三三四	三九七	四六五	四〇九	三五〇	三二〇	二九三	三三五	二八三	三八〇	四一〇	三五四	四、五〇一	七・二
諸藝、學藝、產業	六一	三二三	四九九	八〇九	七六九	五八四	四八一	二六四	四三三	二七四	二九〇	五三八	六、一五六	九・二
類書、叢書、隨筆	五、一四七	五、七六〇	六、三四九	六、二一六	六、三三九	五、六〇一	四、一四五	五、〇八八	四、七七六	四、四七六	四、〇〇三	六、〇五五	六三、九四四	一〇〇・〇
合計	一七七・四	一九八・六	二三五・一	二〇七・三	二一八・五	一九三・一	二四三・八	一八八・〇	一八三・六	一七二・一	一五〇・九	二〇八・七	一九七・九	—
一日平均	一、四〇三	一、四四九	一、五七二	一、五二三	一、六六五	一、二七五	八八八	九五三	九九四	一、〇〇八	一、〇〇〇	一、四六二	一、五二〇	—
館內閱覽人員	一、五五八	一、四二六	一、五九〇	一、六五〇	一、六五〇	一、八八二	一、七一四	一、七一〇	一、七八〇	一、六七八	一、五五二	一、四一二	一、七四三	—
館外帶出者	二、九六一	二、九七五	三、一六二	三、一六二	三、三一五	三、一五六	二、六〇二	二、七二三	二、六七二	二、五五二	二、四二二	三、一八四	二、九、五六六	—
合計	一〇、二一一	一〇、二一一	一四、一四九	一〇五、七四	一〇八、八	一〇、一五六	一四、三一三	一〇〇、一九	一〇一、六	九八、一	九二、七	一〇九、七	一〇七、九	—
一日平均														

◎私立成田圖書館規則

第一條　本館ハ主トシテ普通圖書、佛書、雜誌等ヲ蒐集シテ廣ク公衆ノ閲覽ニ供シ一般社會ノ智德啓發ニ裨益スルヲ以テ目的トス

第二條　何人ニテモ滿十二歳以上ノ者ハ本館ニ來リテ圖書ノ借覽ヲナスコトヲ得

第三條　本館ハ左ノ時限ヲ以テ開閉ス

	開館時限	閉館時限
一月	午前九時	午後八時
二月	午前九時	午後八時
三月	午前八時	午後九時
四月	午前八時	午後九時
五月	午前八時	午後九時
六月	午前七時	午後十時
七月	午前七時	午後十時
八月	午前七時	午後十時
九月	午前八時	午後九時
十月	午前八時	午後九時
十一月	午前九時	午後八時
十二月	午前九時	午後八時

第四條　本館ノ定期ノ休日ハ左ノ如シ但臨時休館ハ其時々掲示ス

歳首　自一月一日　至同五日　館内掃除　毎月一日

紀元節　二月十一日　紀念日　六月九日

天長節　八月卅一日　天長節祝日　十月卅一日

曝書期　九、十月中　凡十日以内

歳末　自十二月廿八日　至同三十一日

第五條　本館圖書閲覽ハ總テ無料トス

第六條　圖書閲覽希望者ハ圖書閲覽證ヘ求需ノ書名册數番號及住所職業氏名月日ヲ記入シ貸渡所ヘ提出シテ書册ヲ借受クベシ

第七條　貸附圖書ノ員數ハ求覽人ニ對シ一時ニ和裝書ハ二種十二册洋裝書ハ二種二册ヲ限リトシ和洋併借ノ時ハ各其半數ニ過グルヲ得ズ

但語學ニ關スル辭書ノ併借ハ此ノ制限外トス

第八條　借受ノ圖書ハ閲覽室外ヘ携帶スルコトヲ得ス

第九條　過失ト故意トニ關セズ借受ノ圖書ヲ紛失シ又ハ汚損毀傷シタル時ハ同一ノ圖書若クハ相當代價ヲ辨償セシム但汚損ノ狀況ニ依リ本文ヲ斟酌スルコトアルベシ又其行爲ノ次第ニ依リ一ケ月乃至一年間登館ヲ謝絶スルコトアルベシ

第十條　本館ノ規則ニ違背シ又ハ本館臨時ノ掲示ニ從ハズ不法ノ行爲アル者ハ其情狀ニ依リ一ケ月乃至一ケ年間登館ヲ謝絶スルコトアルベシ

第十一條　閲覽ヲ普通、婦人、少年ノ三區ニ別チアレバ猥リニ他席ヲ侵スベカラズ

第十二條　閲覽所内ニ於テハ一切音讀、談話、喫煙ヲ禁ズ

第十三條　何人ニテモ圖書ヲ寄贈セラルヽトキハ其目錄員數及住氏名ヲ詳記シ寄贈圖書ニ添テ送付セラレタシ但寄贈圖書運搬費用ヲ自辨シ難キ向ハ時宜ニ依リ本館ヨリ之ヲ支辨ス

第十四條　凡ソ公衆ノ閲覽ニ供シ若シクハ保管ヲ請フノ目的ヲ以テ本館ニ圖書ヲ委託セント欲スル者ハ其事由目錄員數ヲ詳記シ先ヅ本館ヘ照會シ承諾ヲ得タル後其圖書ヲ送致サルベシ

委託ノ圖書ハ館藏ト同一ノ取扱ヲナスベシ

委託ノ圖書ハ厚ク保藏スト雖不幸火難盜難其他天災ニ罹リテ損失敗亡ヲ來スコトアリトモ本館ハ其責任ニ任ゼズ

第十五條　館外圖書貸出特許規則ハ別ニ之ヲ定ム

以上

◎成田圖書館圖書貸出特許規則

第一條　本館圖書帶出ノ特許ヲ得ントスル者ハ左記ノ手續ヲナスベシ

一　特許票附與願書ヲ差出スベシ

二　特許票附與願書ニハ保證人ヲ要ス

三　特許票附與願書ノ保證人ハ現ニ成田町ニ居住スル者ニシテ本館ノ指定セル者ニ限ル

四　保證金五圓ヲ預納スベシ

五　成田中學校、成田高等女學校、成田幼稚園、成田山感化院教職員ハ各主任若クハ理事ノ證明ニ依リ特許票ヲ交附ス

六　新勝寺徒弟及詰合員ニ限リ同寺執事ノ證明ニ依リ成田尋常高等小學校職員ニ限リ同校長證明ニ依リ特許票ヲ交附ス

七　五、六項ノ場合ニハ四項ノ保證金ヲ要セズ

第二條　本館ハ前條ノ手續ヲ了シタル上ニテ特許票ヲ交附ス

第三條　貸出圖書數ハ一回ニ付和裝書ハ二種十册以内洋裝ハ二種二册以内トス和洋併借ノ時ハ各半數以内トス

第四條　貸出期限ハ一週間以上三週間以内ノ範圍ニ於テ本館ノ見込ヲ以テ其時々之ヲ定ム

第五條　期限ニ至リ尚續借セントスル者ハ一旦返納シ更ニ借受ノ手續ヲナスベシ

但他ニ同書ノ借覽ヲ請フモノアル時ハ續借ヲ謝絶スルコトアルベシ

第六條　特許借受ノ圖書ト雖モ本館ニ於テ要用アル時ハ臨時返戻セシムルコトアルベシ

第七條　特許票ヲ得タル者ニシテ他所ヘ轉居スルカ其他事故アリテ本館圖書ノ借覽ヲ要セサル時ハ其旨屆出ヅベシ

第八條　保證人死亡其他ノ事故ニ依リ資格ヲ失ヒタル時ハ更ニ保證人ヲ定メ定式ノ證書ヲ差出スベシ

第九條　左記ノ一ニ該當スル圖書ハ帶出ヲ許サズ

一　大部ノ圖書

二　各學科ノ事彙、字書、類書、書目、新聞紙

三　來觀閲覽人ノ請求多キ圖書

四　貴重高價ナル圖書

五　新刊圖書ハ二ケ月乃至三ケ月後定期刊行書ハ裝釘ノ上ニアラサレバ貸出セズ

第十條　借覽期限ヲ經過シ本館ノ注意ヲ受クル二回ニ及ビ尚返戻セザル時ハ本館ハ特許票ノ效力ヲ取消シ其事情ニ依リ再ビ之ヲ付與セザルベシ此場合ニ於テハ保證金ヲ以テ帶出圖書ノ代金及其費用ニ充テ尚不足ヲ生ズル時ハ保證人ニ辨償セシムベシ

第十一條　借受圖書ヲ紛失シ若クハ汚損シタル時ハ本人及保證人ハ辨償ノ責ニ任ズ

第十二條　圖書帶出ハ開館時間中ニ限ルモノトス

第十三條　特許票ヲ返附スル時ハ直ニ保證金ヲ還附スベシ

以上

大正十年度 圖書寄贈者芳名

青木榮豐 四
秋本文庫 一
淺田文庫 一二
安達一郎 一一
安達次郎 一九
石井午太郎 二
石川照勤 六三
石川正英 一
市川億太郎 一
伊藤忠總平 一
今泉嘉一郎 一
岩澤友雄 二
岩瀨由太郎 二一
岩立幸次郎 五
上田恭輔 一
エジソン翁誕辰祝賀會 二
大阪府立圖書館 二
大竹又次郎 三
大塚篤三 九
大橋圖書館 一
小川保 一五
小野圭次郎 一
小野七之助 一
數見省三 一
片山力 一
金澤高等工業學校 一
京都帝國大學圖書館 一
陸鉞巖 二
外務省情報部 一
慶應義塾圖書館 一
啓明會事務所 一
高野照典 一
國際協會 二
國際聯盟協會 八
國勢院第一部 二
湖北村役場 一
佐賀圖書館 一
佐藤秀吾 一
山東經濟時報 一
時事新報社 一
鈴木藤吉 一
關川藤右衞門 一
泉瑞敏正 一
台灣總督府圖書館 一
高田定吉 三
拓殖局 一
竹村秀壽 一
田島周太郎 九
千葉縣知事官房 四
貯金局 一
土屋正 三
帝國森林會 一
鐵道省運輸局 一
鐵道大臣房文書課 一
銃子測候所 一
寺內章明 一
東京高等工業學校 一
東京市養育院 八
東京女子高等師範學校 二
東京帝國大學圖書館 一
東大寺圖書館 一
富山市立圖書館 一
長岡外史 一
長岡市立互尊文庫 二
行方喜一 五
鍋島直映 八
奈良女子高等師範學校 一
南葵文庫 一
日本新花道會 一
日本赤十字社 一
日本石油株式會社 二
林正一 九
日比谷圖書館 一
福田宏一 二
藤井舊繼 一
藤崎照嶼 一
米國大北新報社 二
堀田家農事試驗場 二
前田珍男子 一
松平承乘 一
三橋新 一
三菱造船株式會社 一
室賀文武 一
文部省 一
文部省普通學務局 一
山內卯之助 二
山口縣教育會 一
山口縣立圖書館 一
山田富藏 一
山本久 一
結城豐太郎 一
吉田銀治 六
林業試驗場 四

大正十年度 雜誌新聞紙寄贈者芳名（每號寄贈者のみを掲ぐ）

石川照勤
愛と力
赤い鳥
アメリカンレビューオブレビューズ
醫學及醫政
英語研究
エジア
海事新報
オリエンタル、レビュー
改造
解放
學燈
香取新聞
懸奏
合掌
家庭と佛教
漢詩
後援
高野山時報
高野の光
國家及國家學
債券時報號外
濟生會々報
史學雜誌
慈航
淑女界
實生活
自働道話
支那
社會改善公道
社會事業
社會と救濟
善
修養世界
新公論
眞言
新修養
新小說
神變
水產界
精華
政教新論
精神運動
青年傳道
第一義
大正詩文
大日本私立衞生會雜誌
大日本農會報
中央公論
中央美術
中外新論
千葉縣山林會報
通俗學術講演集
帝國教育
帝國在鄉軍人
哲學研究
東亞之光
統一通信
東京朝日新聞縮刷版
東洋學藝雜誌
にひはり
日本學校衞生
日本勸業銀行月報
日本美術界
農商新報
農村研究
乃木式
俳諧雜誌
美術講報
ひたち
佛教學雜誌
佛教講談
佛教新聞（旬刊）
佛教新聞（奈良）
文藝倶樂部
ヘラルドオフエシア
變態心理
奉公
マルゼンス、アナウンスメンツ
道
文部時報
陽明主義
倫理講演集
六條學報
旅行案內
勞働精神
ロンドンレビューオブレビューズ
我等
ザ、スチューデオ
石川甚兵衞
外交時報
國家學會雜誌
日本及日本人
三田評論
岩立幸次郎
台法月報
台灣日々新聞
陰陽新聞社
陰陽新聞
牛込新報社
牛込新報
英語青年社
英語青年
謠曲界發行所
謠曲界
エツクスワイ社
えつくすわい
初等數學
小川保
新青年
上村觀光
禪宗
金星堂
金星

露光量違いの為重複撮影

258.2
101

皇道擁護團本部
皇道新報
神戸隆太郎
三田新聞
國際聯盟協會
國際聯盟
國民英學會
中外英語
國譯密教刊行會
祕鍵
佐瀨角三郎
千葉縣農會報
而眞會
密宗學報
史談會
史談會速記錄
十善會
十碧寶窟
純正美術社
純正美術
常總民友新聞社
常總民友新聞
城東公論社
城東公論
新興社
新興

新勝寺
關東新報
慈善新報
無憂光
新總房新聞社
新總房
杉山晴耕園
露
須田寬治
角力雜誌
審美書院
美術の日本
生活社
平民
正民新報社
正民新報
關川博道
脚氣豫防救濟會雜誌
國家醫學會雜誌
兒科雜誌
實驗醫報
治療藥報
皮膚科及泌尿器科雜誌
東京醫事新誌
日本消化機病學會雜誌
臨床醫學

臨床月報
石油時報社
石油時報
宣揚社
神道
第一公論社
第一公論
千葉醫學專門學校々友會
千葉醫學專門學校雜誌
千葉公論社
千葉公論
千葉庶民新報社
千葉庶民新報
千葉每日新聞社
千葉每日新聞
智嶺新報社
智嶺新報
帝國圖書館
帝國圖書館報
銚子測候所
千葉縣氣象報
天台發行所
天台
東海美術社
東海美術
東京市養育院
東京市養育院月報

東洋哲學發行所
東洋哲學
富井宗之助
木太刀
名古屋通俗圖書館
名古屋通俗圖書館報
成田高等女學校
校友會雜誌
成田山延命院
横濱貿易新報
成田中學校
校友會雜誌
日本弘道會
弘道
日本圖書館協會
新刊圖書目錄
圖書館雜誌
日本藥學會
藥學雜誌
林正一
株式世界
福田會育兒院
フクデン
豐山派宗務所
豐山派宗報
富士川游

兒童研究
佛教慈德會
慈德
文化農報
文化農報
古川與一郎
ポケット
堀田家農事試驗場
農場通信
前橋市立圖書館
前橋圖書館報
滿蒙讀書會
讀書會雜誌
密教研究會
密教研究
茗溪會
教育
森江書店
三寶
山村豪
向上
輪業世界社
輪業世界
六大新報社
六大新報
早稲田大學圖書館
早稲田學報

大正十一年六月十五日印刷
大正十一年六月十八日發行
（非賣品）

發行所　成田山新勝寺

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷人　佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

編輯兼發行人　淺井照次
千葉縣印旛郡成田町百九十三番地

露光量違いの為重複撮影

258.2
101

皇道擁護團本部
皇道新報
神戸隆太郎
三田新聞
國際聯盟協會
國際聯盟
國民英學會
中外英語
國譯密教刊行會
祕　鍵
佐瀨角三郎
千葉縣農會報
而眞會
密宗學報
史談會
史談會速記錄
十善會
十善寶窟
純正美術社
純正美術
常總民友新聞社
常總民友新聞
城東公論社
城東公論
新興社
新興

新勝寺
關東新報
慈善新報
無憂光
新總房新聞社
新總房
杉山晴耕園
露
須田寬治
角力雜誌
審美書院
美術の日本
生活社
平民
正民新報社
正民新報
關川博道
脚氣豫防救濟會雜誌
國家醫學會雜誌
兒科雜誌
實驗醫報
治療藥報
皮膚科及泌尿器科雜誌
東京醫事新誌
日本消化機病學會雜誌
臨床醫學

臨床月報
石油時報社
石油時報
宣揚社
神道
第一公論社
第一公論
千葉醫學專門學校々友會
千葉醫學專門學校雜誌
千葉公論社
千葉公論
千葉庶民新報社
千葉庶民新報
千葉每日新聞社
千葉每日新聞
智嶺新報社
智嶺新報
帝國圖書館
帝國圖書館報
銚子測候所
千葉縣氣象報
天台發行所
天台
東海美術社
東海美術
東京市養育院

東京市養育院月報
東洋哲學發行所
東洋哲學
富井宗之助
木太刀
名古屋通俗圖書館
名古屋通俗圖書館報
成田高等女學校
校友會雜誌
成田山延命院
横濱貿易新報
成田中學校
校友會雜誌
日本弘道會
弘道
日本圖書館協會
新刊圖書目錄
圖書館雜誌
日本藥學會
藥學雜誌
林正一
株式世界
福田會育兒院
フクデン
豐山派宗務所
豐山派宗報
富士川游

兒童研究
佛教慈德會
慈德
文化農報
文化農報
古川與一郎
ポケット
堀田家農事試驗場
農場通信
前橋市立圖書館
前橋圖書館報
滿鐵讀書會
讀書會雜誌
密教研究會
密教研究
茗溪會
教育
森江書店
三寶
山村爺
向上
輪業世界社
輪業世界
六大新報社
六大新報
早稲田大學圖書館
早稲田學報

大正十一年六月十五日印刷
大正十一年六月十八日發行
（非賣品）

編輯兼發行人　淺井照次
千葉縣印旛郡成田町百九十三番地

印刷人　佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所　成田山新勝寺

◎土曜會

本山經營の教育事業も、既に五指を屈するに至れり。即ち中學校、圖書館、高等女學校、幼稚園、感化院とす、悉く成田山新勝寺なる根幹より榜生せる枝葉なれども、其事に從ふ人も多く、且つ場所を異にし、執る所の事務も同じからざれば、隨て相互の事情に迂遠なる傾きあるを免れず。如斯は獨り外來者に不便なるのみならず、同胞たる五事業の關係が、甚だ密接を缺くの憾みあり。依て各部の主任者を以て會員とし、毎月第一土曜日を以て開會し、直接に經營者たる山主僧正の指導を仰ぎ、又各自の意見をも開陳し、報告し、披露することゝして、去明治四十四年二月十一日の紀元節を以て、其發會式を擧げ、爾來繼續開會しつゝあり。本會會員は

會長山主　石川僧正

中學校（主監）名川彦作
（評議員）三橋金太郎

高等女學校（主監）矢野太郎
（理事）石川甚兵衛

感化院（主任）大友惟誠

圖書館（主任）高津親義
（司書）成田善亮

幼稚園（保育主任）山口政子
（幹事）三橋重兵衛

小學校々長　小林庄太郎

外に

小野寺清三郎（女學校理事）　川島能三郎（女學校事務掛）

關川博道（幼稚園理事）　淺井儀助（幼稚園會計主任）

高川直三郎（中學校々醫）　山内平治郎（女學校々醫）　の十七名なり

終